



# 魔女は二度死ぬ

鈴埜

- はじめに
- 序章
- 一章 小説家カサンドラ
- 二章 魔女の課題
- 三章 突然の出来事
- 四章 悪意ある予知
- 五章 魔女は歩く
- 六章 魔女は二度死ぬ
- 終章 凍れる騎士と古き女王
- 奥付

## はじめに

---

『魔女が二度死ぬ』に目をとめていただき、ありがとうございます。  
この作品は、本格ミステリーにはほど遠い、なんちゃってミステリーではありますが、市販のミステリー小説程度の殺人描写があります。  
その点を十分に確認していただけるよう、宜しくお願い致します。

また、作品小説本文、表紙絵の著作権は鈴埜（すずの）にあり、無断転載、個人的な目的以外での複製、改変はお断りします。

## 序章

---

二人の間に風が吹いた。特徴的な赤い髪を優しく撫でて行く。長い間沈黙に満たされていた空間に亀裂をもたらしたのはどちらだったのだろうか。

少しだけ話さないかという誘いを、初めから知っていたかのように受け入れ今に至る。

それはそうだ。

知っているのだ、間違いなく。

「知っているのになぜ？」

問われて彼女は笑う。

「なんでだろうね」

彼女は笑っている。その笑顔が忌々しくて顔が歪む。

「いい？ よく狙って。痛いのは嫌だわ」

「なんで」

「どちらかというそれは私の台詞じゃないかしら？」

「……」

両手をぐっと握りしめて彼女を睨み付ける。油断してはならない。そう、彼女は知っているのだ。回避するつもりかもしれない。

そうだ。その可能性がもっとも高い。

従った振りをして、受け入れる振りをして裏をかくつもりなのだ。

押し黙ったこちらの様子を面白そうに眺めている。二人の間は数歩の距離。一瞬の隙が明暗を分けるだろう。

「どちらにしる、私はお前に不幸を呼ぶ」

「……どちらにしる？」

「ええ」

笑う。

さっきから、そうやって笑ってばかりだ。

いや、ずっと、彼女の怒った姿など見たことがない。

いつも、その美しい容貌を際立たせる笑みを浮かべて、少しだけ首を傾げて問うのだ。

その効用を正しく理解し、人々を動かす。

矮小な人間を、意のままに操るのだ。

彼女は魔女だ。

絶大な力を持つ、人在らざるもの。

「どちらにしる。私が生きていてもいなくても……」

それは、と問おうとした。だがそこで、魔女が動き出す。

「おいで」

両手を広げて、こちらの動きを待つのだ。

「おいで、愛しい人」

彼女は人の目のない場所では常にそう呼んだ。

「さあ、お互い楽になろうじゃないか」

数歩の距離は永遠に続く道のりのようだった。

そして――、

命が消えゆくそれにちらりと目をやり、踵を返す。

肩にかかる赤い髪を左手で跳ね上げた。

背筋を伸ばし、笑う。

艶然と微笑む。

やりとげた自分を励ますように、足早にその場を立ち去った。

残されたのは一つの遺体。

風が吹く。

赤く、燃えるような美しい髪が舞う。

## 一章 小説家カサンドラ

---

浅い眠りの中で、何度か呼ばれたような気がした。

誰の声だったのか、よく覚えていない。知人のそれに聞こえたり、まったく知らない相手のものに聞こえたり。

ただ、悲しみを帯びた呼びかけに、私は吸い寄せられた。

吸い寄せ、たぐり寄せられて近づくと、自分の身体がゆっくりと重さを増していくのがわかった。

ああ、覚めてしまう。

目が覚めてしまう。

あと少しで近づけるのに。

手を伸ばそうとして、それがなかなか難しい行為だと知る。重たくて、持ち上げることのできない指先。

最後の浮上。

――目の前に飛び込む、タレ目。

「っ！」

驚きの小さな叫びを飲み込む間に、その青いタレ目はずっと身を引き離れていった。

「メグちゃん……やあ、起きた？ もうすぐ着くよ」

にこやかに笑うと、彼は口の端を人差し指で叩く。

初めは何を意味するのかわからなかったが、思い当たって自分の横に置いたカバンからハンカチを取り出す。恥ずかしさに顔を赤くしながらよだれの跡をぬぐう。幸い洋服にまでは浸食していなかった。一緒に出した鏡を見て、自分の姿を確認する。鼻の頭に散らばる高校時代からのそばかすはいつも通りとして、栗色の髪の毛が乱れに乱れていた。これじゃあ今年で二十二なんて信じてもらえない。まあ、幼い顔立ちのせいで普段から五つは若く見られるがこれでもしっかり大学を出ているのだ。

それにしても、いったいどんな寝方をしたらこんな髪になるのだろう。ショートボブははねるとやっかいだが、手櫛でなんとか元通りに直す。ついでに、洋服のしわもチェックした。ベージュのシャツにチャコールブラウンのニッカボッカー。長時間バスに乗ると聞いたのでこのスタイルを選んだ。黒のショートブーツに押し込まれた足が、むくんでいてちょっと辛い。

「長旅だったからね、呆れるほどよく寝てた」

最後に大きく体を揺すって笑うと、彼――バート・ケンプルは自分の席へと戻っていった。体格のいい彼が腹の底から笑うと、空気がびりびりと震える気がする。短く刈り込んだ茶色の髪が座席の上にひょっこりとはみ出している。彼は規格外に体がでかい。バスの椅子が窮屈そうでバートの周りにはあるものはみんな小さく見えた。本来ならメグが近寄ることを警戒せねばならない人だ。こちらの幼さが強調されてしまう。

通路をはさんで向こうに座るチャールズ・タンディが紙コップに入った珈琲を差し出した。

「メグさん、飲むかい？ 水分補給に」

よだれで流した分とまでは言わないが、意図するところは明らかだ。

少し口をとがらせて、ありがたく受け取った。茶髪に茶色の瞳の彼は、見かけはどこか冷たく陰のある感じなのだが、実際は良く気が利く人だ。髪が全体的に少し長めなのが、彼の顔に影を作って暗く見えてしまうのだろう。せっかく同行者三人の中でも一番見目が良いというのに、もったいない。背格好も体格も、標準的で実はメグの好みのタイプだ。並んでも良い感じの身長差というのが大事なポイントだった。

熱すぎず、それでいて冷めていない。ちょうど良い温度の珈琲を口に含むと、窓から見える深い森へと視線を走らせた。

どこまでも続く長く細い道は、小さなバスが一台通るのがやっとの広さしかない。その代わり、きっちり道路として舗装されている。そうしておかないと、普段行き来のないこの一本道は、二ヶ月もしないうちに森に飲み込まれてしまうそうだ。

真っ直ぐどこまでも続く道を、時速百五十キロのスピードですでに六時間走り続けている。最初ははらはらしたが、考えてみればこの森から急に人が飛び出してくるわけもなく、また、普段から住み着いているウサギやタヌキ、シカといった動物たちは道の向こうから聞こえてくる音の正体を熟知しており、そのときばかりは道から離れじっと過ぎ去るのを待つ。

反対に、アクセル全開で走り続けなければいつまで経っても目的地へたどり着けないのだろう。つくづく不便な場所にあるなとため息をついた。

「ミトラくん、ほら、見えてきたよ」

青い顔をした三人目の同行者アーサー・クルーズが顔を覗かせる。黒縁の眼鏡の奥に疲労が滲み出していた。黒髪をきれいになでつけ普段ならスーツにまったく隙がないだろう彼は、三十分も走らないうちに乗り物酔いでダウンしてしまった。メグは乗り物には強くて、本当によかったとつくづく思う。ひょろりと背が高く色白で、普段から栄養のある食事を摂っているのか少し心配になる風貌だ。

彼の示す先には、こんもりとした森の中に突如として現れた人工物があつた。

自然とメグは立ち上がり、通路をふらふらと前へ進む。バートのにやにやとした表情を目の端にとらえながらも、感無量といった感じで胸の前に手を組んだ。

赤い煉瓦を積み上げた森の中の大きな建物は、魔女(カサンドラ)の館と呼ばれる。

その名の通り、魔法使いカサンドラの住まいだ。

魔法使いが魔法を使えないこの【禁猟区】に、百年以上も前、大変な苦勞をして建造したと聞いている。

今回の目的地であり、憧れの地である魔女の館。

メグは幸福感に酔いしれ、息を大きく吸い込んだ。

幸運の始まりは、他人の不幸だった。

良い悪いは、よっぽどバランス感覚に優れているらしい。

原稿をいただきに伺う途中、居眠り運転に巻き込まれたメグの先輩ジム・ローチは、全治三ヶ月の複雑骨折で入院した。

これでもかなり運の良い方だ。目撃者によると、こりゃ死んだなと誰もが思う惨状だったらしい。瓦礫の下からヘルプヘルプと力強い声が聞こえたときは、何かの悪い冗談だと思ったそう。後から現場の写真を見せてもらったが、目の前でベッドに縛り付けられている人物が、この下に埋もれていたというのが嘘みたいだ。

「鍛え方が違う」

「どんな鍛え方をしたんですか。もう、私が一緒に行ったらこんなことにはならなかったかもしれないのに。先輩抜け駆けして先に行っちゃうからですよ」

お見舞いに持って来たフルーツを窓際に置くと、代わりに置いてあったお土産のクッキーをつまんだ。

顔色は悪くない。内臓に損傷がほとんど見られなかったからだろう。濃い茶色の髪に白い包帯が痛々しいが、頭を打ったのではなく切った傷で、脳に問題はないそう。いつも明るい緑色の瞳が健在だったので、メグもほっとする。

顎や腹に付いたお肉に守ってもらったんだと指摘したい衝動にかられるが、怪我人に追い打ちをかけるのは可哀想なのでやめた。病院生活で痩せればいいのにとと思うが、花より食べ物が多い見舞い品では無理かもしれない。メグにできることは少しでもそれを減らして行くことだ。

「出せばベストセラーなくせに、書けない書けないで三年すっぽかされていた先生が、できたから取りに来てくれと言いだしたら、未だ俺の後を追いかけるしか能のない後輩の存在なんて忘れちゃうのも無理ないだろう？」

「その先輩の後ろを追いかけるしか能のなかった私が、今は先輩の穴を埋めようと必死に頑張っているのに。あんまりです」

よよよと泣き崩れてみるが、その先にあるのは固いギブスに覆われた、天井から吊されている足だ。同僚たちに書いて来いと言われている恥ずかしい言葉リストを嬉々として取り出す。ジムは、待て！ と泡を食って止めるが、身動き取れない人間の言葉の暴力など何も怖くない。

実際、有能な編集者であったジムが抜けたせいで、それぞれの負担が増えていた。それに対して文句を言うこともなく、皆、彼の復帰を待っているのだから、これくらいは許されるだろう。本当は自分たちで見舞いに来たいのだがその時間すらない。一番戦力にならない新人のメグが、この大役を仰せつかったのも自然な流れだ。

ああ、とか、うう、とか手の届かないもどかしさを様々な言葉で言い表すジムを尻目に、全体的な配置や色遣い、トータルコーディネートを心がけて託されたコメントを余すことなく書き上げた。

最後にソウガーズと社名も添えておく。

「おまえ、容赦ないな」

ちらりと覗きにきた白衣の天使がくすくすと笑っていた。

マジックをカバンにしまうと、それではと言って立ち上がる。実際、使いつ走りしかできないメグではあるが、それでも仕事は山ほどあった。想像していたよりもジムがずっと元気そうだったということもあり、あまり油を売ってはいられない。

「あー、待て待て」



帰ろうとするメグを、ジムが手招きし、棚に置いてある鞆を指さした。事故当時持っていたものらしく、かなりずたぼろになっている。鞆としてはもう機能しないが、戦友感覚で取ってあるのだろう。崩壊を起こさないよう細心の注意を払って渡すと、ジムはその中を漁って封筒を一通差し出した。ジム宛てのものだった。

「こんなになってはさすがに行けない。課長にも許可は取ってあるから、お前が行って来い」

突然のことに眉をひそめながらメグは封筒の中味を広げる。

「お前も噂には聞いてるだろう？ 『魔女の宴』だ」

途中から、ジムの言葉が耳に届くことはなかった。メグは驚きが胸に広がるのを感じる。

「魔女の宴といっても、別段怪しい集まりなわけじゃない。カサンドラが毎年懇意にしている出版社の担当を呼んで、食事と軽い世間話、今後の予定なんかをあくまで彼女から話があるだけだ。今年はずの他に三社、呼び出しがあって、俺がよく知る奴らだから連絡は入れておく……って、聞いてるのか？ メグ！ マーガレット・ミトラ？」

招待状を持って震えるメグの様子を不審に思ったジムが、おい、と彼女に手を伸ばす。その瞬間、メグは両手を振り上げて喜びを表した。腕が何かに当たったがそんなことはどうでもいい。

「やったーっ！」

あまりのはしゃぎように何事かと看護婦たちが駆けてくる。五分後、病院ではお静かにと、追い出されたメグの姿があった。

魔女カサンドラは魔法使いである。

魔法使いとは、不思議な力を使っていろいろなことをできる者たちのことだ。あまり人に関わらず、独自のルールで人間と共存している。

そんな彼らも魔法を使えない場所があった。それが【禁猟区】で、大昔、たくさんの魔法使いがいた時代、彼らは随分とやりたい放題で世を生きていたらしい。しかし、この【禁猟区】では彼らもただの人となる。魔法使いに狩られることのない場所、という意味と、魔法使いが唯一狩られる場所でありそれを禁ずる――後が怖い――場所、という意味。どちらが本当なのかは分からない。普通の場所と何が変わっているわけでもない。しかし、魔法使いたちはその場所を避けた。彼らが避けるのでそこが【禁猟区】だとわかる。なぜ魔法使いにそんな風に作用するか、いつからそうなのかは一切わかっていない。聞こうにも、魔法使いに出会うことは滅多になく、日常に彼らの影が忍び寄ることはなかった。

だが、物好きにも人と変わらなくなる【禁漁区】に住む者がいた。それがこの世で一番有名な魔法使いであり、魔女カサンドラだ。

彼女は、二百年以上執筆を続ける小説家だ。本人も、魔法使いである前に一人の小説家だと豪語し、彼女の著書は全世界の人々に愛されていた。手がけるジャンルも様々で、恋愛物から社会風刺、児童書からミステリーまで器用にこなす。執筆速度はそれほど早くはないが、遅筆とまで

はいかす、現在文庫化も含めれば二千冊以上を出版していた。メグの勤めるソウガーズからも百冊以上出している。そして、ソウガーズの担当はジムだった。

ここ何十年か、毎年恒例となった魔女(カサンドラ)の宴は、彼女が印税で【禁猟区】へ建てた館に編集者を数人招いて行うもので、最近シリーズ物をすべて完結させたカサンドラが、新しい連載を始めるのではないかとささやかれていた。もしそうなら是非自分の会社でと思うのが当然で、メグもジムから頼むと言われている。今回招待を受けたのが、メグ以外に三人。シンツア・カンパニーの編集者バート・ケンプル。カドケル・ブックの編集者チャールズ・タンディ。そしてコーネル・ライブラリーの編集者アーサー・クルーズ。どこもミステリー枠を抱える出版社であり担当だった。メグのソウガーズも推理物を得意としている。

魔女の館は人が越えることのできない危険な山脈を背にし、南へ六時間車を走らせなければ街へたどり着けない森深くに建っている。なぜそんな不便な場所を選んだのかは語られていない。人が読む小説を書き続けるために、人へ近づくためにそうしているのだと誰かが言っていた。

館が見えてから三十分ほどで館の周りをぐるりと巡る堀を渡り、正面玄関へ着く。今回は一週間ほど滞在できるようにと招待状をもらっており、大きな荷物を抱えて降り立つと、彼女たちを乗せてきたバスは建物の西の方へと去っていった。

代わりに、玄関が大きく開け放たれ、いかにもやり手の執事といった風の老人が現れる。服装からして理想の執事だ。幼い頃、彼のようなじいやにお嬢様と呼ばれるのが夢だったのは内緒だ。後ろには年のいった五十代くらいのメイドと、メグよりも若そうな笑顔のメイドがいた。

「お待ちしておりました、クルーズ様、タンディ様、ケンプル様」

一人一人へ深く礼をしながら執事が述べる。その際頭のとっぺんが見えたが、銀色に染まった髪は数を少なくすることなく彼の口ひげとともに健在だった。声も低く落ち着いて似合いすぎて反対に怖いくらいだった。いったいいくつなのだろう？ 黒い瞳が優しい色をしている。

「ミトラ様。お初にお目に掛かります。この館を取り仕切っておりますヴィクター・キャロウと申します。以後お見知りおきを。ヴィクターとお呼びください」

「よ、よろしくお願ひします」

招待客ではあるが、どちらかというカサンドラに原稿をもらう身としては、ここまで丁寧なもてなしにどぎまぎしてしまう。

戸惑いを隠すようにメグは館に目を向ける。遠くから見たとおりの赤い煉瓦で作られた二階建ての館だ。築百年以上という割りには、手入れが良いのだろう。古びた様子はなく古い建物にありがちなすんだ感じはしない。それどころか、細かく意匠を凝らしたレリーフが、壁のあちこちに埋め込まれていて芸術的価値も高そうだ。

左右対称に作られているわけではなく、左手の奥には少しだけ飛び出して塔が作られていた。あれが事前に聞いている、カサンドラの執筆部屋がある西の塔なのだろう。屋敷は凹の形をしており、中央のへこんでいる部分にかなり凝った中庭があるらしい。先ほどのバスを運転していたのが庭師のサイモンで、彼の腕はすばらしいとアーサーが褒めちぎっていた。見せてもらう約束をしており、今から楽しみだ。

「まずお部屋にご案内いたしましょう。カサンドラ様は夕食の時に皆様とお会いになります」

そう言ってバートたちの荷物を持つとする執事を、彼らは笑って止めた。

「いつもの部屋でしょう？ 勝手にさせてもらいます」

「それではお部屋にお茶をお持ちいたしましょうか？」

「私は結構です。夕食まで寝ようと思ってます。少し回復させないと」

青い顔のままのアーサーが言うと、チャールズも同じようにうなづく。

「僕も薬を飲んでいても少し酔ってしまったので」

「じゃあ俺はいただくかな。ヴィクターさんおすすめのブレンドで」

了解いたしましたと、執事が頭を下げ、年取ったメイドが軽く礼をして下がる。恰幅のよい彼女の後ろ姿が、メグの実家の隣に住んでいた小母さんを彷彿とさせる。くすんだ金髪を後ろでくくっているのもそっくりだ。五人の子どもの躰に追われ、いつも怒鳴っていた。でも、本当は優しく子どもたちを愛しているのをみんなが知っている。小母さんの特製クリームシチューをたまにもらうことがあった。あの味は何年経っても真似できないと母親が言っていた。

「イライザ、ミトラ様をお部屋にご案内するように」

残った若いメイドにそう言うと、彼女も軽く礼をしてメグの大きな鞆に手を伸ばす。

「あ、いいです。自分で運べますから」

「そうおっしゃらずに。こちらです」

細い腕に似合わぬ力でメグの荷物を奪い取り、先に立って歩き出した。メグが慌てて追いかけると、他の三人も中へと移動する。

大きな扉には、獅子のノッカーがあり、メグの中のお金持ちの基準を軽くクリアする。玄関ホールは左右には騎士の像。正面はガラス張りになっていて、中庭が広がっていた。日の光が入りにくい屋敷の中も、そのおかげで驚くほど明るい。

イライザはメグより少し背が高いくらいだった。けれど、驚くほど姿勢が良い。そのせいで自分とはかなりの差があるように思える。

右手に折れると、後ろの三人は階段を上がって二階へ行く。

「ミトラ様は一階奥のお部屋になります。今は一階の客室をお使いになるのはミトラ様だけです。ご安心ください」

何を安心するのだろうか？ ピンとこなくて、首を傾げる。

「お部屋にバスもトイレもございますし。彼らと鉢合わせすることはありません」

そこまで言われて、彼女の言わんとすることによろしく思い至った。けれど、男女のなにやらを心配してくれるのなら、余計なお世話という以前の問題だ。ここに来るまでのバスの中で、三人からのメグの位置づけは完全に妹になっていた。どうも二十代後半から三十代半ばの異性からはそういった目でしか見られない。もう少し上の年代は子ども、その先にいくと孫だ。誰でもそうなので、きっと自分の態度に問題があるのだ。今も気付くまでに時間が空いた。ここら辺が原因なのだろう。

突き当たりの扉を開けてメグを中へ誘うと、イライザは荷物をベッドサイドへ置く。

ベッドにテーブルといったシンプルな作りだが、中庭に面した壁が全面ガラス張りになっていた。今はカーテンも横へまとめられて、外からの光がさんさんと部屋へ注ぎ込んでいる。

「こちらの部屋にはユニットバスがございます。どうぞお使いください。タオルなどのリネン類はこちらにございますが、他に必要な物があればどうぞお申し付けください。呼び鈴を鳴らしていただければすぐに参ります。……お茶はいかがですか？」

バスの中で珈琲をもらったので喉はさほど渴いていない。

「もしよろしければそちらのテーブルにご用意しましょうか？」

彼女がそちらと指したのは、ガラス張りのドアの外。白いテーブルが準備されている。

いらないと言いかけた口が止まる。

「お願いします」

「すぐ準備いたしますね」

弾んだメグの言葉に、彼女もにっこり笑って部屋を出て行く。彼女の後ろ姿が扉の向こうへ消えると、窓の外へ目を向けた。

良い天気の下、きれいに造られた庭を見ながらの午後のお茶は格別だろう。

すぐというのは本当で、メグが部屋から出て席につくと部屋には来ず、庭伝いに外からティーセットを携えてやってきた。

「二時間後にはお夕食ですから、少しだけですが」

と、小さなクッキーを二つメグの前に並べる。

「食堂は庭をはさんでちょうどこの向かいあたりです。玄関ホールをさっきとは逆の方向へ歩いて行くでございます。また夕食の時間になりましたらお迎えにあがりますが、それまではどうぞ自由になさってください。ただ、二階の西側はカサンドラ様のお部屋になりますので、ご遠慮ください。二階に上がったところに談話スペースがございますので、他のお三方もお暇なときはよくそこにいらっしゃいますよ」

「ありがとうございます」

イライザは小さく礼をして再び元来た道に戻って行った。

彼女が準備してくれた紅茶を一口飲む。良い香りに胸が満たされる。

暇ならと言ってくれていたが、暇を感じることはなさそうだ。庭は、生け垣で迷路仕立てになっているようで、これを飲み終わったらゆっくり探検してみよう。こうやって遠目に見ているだけで、楽しい。トピアリーがいくつもあり、本当に力を入れて庭を造っているんだなとわかった。

祖父が同じように庭に命をかけていた人だったので、心のこもった風景を見ると浮き浮きしてくる。

と、目の端に何かが映った。

なんだろうと、カップを置いて左右を見渡す。だが、特に不審なものはない。おかしいかと再びカップへ指を近づけたところで、また見えた。

今度はばっちり目が合う。

それはメグの背よりも上にあつた。

このテラスは庭に付きだしている形になっている。二階の部屋はこの部分がベランダで、つまりメグから見たら屋根ができていようなものだ。一階よりも幅はせまいようだが、そのお

かげでテーブルの真上は雨露をしのげる。

そこから、顔が飛び出している。

年は五つくらいだろうか？ 濃い、褐色の肌にくるくるとした丸い金色の瞳。同じく金色の巻き毛が、今は重力のおかげで逆さまになっている。

思わず立ち上がって下へ行く。

「危ないよ？」

小さい身体が、バルコニーの柵の隙間から身を乗り出しているのだ。

「落ちちゃうよ？」

まったく動じず、少女はそのまま両手を伸ばした。

「ちょっと！ だめよ」

慌ててメグも手を伸ばす。

だが、残念なことに身長百五十センチメートルほどしかないメグは、両腕を伸ばしても彼女に届くことはない。

それでも、少女はずりりとそのまま真っ逆さまに落ちてきた。

「だめだめ、だめだってば！」

なんとかその逆さの向きのまま受け止め、抱きかかえると、それ以上ずり落ちないようにその場に座り込む。

「もおおおお、危ないって」

少女を床へごろんと放り出すと、メグは大きくため息をついた。心臓がばくばくと音を立てる。だが、金色の巻き毛の少女はそんな彼女の様子を首を傾げたままじっとみつめる。百センチメートルもない少女は、黄緑色の、巻き毛と同じようなふわふわしたワンピースを着ていた。だが、バルコニーの柵でこすったか、ところどころ黒く汚れてしまっていた。メグもいつまでも座り込んでいるわけにはいかず、立ち上がると彼女の前にしゃがんだ。

「もう、危ないでしょ。だめよ？ あーゆうことしちゃ」

めっ！ と彼女のちょこんと上を向いた鼻を、人差し指でつまむ。

すると両目をぎゅっと閉じて、口の両端を少しだけつり上げる。笑っているのだ。

自分がどれだけ危険なことをしたのかわかっていないのだろう。

「もー、保護者はどこよ」

と、考えるまでもなくこの真上にいるのだろう。上に届けに行った方がいいかもしれない。

だが、こちらの心配をよそに当の本人はテラスのテーブルに興味をしめし、二つある椅子の一つによじ登ろうとしてる。

「なに？ 座るの？」

突然の珍客だが、メグはもともと子どもが好きだ。こんな可愛い子ならなおさらだった。少し無表情で、ずっと声を上げないのが気になるが、そういった性格なのかもしれない。

「まあ、いいか」

子どもがバルコニーに出るのを放っておくような親だ。少しぐらい心配するといい。

少女の両脇に手を入れ、椅子に座らせる。が、彼女には少し高さが足りないようで、そのまま

机の上に座ることになった。まあ、転げ落ちなければテーブルは広いので問題はない。少々行儀が悪いが、誰も見ていないから許されるだろう。

「食べるなら食べていいよ」

クッキーをじっと見たまま固まっているので勧めると、待ってましたとばかりに手を伸ばす。この年で許可が下りるまで手を出さないという自制心があるのは、なかなか素晴らしいことだ。ティーカップは一つしかなかったので、自分の飲みかけでいいならと言うと、頷いて飲み干した。よっぽどおなか为空いていたのかもしれない。

「お名前は？ 私はね、マーガレット・ミトラ。……ねえ、聞ってる？」

両手でクッキーを持って口をもぐもぐとさせている少女の頬をつつくと、彼女は何度もうんうんと頷いた。

今はお口が忙しいようだ。

「あなたの親もカサンドラに招待されてきたのかな？ 写真では見たことあるんだけど、私初めて会うの。ねえ、どんな方？ 優しい？ それとも、怖い？ バスで聞いた感じだと、ちょっと気まぐれで、でも悪い人じゃないって話だったんだけどな」

世間の魔法使いのイメージは、人間離れした感覚を持ち、人を人と思わない態度で怒らせると大変な目に遭う。もともと人に関わろうとしないが故に、何かで会うことがあればわがままで自分勝手だと言われている。

けれど、メグは、実はカサンドラの小説が大好きなのだ。

「私がね、編集者になろうとしたのは、もしかしたら生きていうちにカサンドラ本人に会えるかもしれないっていうすごい不純というか、単純な動機だったの。ほら、この【禁猟区】を含めた一帯はカサンドラの持ち物で、彼女が許可した人間以外は入れないって言うじゃない？ 【禁猟区】が終わるところにそういった魔法を施しているって。彼女は滅多に外に出ないし、入っていけるのは担当者だけ」

だから、運良く就職できて、運良くカサンドラの担当であるジムのいる部署に配属されたのは、もしかしたらと思った。

そして、さらに幸運が舞い込んだ。

夢にまで見た、魔女カサンドラの館。

「小さい頃から彼女の書く小説が大好きだったの。今まで出版されたもの、手に入るのは全部読んでいるし、全部持っているわ。おかげでうちの本棚はあふれかえってるけど」

少女の金色の瞳を眺めながら、メグは笑う。

「本当に嬉しい。憧れの人なのよ」

両腕を枕にして、テーブルの上に伏せるメグに、少女は少し眉を寄せる。

「ん？ クッキー足りない？ だめよ、もうすぐ夕飯なんですよ。あ、一緒に食べるのかなあ？」

それなら汚れた服を着替えなければならないだろう。そろそろ保護者も彼女を捜し出す頃かも知れない。

二階へ彼女を連れて行くかと頭を持ち上げる。

と、メグのおでこに少女のちいさなふくふくとした手のひらが当たった。

「どうしたの？」

尋ねるが、その動作をやめない。どうやら、なでているらしい。自分は何か慰められるようなことを言っただろうか？ 彼女の行為がいまいちわからず、とにかくありがとうと言っておく。

そこへ、切羽詰まった男性の声が聞こえた。

「ク・ルウ！」

少年と言うには低く、だが、大人の男性にしては高い声に、少女はついと視線を上げる。

「どこだ！ ク・ルウ！」

たぶん彼女の保護者なのだろう。メグは慌てて声を上げる。

「金髪の小さな女の子ならここにいますよ！」

ク、のところでメグの言葉に息を飲み、そして先ほどの少女と同じように顔を覗かせた。

子どもならまだしも、大人が顔を覗かせられるような隙間があるとは、構造的欠陥としか思えない。危ないだろう。

メグは少女を抱きかかえると彼が顔を覗かせた真下へ移動する。

十七、八くらいだろうか？

頭の真っ白なシルクハットを押さえて逆さまに現れた瞳は、青と緑のオッドアイ。どこまでも透き通り、心の奥を見透かすような彼の双眸にすっかり見とれる。目をそらせない。

「すぐ行く」

彼はそう言って頭を引っ込めた。そこでメグもやっと呪縛から解かれ、そばにいるク・ルウに目を戻した。なんだか胸がドキドキする。あまり街では見ないタイプだ。雪のように白い肌がうらやましい。北の方の生まれかもしれない。すっと通った鼻筋とまなざしが、気品さえそなえていた。

「ク・ルウって言うのね」

腕の中の少女は、メグの言葉に口をすぼめて頷いた。

「ク・ルウちゃんて呼べばいいのかな？」

再び頷く。うんうんと満足そうに。

彼が入って来られるように部屋のドアの鍵を開けようと思ったが、それよりも早く庭伝いにやってきた。どこからか庭に出られるところがあるらしい。

「ク・ルウ！ こんなところで何をやっているんだ。どこから部屋を出た」

すごい勢いでやってきたと思ったら、挨拶もなしにまくし立てる青年に、メグは内心むっとする。しかもおかしな格好だ。上から下まで白づくめ。これから新郎としてチャペルで式を挙げるのかと聞きたくなるような装いだ。そして、極めつけは長いマント。空でも飛ぶ気なのだろうか？

彼は勢いを殺すことなく、メグの前で急停止し、ク・ルウをひったくる。そのやり方にさすがのメグも表情を顔に出した。いつもにこにこ笑顔を絶やさないと言われているが、ここまでされてはそれも無理だ。

しかも、上から下までまるで査定でもしているような目で眺めた後に一言。

「君はなんだ？」

誰だ？ でもイラっと来るのに、なんだとはなんだ！

「あなたこそ、何よ」

売り言葉に買い言葉をしてしまったのも無理はないと思う。

ふん、と鼻を鳴らす青年の頬を、抱きかかえられたク・ルゥが両手で掴む。

「キーン！」

それを見て、ああ話せるんだなと、安心した。あまりにだんまりで、口がきけないのかと少し不安に思っていたからだ。相変わらず表情に乏しいが、彼女のその行為がメグに対する態度を咎めているのだとわかる。

彼はそんなク・ルゥに何を言うでもなく、そのまま庭へと歩き出す。

なんとなく腹が立ったので、メグは笑顔で手を振る。

「またね、ク・ルゥちゃん！」

すると、少女は真っ白な青年の肩へ乗り出し、こちらへ大きく手を振った。彼の横顔が不機嫌なように見えたのは、気のせいではないだろう。

その後ろ姿が見えなくなると、腰に手をあて、ふん、と鼻を鳴らす。

ちゃんと子どもを見張ってられない保護者に、どう思われようと怖くはない。だいたいお礼の一つも言えないような常識知らずの考えなど、取り合う必要もない。

だがそこで、彼が十七、八にしか見えなかったことを思い出す。もしかしたら自分より年下だったのだろうか？ 保護者は別にいたのだろうか？

ティーセットはそのままに、部屋へ戻ると姿見に映った自分の顔にうーんと唸る。

確かに今日の格好は、一見少女にも見える少年と以前ジムに評価を下されたこともあった。

性別はともかく、自分がかかなり年若く見られることは自覚している。彼からしたら、年下に見える自分がク・ルゥの面倒を見ているのが気に入らなかったのだろうか？ そんなことを考えつつ、ベッドの上で唸っていると、扉をノックする音が聞こえた。

「どうぞ！」

失礼しますとの挨拶とともに、先ほどのメイドが現れた。

「お夕食の準備が整いました。ご案内いたします」

脱ぎ散らかしていたブーツを慌てて履くと、メイドは絶妙な距離で前に行く。

右手に扉が並んでいるが、ここも客室なのだろう。みな、中庭に面して造られている。

そのまま進んで右手に折れると、左側に階段と、玄関ホールが見えてきた。さっきメグたちが到着した場所だ。

今度はそこで止まることなく真っ直ぐ進む。ク・ルゥ相手に随分話していたらしく、日が陰ってきている。

そして突き当たりを右に曲がると、右手にあるのが食堂だ。

メイドが扉を開けて中へ進むと、三人はすでに席に着いていた。

真ん中に長く大きなテーブルがあり、窓側に三つ、廊下側に三つ席が造られている。南側の席が当主であるカサンドラの席になるのだろう。まだ来てはいないようだ。



ヴィクターが通路側の、一番北よりの椅子を引く。末席だが、年齢を考えれば当然のことだ。カサンドラのすぐ隣に座ったら、絶対に食事を味わうことなどできないだろうから、この位置に感謝する。

「顔色がよくなりましたね」

一番カサンドラに近い席に座るアーサーを見て言うと、彼は短く息を吐く。

「人間、陸の上を歩くのが一番だ。何かに頼ろうとするとああなる」

「アーサーは筋金入りの乗り物酔いだからな」

「一日目はいつも元気がないね」

「仕方ないだろ。人間誰しも苦手はあるものさ」

そんなやりとりをしていると、メグの後ろの扉が開く音がする。目の前の三人が腰を浮かすので、一緒になって半分立ち上がろうとすると、彼女は低い声でそのままですわいと言った。

濃い赤の丈の長いドレスを着た魔女、カサンドラ。豊かな赤毛は肩の下あたりまであり、カールしている。緑色の瞳が翠玉(エメラルド)のように輝いている。しっかりと自分の意志を持った強い瞳だ。

写真通りの自信に満ちあふれた表情に、メグは息をするのも忘れ、見つめた。すっと通った鼻梁にふっくらとした唇。すべてのパーツが主張しあっているのに嫌みにならずお互いを引き立て合っていた。豪華な美女。何かの雑誌でカサンドラのことをそう表していたが、実に的を射た表現だと思う。

ヴィクターが彼女の椅子を引き、ゆっくりと座ると、改めて笑顔を見せる。

「遠いところをお疲れ様。良く来てくれたわね。三人とも、かわりなさそう」

めいめいが頭を下げておかげさまでと短く返事をする。それにいちいち頷きながら、最後にメグで視線を止めた。

「初めまして。バスは大変だったでしょう？」

「あ、あの、いえ。寝てしまったのであつという間でした」

メグの台詞に三人は口元を緩める。

「ジムはどう？ 傷はきれいに治るのかしら？」

「この間見舞いに行きましたが、本人は至って元気でした。お伺いできなくて残念だと言っておりました」

「命に別状がなくて本当に良かったわ」

にっこりと笑うカサンドラに、メグも同じように笑顔を返した。

そこへ扉が再び開く。

「すまない、遅れた。彼女の着替えに手間取って」

「いいえ、軽く挨拶が終わったところ。ちょうど良いタイミングだわ」

さっきのいけ好かない真っ白男だ。食事だからだろう。シルクハットは被っていなかったが、そのおかげでさらに驚く。髪の毛も真っ白だ。だが、老化現象による白髪ではない、色素が抜けたのではなく、それこそ白く染めぬいたように見える。銀髪とはまた違った、不透明な白い髪。それがまた、とても彼に似合っていてきれいだった。瞳の色が青と緑なので、アルビノというわけで

はなさそうだ。

あまりまじまじと見ていては失礼にあたる。視線を外そうと肩越しに後ろをみると、ク・ルウが今度は淡い紫のワンピース姿で駆け寄ってくる場所だった。

彼がカサンドラの隣の椅子を引くが、少女はメグの横に来ると両手を突き出す。小さな子がよくやる、だっこしてのポーズだ。

「おや、嫌われたかな」

魔女が笑いながら小首を傾げる。メグはあたふたと、少女と魔女を交互に見た。だが、白い青年が首を振る。

「いや、あっちが気に入ったんだ」

青年は改めてメグの隣の椅子を引くと、そこへク・ルウを乗せた。

皿の上に乗っているナフキンをこちらへ差し出すので、のど元に折り返して入れてやる。その間に彼も座る。

これで全部の席が埋まった。

「それでは食事にしよう」

カサンドラの号令を合図に、執事とメイドがくるくると無駄なく動き、机の上にオードブルが並んだ。ワインを勧められるが断り、みんなに倣って皿に手を付ける。

「カサンドラ、紹介してはもらえないのですか？」

チャールズが彼女の隣に座る二人を見て言うと、ああ、と彼女は破顔した。

「そうだった。あなたたちが初対面なのを忘れていたよ」

口元をめぐうと、左手を白い青年に向ける。

「こちらがかの有名な白の魔法使い、キィ殿。その隣が私の友人、ク・ルウだ。何年かごとに我が館に遊びに来てくれる。今回はたまたま時期が一緒になったんだ」

「そうだとは思っていましたが。お目にかかれて光栄です。サージェント事件のお話は良く聞きます」

アーサーが言うと、チャールズも続けた。

「メルウェルの事件解決のおかげで、国一つが救われたというお話でしたよね」

みんなの口から飛び出す事件は、メグも聞いたことがある。白の魔法使いのおかげで前代未聞の殺人事件が無事解決したという話だ。変な格好だと思っていたが、彼がああ白の魔法使いというならば納得がいく。その名の通り上から下まで白づくめで、むしろ、今まで気付かなかった自分を呪いたい。魔法使いの館に、魔法使いがいる。魔法使いに出会うことは珍しいが、一人会ったら二人も三人も同じだ。むしろこの奇妙な青年が普通の人間であるほうが難しい。なんたって魔法使いは、人間とは違ったおかしな者たちなのだから。

彼は、三人のおしゃべりに気を悪くする風もなく、かといって一緒になり話すこともなく、当たり障りのない程度に返事を返す。積極的に答えることはない。みんなはそんな魔法使いの態度に、相手が不快にならない程度に水を向け、会話を続けた。

メグは憧れのカサンドラにすっかり酔って、自分はほとんど口をはさむことなく彼らの会話を遠目に眺めているだけだった。

時折ク・ルウがこちらをみつめるので、何か用なのだなとあれこれ世話を焼く。大人と同じだけ、いや、それ以上によく食べる少女は見ていて楽しい。

スープ、魚料理に肉料理を終え、テーブルの上はあらかじめ片付けられた。デザートにチョコレートケーキと紅茶が運ばれて来る。

大人でも腹九分目だというのに、隣のク・ルウは目の前に運ばれてきたケーキに大喜びの様子だ。もちろん、メグも甘い物は大好きなので大変喜ばしい事態である。

「さて、そろそろ今回の主旨をお話願えないでしょうか？」

紅茶を一口飲んで、アーサーが言った。固そうな質感の黒髪をきっちりと七三に分けてなでつけ、黒縁の眼鏡を掛けた彼の顔は真剣だ。先ほどまでのリラックスした彼とは違った、元々の神経質な一面が見える。

「そうですね。普段なら二、三日の滞在で終わるはずが、今回は一週間泊まる準備をして来るようにとのことでした。何があるのでしょうか？」

普段のどこか飄々とした雰囲気を見事に奥へしまい込む姿は、さすが熟練の編集者だ。直前まで盛り上げようと饒舌であったバートとは思えない。

メグもフォークを置いて居住まいを正す。

一週間の滞在が普段と違うと、今初めて聞いた。

彼らの真剣な面持ちに、やっぱり噂の新シリーズのことなのかと不安になる。ジムの代わりに来たはいいが、この三人を差し置いて我が社を押し出すことができるか。やっぱり無理です先輩と叫び出したい気分だ。大丈夫大丈夫と言ってた同僚たちの顔が頭をよぎる。何が大丈夫なもんか。もしこれで、新シリーズが取れなかったらきっと怒るだけでは済まされない。カサンドラは作品を出版する際、一番作風が合っているところへ持ち込む。だから大丈夫。うちが選ばれなかったのは、メグのせいではなく会社のカラーなのだからと再三言われた。

だが、この雰囲気を見ても彼らはそう言えるだろうか。

憧れのカサンドラに会えると舞い上がっていた自分を、後ろからげんこつで殴ってやりたい。

魔女はそんな彼女たちを見て、ふむと口を付けかけたワインを置いた。

両肘をテーブルに突いて、目の前で指を組む。

「それでは、本題に入ろうか」

カサンドラが立ち上がり、食堂の隅にある棚から紙の束を持って来た。席には着かず、そのまま後ろに下がる。

「ここに、私の作品がある。これが――最後の作品だ」

へっ？ と、間抜けな声を上げる。

それだけで、メグの頭の中は真っ白になり、会話は聞こえるが思考が追いつかない。

「悪い冗談です、カサンドラ」

穏やかなチャールズが無表情に言う。

だが、カサンドラも首を振った。

「冗談ではないよ。私はこの作品を最後に筆を折る。もう決めたことだ」

静かに宣言する彼女の言葉に、本気であるとわかった三人も黙る。

「話はミステリー。私の最後の作品をどこから出してもらおうか、悩みに悩んだ。けれどどうしても決められなくてね。ひとつ、ゲームをしようと思う」

「ゲーム？」

心なしか怒ったような声で、バートが聞き返す。

「そう。誰が一番早く真実に到達するか。それを競うゲームだ。この、詩」

カサンドラは自分の後ろにある壁を指した。大きな額縁が掛かっている。そこには文章がつつらと書かれていた。詩だ。

「この詩の示す場所を一番早く突き止めた者に、この最後の作品を与えよう」

魔女は高らかと宣言する。

魔法使いは我関せずと優雅に紅茶のおかわりを頼んでいた。

夜の中庭は、月の明かりに照らされ、昼間とはまた違った趣がある。

メイドの準備してくれた紅茶は、もう完全に冷め切っていた。何度も何度も口からこぼれ出すため息に、自分でも嫌になる。

何十度目のため息だっただろう。目の端にちらりと映った姿に、慌てて席を立った。

まったく同じシチュエーションに笑いながらも、空から降ってくるク・ルゥを受け止めた。

「キィは？ 危ないから、きちんと階段を下りてきてちょうだい」

テーブルの上に座らせて、鼻をつまんでやるが、少女は嬉しそうに顔をくしゃっただけだった。たぶんこれはまた同じことをする。ヴィクターに頼んではしごでも付けてもらった方が早い気がした。

「お茶は冷めちゃってるわよ。ジュースでももらおう？」

けれどク・ルゥはいらないと首を横に振った。

そう、とだけ答えて再び夜の庭を眺める。

テーブルの上に乗っていたク・ルゥが、そのまま匍匐前進してメグの膝の上にちょこんと座った。

「どうしたの？」

と聞くものの、彼女は相変わらず何も話さない。結局あの魔法使いを呼ぶ時しか、声を聞いていない。自分が抱きかかえている少女を上から見ると、向こうも下からこちらの顔を見る。少しだけ口端が上がっているのは、笑っているのだろうか。

なんとなく、そのふくふくしたほっぺたを両手ではさむ。

「せっかく会えたカサンドラが、断筆宣言なんて」

幸運と思っていたのに、とんだことになった。

もしここに来ていなかったら、ここまで落ち込むことはなかったと思う。

そう、今メグは間違いなく落ち込んでいるのだ。

ジムが怪我をせず、彼がここに来て後からカサンドラ断筆の話を知ったら、ショックはショックだろうが、もう二百年も書き続けてきたのだとそれで終われた気がする。本物のカサンドラに

一度で良いから会いたいという長年の夢を叶えた日に、急転直下、小説家としての彼女の最後を知り、もう、ゲームどころではなかった。

「ク・ルゥ！」

またもや同じ風景。シルクハットを押さえて逆さまに顔を出す魔法使いに、慌ててはいとク・ルゥの手を挙げて見せた。

なんとなくだが、彼に落ち込んでる姿を見せるのは自分のプライドが許さない。

「またか。そっちに行く」

引っ込むと、彼はすぐマントをたなびかせてやってきた。足取りに迷いがなく、彼はどこまでも自信にあふれている。カサンドラと同じだ。魔法使いは誰もがそうなのだろうか？

闇の中に浮かぶ白い姿はとても目立った。もっとも白いのが彼の肌。だが、病的ではなくやっぱりきれいだ。

「あんたは宝探しはしないのか？ 彼らは上であーでもないとやっていたぞ」

ク・ルゥを受け取りながら、魔法使いが尋ねる。

あんたと呼ばれてむっとする。そういった表情は彼に対して隠さないことにした。

「ま、あっちの三人の方がここは良さそうだからな」

空いている右手の人差し指で彼は自分のシルクハットを叩いた。きれいな顔に嫌みな色が浮かんでいる。

「キィ！」

ク・ルゥが容赦なく魔法使いの鼻面を叩く。

「なんだよ、ク・ルゥ。僕は本当のことを言ったまでだ」

なんて失礼なヤツめ、と声を上げようとする。が、口から出た台詞はまったくそれとは違ったものだった。

「いいわよ、わかったわ！ 一番最初に突き止めてやるわよ！」

腰に手を当てふんぞり返って言う。

「私が一番に見つけたら、自分の考えが間違っていました。申し訳ございませんでしたマーガレット様って言うのよ！」

魔法使いに向かって、そう、なんでもできる魔法使いに向かって啖呵を切るなんて、常人のすることではない。

後で、このメグの暴挙は同僚たちを震え上がらせた。

## 二章 魔女の課題

---

昼から夜へと堕ちゆくを 誰もが一度は望み給う

冬の大地へ額づく女王  
望み手に入れたその闇を  
羨む者は多かろう  
悲しまぬ者は少なかろう  
夜の息は風伝い  
凍れる騎士をいざなわむ  
氷の裳裾をなびかせて  
騎士は降り立つ ふたりの女王の間に  
遠くに見ゆるはふぞろいのこびとの群れ  
祝宴の声を背に吹きすさぶ赤の丘へ  
古き女王は天を仰ぎ帳を下ろし  
新たな女王は日中に輝く  
闇の冠いただく女王  
羽のある獅子が背に  
目覚めた氷は歩み出す  
雲雀の唄う春の野へは  
冬の茨が多かろう  
山査子の棘がはばかりう  
朝の夢はひそやかに  
凍れる騎士へいざなわれむ

いかなる氷も 新たな女王に触れること能わず

森に囲まれたカサンドラの屋敷は、日差しの割に湿度が低く、気持ちの良い風がいつも吹いている。新緑の季節。心も身体もウキウキと弾んでくる。

はずだった。

メグは仕事にも使っている手帳を広げ、短く唸る。

昨夜思い切り啖呵を切ってしまい、後戻りできなくなった。仕方ないので朝食のときに詩をメ

モに取り、今に至る。

入社当時から使い続けている臙脂の皮の手帳は、祖父から就職祝いにもらった物だ。これでカサンドラに一步近づけたねと、普段気むずかしい祖父の笑顔が思い出される。

部屋に用意された紅茶を楽しみつつ、詩と向かい合っていた。

最初のイメージと同じく、何度読んでも暗い印象を受ける。

闇、夜の息。そういったものが死を連想させるのだ。

そうやって考えて、メグは一つ目星を付けた。伊達にソウガーズーのカサンドラファンを名乗ってはいない。彼女の作品の中でこの詩と符合するものを思いついたのだ。

そうと決まれば突き合わせてみよう。

部屋を出ると、そのまま突き当たりまで行く。そこは書庫になっていた。

カサンドラがゲームの開始を告げると、バートが真っ先にカサンドラへ詰め寄った。今までは彼女がふさわしいと思う出版社へ原稿を渡していた。それを、最後の作品だというのに、こんなふざけた方法で決めるというのか、と。

チャールズも同じようなことを言っていた。バートほど怒りを表してはいなかったが、普段から落ち着き、冷静である彼が珍しく厳しい言葉を投げかける。

一番最初に動いたのはアーサーだった。彼は真っ先に席を立つと書庫の本を借りて良いかと尋ねた。カサンドラは、最後に本をきちんとあった場所へ戻せば好きにしていっていいと言った。彼は遅くまで調べ物をしていたようだ。

古めかしい扉を開けると、本の匂いがした。大好きな匂いだ。昔から親しんできた空気を胸にいっぱい吸い込む。

本が所狭しと並べられている。管理している人が几帳面なのだろう。カサンドラの作品がかなりあるが、その多くがきちんと年代順に、そして本の大きさと分類されていた。だが、今はそのところどころが抜けている。三人が手当たり次第取っていったのかもしれない。それにしても、一段全部抜けている物もあり、少々やりすぎだ。

もしかしたらないかもしれないと少し心配に思ったが、目的の物は簡単に見つかった。

「すごい、初版本だわ」

当然と言えば当然だろうが。そして、献本なのだろう。

緑色の古めかしい作り。メグはこの装丁が大好きだった。金色の飾り文字で記される、『ヴァルヴァナス・サーガ』の文字。

大切に扱わなくては罰が当たってしまう。

両腕で大事に抱え、再び本棚を見回す。抜けている本に、正解があるのだろうか？ 彼女の作品にヒントがあると、信じて持っていったのだろうか？ もしかしたら、カサンドラの本はまったく関係ないのかもしれない。

そんなことを考え出すと、焦りに胃の辺りがきゅっとしめる感じがする。

落ち着けと自分に言い聞かせ、メモ帳を開く。朝から思いつくままに記した単語が並んでいる。

。

ヴァルヴァナス・サーガのヴァルヴァナスとは、騎士の名前だ。彼は氷の騎士と呼ばれ、玉座

を不当に追われた女王アルメルダと旅に出る。彼らの世界では、巫女が神託によって王、または女王を指名する。しかし、代替わりしたばかりの巫女は、実は神託によって選ばれたのではない、偽の巫女で、金と権力を得る代わりに偽の神託で新しい女王を指名した。そうになると、アルメルダは不要な人物と判断され、玉座を追われて神殿へ閉じ込められてしまう。だが、実は彼女は何百年に一度あるかないかと言われている、巫女と王を兼任する者だった。前の巫女が亡くなった際の巫女の神託が、今の偽の巫女によって上手く彼女へ伝わらなかったのだ。新しい女王が指名されたとき、初めてアルメルダは神託を受け、自分が巫女でもあることを知る。このままでは本当の王であり、巫女である自分が死に国が滅んでしまうと、彼女は自分に仕え一番信用できる氷の騎士に相談する。ヴァルヴァナスは彼女の言葉を信じて、二人で代替わりのときに送られる巫女の印を探す旅にでる。

この氷の騎士が、詩中の凍れる騎士に当たると、メグは考えたのだ。古き女王と新しき女王もいる。他の小説にもたくさんの騎士は出てくるが、氷や、凍れるといった呼称が付いていたものはなかったはずだ。

自分の知識を信じて頷くと、メグは書庫を後にした。次はシンボルの照らし合わせだ。

書庫をそのまま左に折れ、玄関ホールへやってくる。メグはそのままガラスの扉を開けると、中庭に出た。見事な庭だ。

出てすぐの場所に、大きなトピアリーがある。翼の生えた人の姿に見える。天使かなにかかと思うが、その下に小さな猫もいた。カサンドラの作品に、楽園を守る天使が登場するの思い出す。彼は常に黒猫を従えていた。メグが抱えているヴァルヴァナス・サーガにではないが、この中庭には、小説をモチーフにしたトピアリーがあるのではと思う。

中庭をさらにすすむと、あった。騎士のトピアリー。こんな細かい部分までよくぞと感心する。庭師のサイモンの腕は、本当にすばらしい。

これが氷の騎士だと間違いなく言える確証はないが、心に留めておく。

そこへ、声がかかった。

「おや、メグちゃんもこの騎士に目をつけたんだ」

タレ目のバートだ。黒のスラックスに水色のシャツ。さすがにネクタイまでは着けていない。「凍れる騎士の、凍れるって部分がまだよくわからないけど、騎士はエントランス脇の二体とこのトピアリーぐらいしかないからね。あっちは二体で一組のようだし、表現するなら双子のとか詩に入っていそうだ」

「おはようございます」

朝食はばらばらで、彼とは会っていなかった。

「おはよう。こんなすてきな陽気なのに、僕らはカサンドラに振り回されまくりだ。参った」

昨日と変わらず少し怒ったような声。彼が三人の中では一番このゲームに腹を立てていた。

「いつもなら、どんな風に過ごしていたんですか？」

もし、この問題を出されていなかったら。

もし、カサンドラが書くことを辞めると言っていなかったら。

「そうだなあ。夜はみんなで食事。そこで今後の刊行予定とかを話したり、最近の出版界の動き



をカサンドラに訊かれたり。彼女の本の、世界的な評価とかもね。朝昼は自由で、僕らも日頃顔を合わせることもないから、ほら、二階の階段を上がったところにあるソファで日がなだらだと話し続けたり、こちら辺を迷子にならない程度散歩してた。リフレッシュ休暇みたいなもんだったな。仕事だから行き帰りの費用も出るし、宿泊代から食事代ぜんぶタダ。さらに料理がホテル並みに旨いときてる」

確かに、朝食の卵のゆで加減といい、焼きたてのパンといい、年配のメイドが指揮をとっているらしいが、すばらしい物だった。昨日の夕飯は味がまったくわからなかったが、たぶん美味しかったのだろう。

「良いことづくめですね」

「だろ？ カサンドラの担当で本当にラッキーってヤツだった」

それも、あと数日で終わってしまう。

気持ちがそのまま顔に出たのか、バートがメグの頭をなでる。

完全に子ども扱いだが、なんとなくそれを受け入れてしまった。実際彼は二児の父親だそうだが。今年で四十になると言うが、まったくそう見えない。話し方や雰囲気は彼を若く見せる。標準よりも少し太っているが、反対に貫禄があっていい感じだ。

「魔女だって感情がある。俺たちと変わらない。彼女が辞めるというのを、俺たちが止めるなんてことはできないよ。考えてもみろ。二百年だ。二百年、ずっと書き続けて来たんだ」

人間には計り知ることのできない長い期間だ。

「ただ、このゲームというのはなんだか俺の知ってるカサンドラに思えなくてね。彼女は自分の作品を餌に、こんなことをする人じゃないと思っていたんだが……。まあ、いたずらじみたことは何度かあったけど。本当にどこの出版社にしようか悩んでしまったのかもしれないなあ。とにかく、一編集者としてはなんとしても原稿は手に入れたいから頑張るしかないんだけどね。結局彼女の手の平の上で踊るしかないのさ」

バートはじゃあ、と手を振って庭の奥へと消えていった。大きな背中が寂しそうに見える。

確かにいつまでもうじうじとしているのは情けない。もっと訳のわからない要求をする作家も多い。ソウガーズで最後の作品を出版できたら最高なのは確かなので、メグは改めて気合いを入れると続きの作業に没頭する。

騎士はいったん置いておこう。他にもまだまだチェックしなければならない物がある。

何よりも、急務なのは最初だ。

出だしの一文、『昼から夜へと墮ちゆくを 誰もが一度は望み給う』だ。これを解かねば始まらない。どんな意味なのだろう？

誰もが一度は望むこと。それが、昼から夜へ墮ちてゆくことだという。この『墮ちる』の字が、墮落といった悪い意味ではまっていく言葉に思えて、昼と夜があまり良い意味で使われていないように受け取れる。

「日の光に当たってられるような仕事から、あまり人様に言えたもんじゃない裏の仕事へってことかしら？ 確かに、『悪』って憧れる子も多いけど、映画じゃないんだから……」

昼と夜がそのままの意味だったら？ 昼から夜になることが嬉しい。でも墮ちるという悪い

意味。

「不倫でもしてるのかしら」

言ってみて、馬鹿らしいと切り捨てる。

意味から内容が思い当たらないということは、やはりシンボルが何か表しているように思える。小説の中では、玉座を太陽、神殿を月の神殿とも言っていた。

「昼、太陽、光。夜、月、影」

怪しい独り言をつぶやきながら、庭を西へ行く。

すぐそばに屋敷を取り囲む堀が見えるが、柵もなくあまり近づくと危なかった。かなり深そうだ。

西側の一階は、二階よりも少し北へ飛び出ている。完全に左右対称にはなっていない。それをぐるりと壁伝いに回り、一番西側へ出ると、メグを部屋まで案内してくれたメイドが堀のふちで一生懸命草むしりをしていた。

上を見上げれば、魔女の執筆部屋、西の塔が見える。

素通りするのも悪くて、声を掛けた。

「大変ですね」

足音でわかっていたのか、彼女は突然話しかけたわりには驚くこともなく、ゆっくりと顔を上げた。

「今の時期、放っておくとすぐ伸びてしまうので。ミトラ様は詩の解説ですか？」

軍手の甲で額の汗を拭いながら笑う。紺色のワンピースに白いエプロンで、メイドの中のメイドスタイルだ。金髪をしっかりと結び上げて鼻の頭にメグと同じそばかすが見える。

「そうなんです」

肩を落として言うと、イライザは再び笑った。

「そちらも大変ですね。進みませんか？」

ずっと見下ろす形が何となく嫌で、メグもしゃがむ。

「実は、昼と夜のシンボルが見つからなくて」

「ああ、最初の一文ですね」

イライザはうんうんと頷く。

「屋敷の中にはいくつか符合しそうなものはありますけど、あの墮ちるを望むのがうまく当てはまらなそうですよね」

「そうなんです」

さすがは屋敷に勤めているだけある。詩をそらんじているのだろう。

「そういえば、あの詩はいつ頃作られたものなんですか？」

せっかくだから色々情報を聞きだそうと、本をそばの石の上に置くと、メグも草むしりを始めた。

「私が勤めだしたのが五年前なんです、そのときにはもうありましたからね。普段から掃除をしていますが、あの額縁の後ろ側の壁紙が、微妙に色が変わっているのだからかなり前のものだと思いますよ」

「今回のために作った詩じゃないのね……」

「ええ。朝、エノーラとも話していたんですが、ああ、もう一人のメイドです。彼女も、まさかあの詩が特定の場所を示していたなんて思いも寄らなかったって言ってました」

ということは、さすがのカサンドラもこれを狙って何十年も前から詩を作ったわけではないということか。

騎士のトピアリーが凍れる騎士を表しているかも、少し怪しくなってきた。それよりも、銅像や屋敷の装飾といった、普遍で変わらない物と思った方がいいのだろうか？

「他の部分は見当は付いているんですか？」

「一応、あの詩に合う小説があるなと思ってはいるんだけど……」

「もしかして、ヴァルヴァナス・サーガですか？」

驚いてイライザを見ると、彼女は軍手の指で石の上の本をさす。

「実は私も小説家カサンドラのファンなんです。石の上の本に見覚えがあったし、ヴァルヴァナス・サーガも大好きなんですよ」

「私も！ あのお話大好きで」

どちらかということ、カサンドラ作品の中でもマイナーな物になる。ハイ・ファンタジーだ。今まで彼女のファンだと言っても、このヴァルヴァナス・サーガを挙げる人はいなかった。嬉しくて、声が弾む。

「氷の騎士が女王を抱いたまま滝壺に落ちるシーン！ あそこがとっても好きなんですよ」

「わかります、わかります！ あのシーンのヴァルヴァナスは本当にかっこいいですね。それを信じる女王もステキ。私は最後、新しい女王に引き留められるけど、氷の騎士が前の女王とともに去って行くとき思わず泣いちゃいました」

キャーと、二人でひとしきり盛り上がる。イライザの茶色の瞳がきらきらと輝いている。

いつの間にか草むしりの手は止まり、本を置いた石に二人で腰掛けていた。

「前に勤めていた屋敷の主人が、カサンドラ様と懇意にされていて、カサンドラ様から誰かメイドはいないかと言われたらしいんです。魔法使いですから仕方ないんですけど、色々偏見があって、なかなか新しいメイド募集が難しいらしくて。そこで白羽の矢が立ったのが私なんです」

イライザは誇らしげに胸を反らす。

「私、今までに出版されている作品をほとんど読んでいて、自他共に認めるカサンドラの大ファンです。前の主人に、嫌なら嫌と言ってくれと念を押されましたが、誰が嫌なんて言うもんですか！ って感じですよ」

「うんうん。私があなたの立場だったら喜んで飛びついちゃう！」

「ですよ。おかげで絶版で手に入らなかったいくつかの本を、こちらの書庫で読むこともできました。私ってば果報者」

やーん、いいな！ と心底羨ましく思う。

「私も小さい頃からカサンドラの小説が大好きで大好きで。出版社に勤めようと思った理由の一つなの」

二人は顔を見合わせて、互いの功績を認め合う。そして、ため息。

「イライザさんも断筆の話、昨日聞いたの？」

「イライザ、でいいですよ。寝耳に水どころの話じゃありません。びっくり仰天。天地がひっくり返った気分です。昨日までの最高だった日々はいったいどこへ消えてしまったんだろう」

二人の上に雲ができてしまいそうなほど、どんよりと肩を落とす。

「何でカサンドラは書くのを辞めることにしたんだろう？ これからどんな風に暮らしていくのかしら」

すると、今までの彼女とは違い、少し困ったような顔をする。

メグが首を傾げて促すと、イライザは口元に指を当ててささやいた。

「私が言ったって言うのは内緒ですよ？」

もちろんと、頷く。

「このところカサンドラ様も色々あって。実は、彼女の孫だと名乗る人がやって来たんです」

「孫!? 魔女に子どもが、孫がいるの？」

神妙な顔をして、イライザはさらに声を落とす。

「ええ。私も突然やってきた彼女にびっくりですよ。カサンドラ様はさすがですね、当然のように屋敷に受け入れたんです。ちょうど一年半ほど前。それから一年、半年前まで彼女はこの屋敷に居座りました」

イライザの表現の端々から、あまり良くない印象を受け取る。

「名前がジラ・ケヴェックと言うんですが、これがカサンドラ様とは正反対。あの美しい緑色の瞳はなく、真っ黒な、闇のような目。それを黒くて長い髪で隠して、いつも下を向いてぼそぼそと話すんです。たしかに、カサンドラ様のように自信に充ち満ちた態度でいろとはいいませんがね、本当に魔女の血を引いているのかと問いたくなるような、陰気な女なんですよ！」

彼女の気持ちに呼応するかのように、雲が太陽を隠し、日が陰る。

「カサンドラ様もまあ、かなり気まぐれなお方です。変に怒られるようなことはありませんが、朝と夜、言ってることがまったく違っていることなんてざらです。でも、ジラはそれ以上にわけがわからない。自分の思い通りにいかないと、周りに八つ当たりして、ヒステリーを起こすし、あの一年は散々でした」

「カサンドラは、それに対しては何も言わなかったの？」

イライザは肩をすくめる。

「ごめんなさいねと謝るだけで、ジラを止めようとはしませんでしたね。我慢してくれと、一番当たられてるカサンドラ様がおっしゃられたら、私たちも頷くしかありません」

イライザは、たぶんそれが一番腹立たしいのだろう。自分たちが何かされるよりも、カサンドラのその態度に理不尽さを覚え、怒りを覚える。

「いったい、そのジラさんは何をしに来たの？」

「私にはよくわかりません。結局金目当てだったんじゃないですか？ カサンドラ様は大富豪ですからね」

重版に継ぐ重版で、我が社から出ているものの印税だけでもとんでもない年収になる。カサンドラが関わっている主な出版社は合わせて二十ほど。とんでもない年収の二十倍。もう見当も付

かない。

「で、それが突然出て行った。半年ほど前です」

朝から二人は揉めていた。大声を出していたのは主にジラで、昼過ぎに荷物を持って彼女は屋敷を後にした。

「カサンドラ様がじきじきに送って行ったんです。わざわざそこまですることないのに！」

「半日かけて!？」

行きに六時間、帰りに六時間。魔法を使えない魔法使いは、人間と同じように行くしかない。

「いえ、カサンドラ様がいるなら、北に行けばいいんです。北へ一時間ほど歩けば、【禁猟区】が終わる。【禁猟区】さえ終わってしまえば、人のいる街へひとつ飛び」

北は人が踏みいるには厳しい山が連なっている。だが、魔法使いならそんなものは関係ない。彼らは万能の存在なのだ。

「帰って来たときのあの方は、だいぶ疲れていたようです。私はその日はもうカサンドラ様をお話する機会がなかったんですが。あれから少し雰囲気も変わったし」

「そんなことがあったんだ」

それが、断筆を選択させたのだろうか。

「それで、一ヶ月前ですよ」

さらに、イライザは声を落とす。メグの耳元に口を寄せて、最高の秘密を漏らそうとする。が、邪魔が入った。

「イライザ！ 草むしりは終わったのかい？ そろそろ昼食の準備をしないと間に合わないよ！」

反射的に彼女は立ち上がり元気よく返事をする。

「ごめんなさい。ここで喋ってるの、食堂とか厨房に結構聞こえるの。ばれちゃった」

彼女は再びごめんねとささやいて、走り去って行った。

残されて、そばの本を取り上げる。ふと、先ほどの会話を思い出す。

女王を胸に、滝壺へ落ちる氷の騎士。彼はあれで決定的に逃亡の道へと走る事となった。物語を読んでいるメグたちには胸を震わせるすてきな決断だったけれど、実際物語の中、彼の気持ちをわからない人々から見たらどうだろう。

「あ、でも、堕ちゆくを、望むなのよね」

誰もが一度は望み給う。あの決断を、メグも一読者として、望んだ。

つじつまが合うような気がする。だが、納得がいかないとも思った。

「やっぱり、一応昼と夜を探そう。イライザも屋敷の中に見かけたと言っていたし」

気持ちを新たに、メグはそのまま玄関まで行く。扉をゆっくり開けた。

昨日入って行くときに気付いていた、二階への吹き抜け。その上の天井にあるフレスコ画は太陽をモチーフに描かれている。こんな場所にフレスコ画を作るのはとても大変だっただろう。それだけに、何か意味があると思えてくる。

「ミトラくんもこれが怪しいと思いますか。目の付け所は悪くないですよ」

階段を下りてくるのは、アーサーだった。初日と同じくぱりっとしたスーツをしっかりと着こな

している。それがよく似合っていて、彼のラフな格好は想像がつかない。

「この屋敷に入って、誰もが目を奪われる太陽と神の絵。昔カサンドラに聞いたところ、だいたい五年かかったそうです。ここは不便な場所ですからね」

そう言う彼の手には『夕闇と薔薇の騎士』があった。メグは本のタイトルが彼に見えないように抱え直す。

確かに、彼が持っている本にも符合する点が多い。数あるカサンドラのスペースオペラの中でも、特に人気のある作品だ。だが、あくまで薔薇の騎士であって、凍れるや、氷といった話が出てこなかったはずだ。それとも、覚えていないところで出てきたんだらうか。

「健闘を祈ります」

自信があるのだろう。ニヤリと笑い、一階の右手奥へ消えていった。

負けず嫌いの血が騒ぎ出す。

これはなんとしても、詩の指し示す場所を見つけなければ。

「昼はこれだと仮定しても、夜が見つからないのよね」

しかも、堕ちゆくを望むのだ。

他の三人はどの程度詩の解読ができているのだろうか。出遅れている分焦りが募る。彼らを出し抜いて、原稿を手に入れることができるのだろうか？

と、車のエンジン音がし、クラクションが二度鳴る。

なんだろうとと思っているうちに、執事のヴィクターとエノーラが厨房の方からやってきた。玄関の扉を開くと、ちょうど男が庭師のサイモンに車のキーを渡すところだ。

「お帰りなさいませウッズ様」

「うん。ただいま」

身長は百八十以上。赤みの強い金髪に、透き通った青い瞳。笑顔がまるでモデルのようで、メグは思わず見入ってしまう。慣れ親しんだ我が家のように堂々とした振る舞いで彼は荷物の一つをエノーラに預けると、メグに少しだけ笑いかけ二階へ上がって行った。

「あの人は？」

メグがヴィクターに尋ねると、彼は食堂へ戻りかけていた足を止めて一礼する。

「ドナルド・ウッズ様です。もう十分ほどで昼食ですので、食堂へいらしてください」

それだけ言うと、足早に去る。

きっと彼自身も、答えになっていないことはわかっているのだろう。

なんとなく不安な気持ちを押し隠し、メグはおとなしく食堂へ向かった。

そして、予感は的中する。

アーサーたちからキィまで、全員がそろっているところへカサンドラとドナルドが親しげに登場した。

誰もが思ったことだろう。

カサンドラの断筆は、こいつのせいかと。

イライザがあのと看言いかけていたのはこのことだったのかと、メグは心の中で深くため息をついた。

ベッドの上で、本を開く。これを最初に読んだのはいくつのときだったか、忘れてしまった。十になったときにはもう知っていたと思う。懐かしい内容に、自然と笑みがこぼれた。部屋を暗くして、ベッドサイドの灯りだけを頼りに読みふけていた。

今も同じようにして、あの頃のと看めきを心の底からすくってみる。

いたずらをして両親に叱られ、どんなに落ち込んでいようとも、カサンドラの小説を読めばあつという間に元気が出る。魔法の書いた本だから、そんな魔法が掛かっているのだと、一時期本気で信じていた。

ふかふかの枕に頭をのせて、メグは仰向けになりながら胸の上に本を置き、時間を忘れて読んだ。昔、そうしていたのと同じように。

外は真っ暗で、開け放たれた窓から涼しい風が入って来て、メグの前髪を揺らす。

目の端に、ちらりと白い物が映ったのはそのときだ。

背筋の寒さは感じていない。何だろうと、ドキドキしながらそちらを盗み見る。

枕だ。

白い枕。メグが今まさに使っているのと同じ枕。

その両端から小さな手がちょこんと見えている。

「ク・ルウちゃん？」

まさかと思って呼びかけると、今度は枕の横からびよこんと顔が飛び出した。

ピンクのふわふわしたネグリジェがとても可愛い。ここの枕はかなり大きく、小さな彼女は抱えてくるのにだいぶ苦勞したことだろう。二階から降りてくるとき転んで怪我をしなくて何よりだ。

窓は開いているが、その向こう側で止まったままこちらへは来ない。

「ああ。どうぞ、入って」

すると、驚くほど素早く駆けてベッドへ枕を放り投げ、今度は自分がよじ登ろうと頑張っている。器用に足だけで脱ぎ捨てた靴が、ひっくり返って散らばっていた。

代わりにメグは、立ち上がりク・ルウが入って来た窓を閉める。カーテンは薄いレースの物を引いただけにした。この方が朝きちんと目が覚める。

「もう、十時よ？」

ベッドサイドに置いてある時計を見る。

「良い子はとっくに寝ている時間よ」

メグの指摘にク・ルウは、両足をベッドの上で投げ出しうんうんと頷く。

そして、持ってきた枕にぺたんと寝転んだ。

「まさか、ここで寝るの？」

それに対しても、ク・ルゥは頷く。決心は固いようだ。

こちらとしてはそれでも問題ない。ベッドは普通よりもずっと広い。小さなク・ルゥ一人が増えたところで窮屈ではない。

メグは別にいいのだ。アレが問題なだけである。

脳裏に白い魔法使いの姿を思い浮かべる。

だがどうも、ここ二日の彼らの行動を見る限り、主導権はク・ルゥにあるようで、まあいいかと思直した。メグが怒られるいわれはない。

せっかくだし、もう寝てしまおうとパジャマに着替える。編集の仕事はなかなかに厳しい。締め切り前は睡眠時間を削ってサービス残業も当然のごとくこなす。どこでも、どんな少しの時間でも身体を休めることには長けていた。

でも、だからこそゆっくり眠れるときは、自分が一番リラックスできるスタイルで休みたい。「電気は付けておく？」

もし夜中に起きて恐がりでもしたら困るだろうと聞くと、ク・ルゥは少し眠そうな目で小さく首を揺らす。微妙な動きだが、たぶん肯定だ。枕元の電気を小さくして、横になる。灯りがク・ルゥの金色の瞳を照らし、その妖しげな光になんとか変な気分になってしまった。どこまでも見透かされているような、不思議な気分。そわそわと落ち着かなくて、もう寝なければならないのについ言葉が口が出る。

「格好良かったね、ドナルドさん。あの二人、お似合いだった」

それは素直な感想だった。

どこから見ても幸せそうな二人に、手放しで祝福したいと思ってしまった。

「綺麗だもんね、カサンドラ。私もあんな風に美人だったら、日常が少しは変わるのかしら？」

そう言って、思い浮かんで来たのが予想外のキィの姿で、メグは慌てて首を振った。自分は何を考えてるのかと、両手を頬にあてる。なんだかわからないが、ものすごく恥ずかしくなってくる。確かに顔は良いが、性格に問題がありすぎるだろう。

それ以上は考えまいと、カサンドラのことには思いを馳せた。

「昔、インタビューで言ったの。カサンドラが、小説家は自分の天職だって。ク・ルゥちゃんは、彼女の本を読んだことある？」

メグの問いに、じっと聞いていたク・ルゥはまた小さく首を振った。

「そうよね。まださすがに難しいかな。もう二年か、三年ぐらいしたら楽しく読める物もあるよ。彼女、児童書で魔法使いとドラゴンのお話も書いてたから。……本当に、長い間書き続けてるんだよね、カサンドラって」

彼女が実際いくつなのかは知らないが、小説家となつてからはもう二百年経つ。普通の人間なら絶対にできない。寿命が、足りない。

どこかで安心してたのかもしれない。カサンドラは、魔法使い。自分が生きている間は間違いなく、続きを出してくれる。魔女が死ぬはずがない。だから、寂しくない。

「あんなに素敵な男性が目の前に現れたら、長年続けて来た小説書きもやめてしまえるのね」

と、突然の物音に、文字通り跳ね起きる。



「な、何!？」

見ると窓の外に白い影がある。どうやら窓を叩く音らしい。

灯りを付け、おそろおそろカーテンを開けてみると、忘れたところに保護者登場だ。

ガラスを隔てた向こう側で、開けろとジェスチャーしている。【禁猟区】では、さすがの魔法使いも不法侵入は難しいらしい。

トレードマークの一つでもあるシルクハットを、今は被っていなかった。どこまでも白い髪。柔らかそうな質感のそれが、ふわふわと揺れている。

「もう！ あんたたちは普通にドアから来られないの？」

頭ごなしに怒鳴りつけてやるが、見かけよりもずっと年取った彼は、メグを押しつけベッドでバタバタと暴れるク・ルゥを目指す。

「やっぱりここにいたか！」

捕まえようと駆け寄るが、子どもの方がすばしっこい。さっと起き上がりベッドから飛び降りると、キィの手をかいくぐりメグの後ろに隠れる。

あからさまにむっとするが、それ以上何も言えずに彼はテーブルの上の残った紅茶をポットからカップへ注ぐ。我が物顔でどっかり椅子に座ると優雅に口へと運んだ。

偉そうなのはそこまでだったが。

ぬるい、と顔をしかめてカップを置く。食後のお茶を持ってきてもらったのだから、すでに三時間近く経っている。当然だ。

魔法使いが椅子に座ってしまったので、メグはベッドへ座った。ク・ルゥはそんなメグにしっかりしがみついて離れない。帰らないぞとオーラを出しまくっている少女に、彼はどう出たものかと困っているのがありありだ。

みんながだんまりで、いたたまれなくなったメグが口を開く。

「ねえ、魔法使い。あなたたちって、ずっと続けてきたことを、その、好きな人ができたからってやめられるものなの？」

抽象的に表現しようとしてみたが、上手い言い回しが見つからず、結局何のことを言っているのか丸わकारいの質問になってしまった。

キィはそんなメグの複雑な心境を知ってかしらるか、一言返す。

「逆だろ」

「え？」

何が？ と言外に含ませるが、彼はそのまま黙っている。一分も経たないうちにイライラしてきて、再度問う。

「キィー」

「魔法使いは死なない。人は死ぬ」

正確には死ぬこともあるが、人間よりずっと寿命があり、多少の怪我はすぐに治してしまう。死なないと言い換えても不自然はない。

「人の時間への感覚と、魔法使いのそれは、天と地ほど違う。人にとって一年は長い時間なのかもしれないが俺たちにとっては、ときにはほんのまばたきくらいにしか思えないこともある。何

度かまばたいしているうちに、人は消えてしまう。ならば、その間はそいつに付き合おうと思ってもおかしくはない」

そんな風に考えたことはなかった。

なんでも自分の尺度でしか測れない。そんな己に恥ずかしくなる。

カサンドラからしてみれば、自分の人生のほんの通過点でしかないのだ。それも、長い長い生の一瞬でしか。でも、そこに愛すべき人を見つけて、だからこそ彼とともにと思ったのか。

「そっか……………」

「ただ、カサンドラは過去にも何人か恋人がいたからなあ。断筆理由はそれだけじゃないとも思うが」

イライザから聞いた孫の存在。

魔法使いに子どもがいるというのも驚きだが、さらに孫がいるという。

人と関わらず、人に干渉しないと聞く魔法使い。だが、カサンドラはまるで普通の人間のよう、仕事をして、子どもを産み、さらには孫までできた。

時間の尺度が違うと言うが、彼女は一度も締め切りを破ることはなかった。

今までは、もしかしたら人間に合わせてくれていたのかもしれない。

「数年後、愛想尽かして、尽かされて、また小説書くとか、軽く言い出しそうだけどな、あいつなら」

「キッ！」

魔法使いの台詞にク・ルウの鋭い声が飛ぶ。どうやら怒っているようだ。

だが彼は謝るでもなく、立ち上がり手を差し出す。

「帰るぞ、ク・ルウ。彼女に迷惑だろう」

だが、イヤイヤと首を振る。

なんとしても捕まえようとキィが手を伸ばし、間に挟まれているメグはいい迷惑だ。

「ストップストップ。もう夜も遅いし。寝ないと朝起きられないでしょう？ ベッドは広いから、私はかまわないわよ」

それ見たことかと、ク・ルウはベッドの上で飛び跳ね胸を張った。最後はメグに飛びつく。その仕草が可愛くて、こちらも嬉しく、笑顔が広がる。

キィはむっとし、だがすぐに真反対のニコニコ顔になった。

「じゃあ僕も一緒に寝よう！」

メグは一瞬頭が真っ白になり、そして、枕を掴むとキィへ投げつけた。

「なに、何を、馬鹿なこと言っているの!？」

「万事解決の最高の策だって、おい、何する、やめろよ！」

無理矢理彼を押し戻し、最後はどん、と背中に全体重をかける。魔法使いは無様に窓の外に転がり出てこちらを睨むがかまわない。

立て直す暇を与えずに窓を閉め、レースのカーテンの上にさらに厚手のカーテンを閉めてしまった。

窓を叩く音が断続的に鳴り響くが気にしない。

ベッドへ戻る途中投げつけた枕を回収して、ク・ルウの隣に寝そべる。

「ねえっ！ いっつもあんななの？」

顔が真っ赤になっている自覚があって、恥ずかしくて電気を消してしまった。闇の中でク・ルウが首を小さく傾げるのがわかる。

「一緒に寝るって……」

子どもじゃないんだからと声にならない叫びをうつぶせになり、枕へ吐き出す。

抱きついてきたク・ルウをこちらも抱きしめ返すと、早鐘を打つような心臓の鼓動が気になって眠れない。

「もう、なんなのよ」

泣きたい気分とは、このことだ。

### 三章 突然の出来事

---

翌朝、朝食を終えてメグは庭をうろうろしていた。ときおり人を見かけるが、彼らも必死に謎を解こうとしている。カンニングするのはプライドが許さない。けれど相手の動向も気になるという微妙な気持ちが働いて、お互い一定の距離を縮めることはなかった。

白いTシャツにベージュ系のチェックのパンツ。庭を歩いていて、それは正解だったなと思う。そして、キャスケット。そばかすがこれ以上広がらないために、とても重要なアイテムだ。肩掛け鞆に本と手帳を忍ばせて、歩き回る。と、中庭の迷路にさしかかったところで、緑の垣根の向こうに赤い頭を見つけた。背伸びをする。

垣根はメグの身長ほどで、辛うじてカサンドラだとわかった。彼女は垣根の迷路を抜け、東の方へ移動している。そのまま行くと堀へぶつかり、ちょうど橋があるあたりだ。

屋敷の周りをぐるりと囲む堀には、東西南北四つの橋がかかっていた。どちらかと言うと、その先は、魔女の敷地とは言えども手を加えておらず、だんだんと森になっていく。

何をするのか見ていると、振り返ったカサンドラと目が合う。頭を下げたら垣根よりも低くなり、また慌ててつま先立ちになる。

彼女は濃い緑のドレスの裾をはためかせ、メグに手を振り去っていった。こちらも手を振り返すべきかどうか悩んでいるうちに、彼女の背中はどんどん小さくなっていく。完全に遅れてしまって、少しだけへこんだ。

「どうした、お嬢さん」

後ろでがさがたと音がして、庭師のサイモンが現れる。外で作業をすることが多い彼は、よく日に焼けて麦わらの帽子を被っていた。顔をぐるりと覆うヒゲが最初は少し怖かったが、笑うと人なつっこい顔になる。茶色の髪の毛も日に焼かれて色素がだいぶ抜けていた。ほとんど金に見える。瞳が黒いから、元々は髪の毛も濃かったのではないかと思われた。

「カサンドラがあっちに」

「ああ。週に何度か散歩しなされる。東の方が最近は特にお気に入り、二時間ぐらいで帰って来るよ」

ふらっと一人で出かけ、ふらっと帰って来る。その時間は邪魔をされるのが嫌なようで、誰も近づかないようにしているようだ。

「お嬢さんも行かない方がいい。あっちには毒の棘がある藪がある。よく知らんもんがいくと危ない。俺も滅多にあそこまではいかない。第一、屋敷の中だけで手一杯だ。ついてく暇もない」

生け垣をなでると、一つの葉を取り、表裏と、じっくりみつめる。

仕事を邪魔してはいけないと、その場を離れようとしたところへ彼が言った。

「それで、お嬢さんは目星はついたのか？」

「いいえ。なかなか上手くいきません」

首を振ると、彼も首を振った。

「カサンドラ様の気まぐれにゃ、大概慣れてるが、今回のはまた特別だなあ。あんたらも大変だ。おかげで昨日からあいつらが庭を行ったり来たりで作業が進まん」

「……すみません」

「あんたに言ってるわけじゃないが……まあ、そうなっちゃうよな。ほら、山査子はもう少し奥へ行って東にある。本物の山査子だな」

メモを見ると、確かに山査子の一文があった。

「あのトゲは確かに痛いから、見るなら気をつけてな」

「ありがとうございます。……茨は、薔薇とかはありますか？ 冬に関係したようなもので」

そうだなとサイモンはあごヒゲをなでながら宙を見る。

「茨があるようなものは、だいたい冬には茨だけになっているからなあ。冬に関係がある、か…  
…そう言えば、西の方にモダン・ローズだけを集めた場所があるんだが、モダン・ローズはほとんどが四季咲きで、春と秋に咲く。その秋に咲いた薔薇が、ときには遅れて冬に咲くことがある。そういった薔薇を冬薔薇と呼んだりもするよ」

植物にはあまり詳しくない。薔薇の季節と言えば春だと思っていた。少し汗ばむくらいのも、でも夏ほどの日差しがないそんな季節。そう、ちょうど今の時期。

「ありがとうございます！」

お礼を言って、まず山査子を見に行く。小さな白い花が可愛らしい。これが有名な吸血鬼ドラキュラの胸を刺す杭になるのだ。

「きっとこのトゲトゲが痛いから効くのね」

勝手に想像してそう結論を出すと、辺りを見回す。山査子からさらに東へ行けば、橋がある。先ほどカサンドラが使ったと思われる橋だ。

次に進められた通り西へ向かう途中に、トピアリーがあった。

なんの木かはわからないが、たぶんライオン。だがそれに羽が生えている。グリフォンとは違うようだ。鷲ではなく、顔もライオンのたてがみを模している。

そう言えば詩の中に羽の生えた獅子とあったはずだ。これのことを指しているのだろうか？  
だが、詩ができたのはずっと昔。このトピアリーがずっと羽の生えた獅子をモチーフとして作られてきたかは定かではない。

さらに問題は、羽の生えた獅子が『ヴァルヴァナス・サーガ』に出てこないことだ。

『羽のある獅子が背に』ということは、騎乗するのか。確か、騎士の愛馬の名前がアリエルだった。あれは、どこかの言葉で『神のライオン』という意味を持っていたと、書かれていたはずだ。本で調べなくては。

その点は後で確認することにして、メグはさらに西へと向かう。

薔薇の話をするときのサイモンはとても嬉しそうだった。きっと自慢の薔薇園なのだろうと思っていたが、期待を裏切らない光景に思わずため息を漏らしてしまう。すてきだ。この時期に訪れたことを、心底幸せに思う。

ピンクに黄色。深紅の薔薇がひととき美しい。

『冬の茨が多かろう』。多かろうに少し躓きを覚えるが、他に茨は山査子ぐらいしかなかった。山査子はすでに文中にあるし、別の茨だと考えて、思いついたのが薔薇だ。だが、冬がよくわからないし、冬薔薇は聞いた限りじゃ数は多そうにない。

他の物を探せるのなら探してみなければと思う。もう三日目だ。アーサーたちはどのくらい手がかりを掴んだのだろうか。夕食の席ではカサンドラから進捗状況を聞かれたが、みんな曖昧な笑みを湛えて首を振るばかりだった。あれでは成果が出ているのかどうかははっきりとはわからない。

薔薇園から真っ直ぐ西に行くと、壁にぶつかった。そのまま壁づたいに北へ。そして、ぐるりと回って今度は南へ。昨日イライザに会ったときと同じルートだ。西の橋が見えた。幅は三メートルほど。長さは六メートルくらい。つまり、堀の幅が六メートルくらいある。

詳しく見ようと、橋に近づく。石でできたアーチ橋は、百年前からそのままだと、そんな話を聞いた。魔女の屋敷は、【禁猟区】でありながら魔法が掛かっている。そんな気がする。

渡って、帰って来たところへ年配のメイド、エノーラが両手にゴミを持って出てきた。目が合うとにっこり笑う。無視するわけにもいかず、メグは近づいた。

「ゼピュロスがどうかしましたか？」

聞き慣れない名称に戸惑っていると、彼女は何度も頷いた。

「そう言えばここは初めてでしたね。ゼピュロスっていうのは西風の名前です。東西南北の橋を風の神様の名前で呼んでいるんですよ。何にでも名前を付けたがるのは、ヴィクターの趣味ですね」

「執事さんの？」

ええそうですと、エノーラはまたも頷く。

「この屋敷は、周りとの構造のせいか、一番風を感じるのが橋の上なんですよ。北には中庭があって、冷たい風を遮ってくれる。その跳ね返りもあって、ボレアスの息が一番厳しいのは北の橋」

ゴミ袋を置いて真っ直ぐ北を指す。

「南はノトス。東がエウロスで、その西の橋がゼピュロスですね」

エノーラの説明を聞いているうちに、詩に風伝いという一節があるのを思い出す。

たしか、『夜の息は風伝い』だ。エノーラは風を息とも表現していた。

「屋敷の細々とした名称は、それこそヴィクターに聞いてください。まあ、大変だろうけど、カサンドラ様の気まぐれに付き合ってくださいな。あんなに生き生きとしたカサンドラ様は初めてですよ」

「もっと、違っていたんですか？」

「ええ。私はここに勤めてもう四十年になりますがね、今までのなかで一番。ここまでウキウキしてらっしゃる姿は見たことがありませんから。なんだかうちの孫に恋人ができたときみたいだねえ。こっちまで弾んできます。さ、それじゃあ失礼しますね」

自分から話しかけてきたくせに、ああ忙しいと言って屋敷の中へ戻っていく。そんなエノーラの背中を見送ると、またメグは歩き出した。

まばらに生えた芝生を足先でなでながら、先へ進む。何か手がかりを、何かヒントを。ヴィクターと話をするのは、悪くない提案だ。

朝からずっと歩き回って、肌にうっすらと汗をかいている。そろそろ水分補給が必要かもしれ

ない。ちょうどいい。ヴィクターに頼んで、手が空いているようだったら話に付き合ってもらおう。

正面玄関から屋敷へ入ると、運の良いことに彼に遭遇する。

「お暑いですね。何かお飲み物などいかがですか？」

さすがにできた執事だ。頼む前に勧められるとは。

「お願いします」

笑顔で答えると、彼の頬のしわも少し緩む。

「冷たいアイスミントティーか、珈琲か。何がよろしいでしょうか？」

「アイスミントティーを」

「承知いたしました。お部屋にお持ちしましょう」

それではイライザが持って来ることになってしまう。

「いいえ。少し飲むだけでいいんです。またすぐ歩き回ると思いますし」

「詩の解説ですね。それでは、食堂で」

「はい。あと、実はお聞きしたいことがあるんです」

ヴィクターはわかりましたと言って彼女を食堂へ先導し、自分は厨房へと入って行く。

メグが食堂の定位置に座りおとなしく待っていると、すぐに彼はお盆に二つのグラスを乗せて現れた。

「私も休憩をと思っていたところです」

ミントのすがすがしい香りと、後に残る紅茶の味わい。予想以上に自分の喉が渴いていたのだとわかった。一度に半分以上飲み干す。そんな彼女をヴィクターはにこにこ笑って見ていた。

仕事の合間に付き合ってくれているのだらうと、さっそく切り出す。

「さっきエノーラさんに橋を風の神様の名前で呼んでいると聞きました」

「ああ。私は神話が好きなもので。勝手に付けて呼んでいたのをみんなも呼び出しただけです。深い意味はありません」

「ええ。それで、他に何かそんな風に名前を付けている物はないかなと思って」

カサンドラが座っていた場所とちょうど真向かいの席に座るヴィクターは、正面の壁にある詩へ目を向けた。

「そうですね……、あとは詩に符号しそうなものは特にはないと思います。ただ……、」

「ただ？」

メグが身を乗り出すと執事は苦笑する。慌てて居住まいを正すが、もう遅い。

「『夜の息は風伝い』の部分がありますよね」

さっきメグが気になったところだ。

「ここは、季節に関わらず夜になると北から風が吹いてきます。ボレアスですね。もしかしらですが、夜の息というのがボレアスからの風なら、風伝いは、橋づたいにということかもしれませんね」

――凍れる騎士をいざなわむ

北から現れる凍れる騎士。北の方で騎士にまつわる何かを探してみよう。

「もちろん、これが正解かどうかはわかりませんので、その点はミトラ様をご判断ください」

「はい」

「神話といえば、カサンドラ様のお名前もとても暗示的ですよね」

きょとんとするメグに、ヴィクターはご存じないのですかと首を傾げる。目をそらし、少し悩んでいるようだ。

「……忘れてください」

彼のような人は教えてくれとせがんでも、一度決めたら教えてくれることはないだろう。気になるなら、後で調べればいい。ヒントは出ている。

「ありがとうございました」

立ち上がってお礼を言う。お役に立てて光栄ですと、ヴィクターは頭を下げた。部屋を出ようとしてもう一つ思い出す。

「そうだ。この詩はいつ頃作られたものなのですか？」

彼は少しだけ考えると、頷く。

「確か、二十年ほど前だと思います。私の娘に孫が生まれたのがそれくらいでしたから」

ヴィクターに頭を下げて、メグは玄関ホールから中庭へ出た。

まずボアレス、北の橋へ向かう。中庭のほぼ中央にある生け垣の迷路を避けて、西周りでたどり着いた。

――夜の息は風伝い

これは、ボアレスの風が、橋伝いに吹くということ。それに誘われて騎士がやってくる。

つまり、騎士は北にいるのだ。

メグは駆けだそうとして足を止める。橋の向こうから魔法使いが歩いてきていた。白いマントが風に翻り、詩の一文を彷彿とさせる。

――氷の裳裾をなびかせて

彼は一人だった。

「散歩？ ク・ルウちゃんは？」

「さあ。目を離すとすぐどこかへ消える。定期的に帰って来るから気にはしていないが」

嘘っぽい。言いながらも辺りを見回している。

二階から一階へ飛び降りてしまう行動的過ぎる一面を持つ少女だ。彼が心配するのも無理はない。

「あんたは詩の解説か」

「うん。そう。北の橋を渡って騎士がやってくると読み解いたんだけど……、何か向こうに騎士



を表すものってあった？」

「いや、特には。ヒースがあったくらいだ。まだ時期じゃないから少しだったが、あそこらへん  
一帯は全部ヒースじゃないかな？」

その返事に、メグはまさに飛び上がって喜んだ。

「すごい。すごいわ。ヴァルヴァナスの家紋はヒースなのよ！」

やはり騎士が北にいた。ヒースの花言葉は情熱的な愛、自己犠牲など作中の彼ともリンクして  
いるように思える。

――騎士は降り立つ ふたりの女王の間に

ふたりの女王がどれに当たるのだろう。

「ねえねえ、ふたりの女王って言うと、何を思い出す？」

「さあ、なんの女王かにもよるだろ？」

次々話しかけるメグに、その場を立ち去るタイミングを逃した魔法使いは周りをぐるりと見  
渡す。

「物語を参考にするならば、昼と夜、太陽と月など対になるものなのよね」

前半からずっとこの女王にやられている気がする。ぶつぶつとつぶやくメグをよそに、キィは  
南へ歩き出した。引き留める理由もないのでそのまま見送ったが、彼はすぐ足を止めた。

「女王、これは？」

彼が指すのは道の脇に生えている薔薇。両側にちょうど二種類。

「花の女王だろ？」

確かに。そう言われればまったくもってその通りだ。

「あ、赤い薔薇と白い薔薇……」

対立するふたりの女王。彼女たちを表す言葉に、白と赤があった。それは彼女たちの生家の家  
紋が白薔薇と赤薔薇だったからだ。

「そのままじゃない」

やっぱり選んだ本は間違っていなかった。

「それじゃあ、僕は行くよ」

「あ、うん。ありがとう。引き留めてごめんね。ク・ルウちゃん見つけたら、お部屋に帰るよう  
に言うておくわ」

魔法使いの背中に手を振ると、メグは道の両側に咲いている薔薇の間に立つ。南を向くと、迷  
路の入り口が見えていた。

――遠くに見ゆるはふぞろいのこびとの群れ

――祝宴の声を背に吹きすさぶ赤の丘へ

こびとの群れが、祝宴を揚げています。それを背にして赤の丘。

このこびとはすでに見当が付いている。小説の中で、こびとたちは重要な役割を果たす。真実の巫女である証の、巫女の印は水晶でできた錫杖だった。偽の巫女は、その錫杖そっくりな偽物を作らせて騙していたのだ。本当の錫杖は、このこびとたちが守っていた。

「このこびとは間違いなく小説の中のこびとよ」

そうになると、赤の丘にも思い当たる点がある。錫杖があるのは、こびとたちが言う炎の山の中央にある真実の泉の中だ。しかし、こびとたちにとっての山は、女王アルメルダや氷の騎士ヴァルヴァナスたちにとっては丘でしかなかった。

赤の丘の中央に泉。この庭でそれが当てはまるのは、噴水だ。

「中庭のだいたい真ん中にあるしね」

メグは迷路を通り、噴水へとやってきた。

――古き女王は天を仰ぎ帳を下ろし

――新たな女王は日中に輝く

――闇の冠いただく女王

古きと新たな女王二人のことだ。ちょうど錫杖を手に入れたところに、新しい女王の戴冠式が行われていた。

闇の冠をいただく女王がアルメルダのことになるのだろう。

――羽のある獅子が背に

――目覚めた氷は歩み出す

――雲雀の唄う春の野へは

――冬の茨が多かろう

――山査子の棘がはばかりう

――朝の夢はひそやかに

――凍れる騎士へいざなわれむ

そのままさらに南へ向かい迷路を抜けて獅子のトピアリーにたどり着く。

「あ、でも冬の茨は冬薔薇だとすると西にあって、山査子は東にあるのね。アルメルダが獅子の背に乗って見るのは、西の方向だから冬の茨だわ。なんか変」

そして、朝の夢。これは何か引っかかっているのだが、思い出せない。

獅子のトピアリーの下で、鞆から小説を出してページをめくる。何か思い出しそうでも思い出せない。

そうやってしばらく無作為に拾い読みをしていたが、メグは声を上げる。

「あった。そうよ。初めての神託が、朝食の後のちょっとした合間にあったんだわ」

アルメルダは、新しい女王が指名され、自分のこれからは思いを馳せているうちに少し眠ってしまったのだ。そこで、自分が巫女でもあると知らされる。

「朝の夢。そして氷の騎士をいざなうことになるのね！」

それに、考えてみればゴールは錫杖のあった泉ではないか？

「西と東を茨で守られて、南には獅子。北から騎士が来る。迷路の真ん中の噴水へ仕向けられている気がする」

メグは元来た道に戻り、白い石でできた噴水の周りを捜し出した。何か手がかりとなるような物はないか。

「あ、薔薇だわ」

噴水は八方の側面に花が彫られていた。そのうちの南西に、薔薇のレリーフがある。ここがカサンドラの言っていた詩の指し示す場所に違いない。

「よし、一番乗り。うん。絶対にそうよ！」

叫び出したい衝動を抑えて、メグは屋敷へ向かう。嬉しくて嬉しくて、気持ちばかりがやはり何度も転んでしまいそうになる。

だが、ガラスの扉をくぐり、玄関ホールから二階へ上がろうとして、気付いた。

「だめ。前半が何も解けていない」

自分は馬鹿だ。すっかり忘れてしまっていた。

メグが解いたのは詩の後半。最初の一文はまったく解けていない。カサンドラが無意味な文を入れるとは思えないから、きっとこれだけじゃ解けているとはいえない。

やり直した。

それに、詩のメモを見て最後が違うのに気付く。朝の夢が騎士を誘うのではなく、朝の夢が騎士へ誘われるのだ。

いままでのことは無駄だとは思えないが、その前半に隠された秘密で場所がまったく違ってくることはあり得そうだ。前半を解けば、この部分の謎も解けるかもしれない。

「うん。そうよ。そうに違いないわ！」

メグは自分を元気づけて、そのまま階段を上った。昨日はなんとなく、二階のカサンドラの部屋がある方には行きにくくて調べていない。そこを調べてみよう。吹き抜けになっていて、中庭に面した壁の方に左側の建物へ行く通路が通っている。中庭へのガラスの扉になっている一階とは違い、ベージュの壁紙に大きく丸いステンドグラスがはまっていた。ステンドグラスには、女王の戴冠式が描かれていた。

西の棟に歩いて行くと、声がある。角を曲がればちょうどカサンドラとドナルドが彼女の部屋から出てくるところだった。二人は抱き合って、濃厚なキスをした。

慌てて帰ろうと思うが、気付かれてしまう。

「お、マーガレットちゃんか」

非の打ち所がない笑顔で、彼が笑う。仕方ないので頭を下げた。まともに二人の顔を見られない。こちらが恥ずかしがることなんてないのに、なんでだろう。ここまで堂々とされると、逆に周りが困る。

「詩の解説？」

人なつっこい性格なのだろう。昨日も食事の席でずっと話し続けていた。

「だいたい謎は解けたかしら？」

カサンドラに問われて、メグは首を振る。まだ素直に頷けない。

「とっても、難しいです」

「頑張ってるね」

「はい！」

元気よく答える。どうしても、彼女の前ではいい子でいたくなる。

「それじゃあ私は上に行くわ」

そう言って、さらに奥へと歩いて行った。その手にはあの原稿がある。西の塔、執筆部屋だ。もう書くのをやめると言いながら、それでも彼女は塔へ行くようだ。最後の手直しがあるのかもしれない。

「俺はどうしようかな。マーガレットちゃん、詩の中の手がかり探ししてるの？」

「え、あ。はい、そうですけど」

「じゃあ俺も一緒に行こう」

彼はいったい何を言い出すのだ。

「ええと、いいんですか？」

不公平ではないだろうか。

「だって、俺、答えは聞いてないから。他の三人は何度もここに来てるんだろう？ マーガレットちゃんは初めてだって聞いたし。ハンディは必要だよな」

そうか？ と反論する暇もなく、腕を引かれる。

「で？ 今は何を探してるのかな？」

強引な展開にどうしようかと思いつつも、お言葉に甘えることにした。一人で悩むよりも、他人の違った視点が突破口をもたらすことは多い。しかも彼はカサンドラと親しく、この屋敷にも随分と慣れてる様子だった。

メモを見せて、最初の一文を示す。

「これがどうしてもわからないんです。何が落ち行くか。昼と夜って？」

「うーん。これは俺もイマイチぴんと来なかったところなんだよね……ああ、前にね、カサンドラがみんなに問題を出すっていうから、先に俺もやってみたんだよ。結局解けないし、まだ答え教えてもらっていないけど。そうだな、昼にあたるようなものは見つけた？」

メグは頷く。

「玄関ホール天井の部分に太陽が。実は今、『ヴァルヴァナス・サーガ』という小説がヒントになるんじゃないかとおもっているんです。その小説の中で、太陽の王座と、月の神殿というのが出て来て、太陽の玉座に座る王は、その玉座から身を引くとやがて月の神殿に閉じ込められちゃうんです。もしかしたら、王の激務から逃れるために、一度は月の神殿で余生を暮らしたいと、そんな風に考えてしまう、これが落ちるにあたるんじゃないかなって思って」

これは今朝思いついたことだ。誰だって現実が忙しければ忙しいほど、一ヶ月くらい南の島でのんびりしたいと思うものだ。実際女王アルメルダもそんな想像に思いを馳せていた。けれどすぐに自分の責任等を思い出し、自分をなじり否定するのだ。

「うんうん。今までに出た案の中でも一番意味が通ってるね」

「今まで出た案？」

「俺の中で挙げられた案ってこと。それで。太陽は見つけたけど月は見つけられないってことかな？」

「そうなんです。太陽の近くにはないかなと思ってんですけど」

「なら俺の出番だ。みんなより先に謎解きにチャレンジしてただけあって、この屋敷中にあるシンボルについてはちょっと詳しいよ。行こう」

彼の後についていくと、吹き抜けの横を通り、壁のステンドグラスも通り越し、一階への階段横、談話スペースまで来る。

「そのお話って、女王は出てくるの？」

「あ、はい。ちょうど女王から女王へ代替わりするときのお話なんです。王は巫女のお告げによって代わるんですけど、その巫女が買収されてて、不当に代替わりとなるんです。それによっていろんなことが引き起こされるんですけど」

「じゃあ、あのステンドグラスも、意味があるのかもしれないよね」

そうだ。

女王の戴冠式。

小説の一場面にもある。

「と、言うのも。ホラ見える？ 玄関のちょうど真上」

何かがきらりと光る。

「あそこにもガラスがはまってるんだ。月の形をして。青いガラスに、三日月の黄色がはまっていて、年に二回ぐらいしかないらしいんだけど、ちょうどあそこから光が入って向かいの女王の戴冠のステンドグラスを照らすことがあるんだって」

太陽の光が、月を通して女王の戴冠式に届く。

「天井の絵はおまけか、まあ、関係ないとして。もしかしたら、このことかもしれないよね。何よりその小説に符号する」

「はい」

となると、気になるのはその光の指し示す先。噴水まではいかないかもしれない。だいたいの角度を覚えて、下から見てみれば、何か道筋が見えるかもしれない。

「まあ、期限決められちゃってるから大変だろうけど、とりあえず今日一日ぐらいここから始めてみるのもいいんじゃないかな？」

「はいっ！」

光の先を求めて、メグは歩き出す。

ドナルドもついてくる。彼ははっきり暇だと宣言するのだ。

「カサンドラが上に行ってしまったからね。あそこに入ったら、僕もなるべく邪魔をしたくないし。宝探しの方が面白そうだ」

断る理由もないので、一緒に行動することにした。

階段を下りようとしたところへ部屋から出てくるアーサーの姿をみとめる。

「おや？ ミトラくんはアドバイザーを手に入れたのか」

なんとなく自分がずるい気がしてあたふたと言いつ事を考えるが、先にドナルドが助け船を出す。

「三人はこの屋敷の常連なんだろう？ マーガレットちゃんは初めてだって言うし、これくらいのハンディは必要だ」

アーサーは彼の言葉にちょっとだけむっとするが、眼鏡に手をやるとそうだな、としぶしぶ頷く。

「彼が答えを知らないという前提でだが」

それが精一杯の反撃だったのだろう。ドナルドはにやりと笑った。

「ああ。残念なことに知らない。俺もカサンドラに言われて解読をやってみたが、正解を引き出せなかったクチなんだ」

「それなら結構。まあお互い頑張ろう」

彼が歩き出し、メグも階段を下りる。アーサーは一階の、厨房の方へ消えて行った。

「ありがとうございます」

「いやいや。情報を引き出してどう処理するかは結局本人次第だし、情報を引き出す技術もその人の力ってことだろう？ マーガレットちゃんは助けようって気にさせるから、作戦勝ちだね」

「頼りなさそうってことですか」

「違う違う。可愛いから手を差し伸べたくなるってことだよ」

最後に満面の笑みを浮かべるドナルドに、顔が赤くなって横を向く。玄関ホールのガラスの向こうに、庭師のサイモンと話すバートの姿が見えた。庭を突っ切って行った方が早いと思い、ドアに手を掛けると後ろの玄関が開く。

「残念だけど、僕は見ていないよ」

「そうか」

チャールズと、キィだった。

白いシルクハットで表情は見えないが、こちらに気付き近寄って来る。

「まだ見つからないの？」

あれから結構時間が経っている。

「二階から降りてきたけど、見てないし。……私の部屋にいるかも」

右手に折れて、一階の奥、自分の部屋を目指す。

「こんなに消えることってないの？」

「こまめに帰って来るんだ。また遊び回って服を汚していたら昼食前に着替えなくてはならないから探し始めたんだが」

小さなお子様の保護者はとても大変なようだ。

そして、部屋に少女の姿はなかった。

無言で踵を返すキィを、メグは追う。

「私も探す」

ドナルドもついてきた。

「あの金髪のちびっ子だろ？ 庭で迷っているとかじゃないか？」

確かに、大人なら生け垣の向こう側を無理矢理覗くこともできるが、子どもでは屋敷の姿も見えずに東西南北がわからなくなってしまうかもしれない。

「庭はもう、迷ったりはしないと思うが……」

いつもはっきりした物言いの魔法使いも、彼女のことになると少し自信がなくなるようだ。

「一応探してみようよ」

また玄関ホールまで戻って来たので、そこから中庭に出る。

「ク・ルウちゃんを見ませんでした？」

扉の外のバートとサイモンは同時に首を振る。

「もう三十分ぐらいここで話してるけど、たぶん通ってないと思うよ。いくらちっちゃくても、昨日から元気よく走り回ってるから気付くと思うし。ただ、庭の奥にいかれるとわからないな」

「ありがとう！」

無言で先へ進むキィに代わり、メグは二人に礼を言うと奥へ行く。

「それじゃあ、私は東から探していくね。キィさんは西から、ドナルドさんはこのまま南からってことで」

一緒に探していても効率が悪いと、メグが割り振る。普段なら文句も出そうなものだが、魔法使いは頷くと左の生け垣の中へ消えて行った。

庭の迷路は、単純な作りだ。東西南北に入り口があり、やがては中央に出るよう作られている。途中トピアリーもあるが、本格的なのは迷路の中には作られていない。南の入り口の前には例の羽の生えた獅子がある。そして、迷路の中心には噴水があった。

大人の足で五分もすれば中央にたどり着く。今は全員が早足で動いているので、すぐに再会する。だが、誰の元にもク・ルウはいない。

「迷路へ入る前に、東の方をちょっと見てみたけど、ク・ルウちゃん見あたらなかったわ」

ただあの身長であるから、絶対にいないとは言い切れない。物陰に上手く隠れてしまっていたら、見逃しているかもしれない。

「南の方にもいなかったなあ」

「それじゃあ、北に出て、そのまま大きく外側を回って西に行って、お屋敷の表の方に出てみましょうよ。東へ行ってぐるっと回ってもいなかったら、もう一度部屋を見してみるの。案外戻っているかもしれないわ」

怖いほど静かなキィに、饒舌になる。

歩きながらもついつい話しかけてしまう。

「いつもは自分で帰って来るの？」

「あまりうろついていると怒られるのはわかってるからな。だいたい一時間ごとに戻って来る。ここは【禁猟区】だ。何かあったら困る」

もし【禁猟区】でなければ、彼は文字通り飛んで少女の元へ行く。何かあった場合もすぐ助けられる。普段できることができなくなるのは、きつととんでもなくもどかしいものだろう。

それに、怒られるではなく、キィが心配してるのがわかるから、彼女は定期的に彼に無事を知

らせに行く。それが帰って来ないでは、彼が心配するのも無理はない。過保護だとは思えなかった。

北から西へ。途中昨日見た薔薇園を通り、屋敷の西側へ。ゼピュロスを右手に見ながら、さらに進む。

金色のふわふわ頭が見えて、キィが駆けだした。

「ク・ルゥ！」

「……キィ」

振り向く小さな彼女の顔は、無表情。

何を思っているのかわからない。

メグも走ろうとするが、ク・ルゥの足下を見て止まる。

「何？ それ」

赤い、ここに来て毎日見かけていた赤い髪。

「来るな！」

先にク・ルゥの元にたどり着いた魔法使いがこちらに向かって怒鳴る。

何と問う前に、後ろにいた دونالدが絶叫した。

「カサンドラッ！」

ゆっくりと近づく。

もう一度こちらを見たキィは、今度は何も言わなかった。ようやく見つかった少女を抱き上げ、地面に横たわったモノを見下ろす。

まばらに生えた芝生の緑の中に、燃えるような赤い髪の毛。

駆け寄った Donald が、嘘だどつぶやきを繰り返す。

「嘘よ」

メグも同じように漏らした。

ク・ルゥはキィの肩に顔を埋めたまま、動かない。

「やだ、そんなの、嘘」

騒ぎに気付いたアーサーたちが駆けてくる。誰もが次第に歩をゆるめ、この世で一番出会うことのないだろう場面に直面した。

「まさか」

「そんな」

人々の口から次々とかぼれる言葉。

信じられない。

そんなことがあっていいはずがない。

だが、 魔女カサンドラは死んだ。

男たちの手によって、カサンドラは彼女の部屋のベッドへ寝かされた。



屋敷の主の部屋は入ってすぐの場所にソファとテーブル、奥がベッドルームで、そのさらに奥がバスとトイレだ。

大きなベッドに横たわるカサンドラの目は、今は閉じられていた。

それでも、あの驚きにあふれた緑色の瞳は忘れられない。

「肩の骨折と頸椎が折れている。あと後頭部と額にも損傷が見られる。直接の死因は頸椎骨折による呼吸機能障害、だろうな」

キィの冷静な言葉に誰も反応しない。

イライザはエノーラの肩にしがみつき震えながら、涙で濡れた茶色の瞳をカサンドラへと向けていた。

ドナルドは先ほどから彼女の足下で、ベッドへ顔を沈め声を上げて泣いている。

「カサンドラが死ぬなんて」

アーサーの掠れた声に魔法使いは肩をすくめた。

「【禁猟区】に住むリスクだ。彼女だって承知していただろう」

無神経な言葉に、誰もがキィを睨む。

だが、人としての感情を持っていない彼に対してはどこ吹く風だ。まったく気にした様子がない。部屋をぐるりと見渡し、天井を見上げる。

そして歩き出した。

「どこに行くの？」

答えは返ってこない。その後ろをク・ルゥがちょこちょこことついて行くので、メグも思わず後を追った。

メグが動き出すと、結局全員がぞろぞろと続く。

彼はカサンドラの部屋を出て、廊下のつきあたりにある扉を開く。そこは西の塔に続く階段となっている。

予想外に急な階段を登り、魔法使いは塔の部屋のドアを押した。鍵はかかっていたいなかった。

大きなテーブルと本棚。トロフィーがいくつか。それだけの部屋。メグが泊まっている部屋より小さく、ク・ルゥも含めて十一人が入ると狭い。あまり身動きは取れなかった。

窓は二つあったが、そのうちの西向きの出窓へキィは近づく。開け放たれた窓は、メグの脇腹ぐらいの高さからあり、そして大きい。

「ここから落ちたんだな」

えっ、と声が上がる。

「カサンドラ様は窓辺に腰をかけてよく外を眺めていらっしやいました。外側の縁が腐ってきていて、修理をせねばと申し上げていたところです。しばらくはあまり身を乗り出したりしないようにとお願いしていたのですが」

ヴィクターは、残念ですと最後に付け加えた。

「事故か。なんてことだ、カサンドラ」

チャールズが顔を覆う。その肩をバートが叩いた。

「三階なら死なないことも多いのに。当たり所が悪かったな。身を乗り出してなら、頭から落ち

たのだろうし、運がなかった」

初めて直にカサンドラに出会い、その日のうちに彼女は小説家をやめると宣言。そして今日、彼女はこの世を去った。

カサンドラに運がなかったのだろうか？

それとも、メグに運がないのだろうか。

ついさっきまで、ドナルドと幸せそうにしていた彼女が、動かぬ人形となってしまった。あんなに生にあふれ、生き生きとしていたのに。

「そうだ、あれはどうなった？」

突然バートが声を上げる。狭い部屋で、皆の視線が彼に集まる。

「ほら、彼女の最後の作品。いや、遺作となってしまうのか」

「カサンドラ様の作品は、書きかけも完成品も、出版社に渡す前は全てその本棚の下に収められています」

ヴィクターの言葉に、バートは失礼と言って棚へ駆け寄る。一番下の引き戸を開けるが、中は空だった。

「ヴィクター、ないよ？」

「手直しをしていたとすれば、そちらの机か……」

引き出しを開けるのに少しだけためらっていたバートだが、作品の有無が気になって結局中を覗く。だが、見つからない。

「おかしいな」

上から下まで、全ての引き出しを確認する。

アーサーは本棚を調べた。

棚や引き出しはきれいに整理されていて、引き出しにおいてはほとんど空っぽだった。何も入っていない引き出しもある。

「二階の部屋に置いてあるのかな？」

「見てみよう」

二人が部屋を出て行く。サイモンがすぐその後を追った。

メグは、カサンドラが落ちたと思われる窓から下を覗く。

まばらな芝生の間を縫って、少しだけ赤黒いシミが地面についているように見えた。この距離だ。彼女の出血は少なく、気のせいかもしれない。

だが、もうあの場所には近づきたくない。

頭を振ると、少しめまいがした。

この三日間、あまりにいろんなことがありすぎた。

とっさに壁に手をつく。

左腕をとられた。

「気をつけろ。おまえまで落ちる」

魔法使いが、見かけに似合わぬ強い力で彼女を引き戻す。

「生き返らせることってできないのよね」

聞いてはいけないと思いながらも、口をつく。

「それはできないし、やろうとも思わない。死は与えられるものだ。それをくつがえす気はない」

「ごめん……」

やれるのなら、やってもらいたいというわけではない。

それは、ダメだ。

絶対にダメだ。

「せめて重症なら、【禁猟区】から出てしまえばよかった。すぐに治療し、彼女は元通りになった。だけど、死んだらできない」

「うん。ごめん。私が間違ってる」

生死をもてあそぶことは、魔法使いでさえやってはならないこと。わかりきっていること。

ク・ルゥがメグの足につかまる。

首を左右に振っている。

メグもしゃがんで、彼女の目線に合わせて抱きしめた。

自分より高い体温が心地よい。生きていると感ずることが出来る。

「残念だわ」

本当に残念で、哀しい。

こぼれそうになる涙をぐっと堪えてク・ルゥを抱いたまま立ち上がった。

初日も思ったが、結構重い。

魔法使いが肩に乗せているのがすごい。

気付けば部屋には三人とヴィクターだけだった。みんな降りてしまったようだ。

いつまでもここにいるわけにいかず、外へ出る。

ヴィクターが、今度はしっかりと鍵をかけた。

「危ないですからね」

「そうですね」

急な階段を気をつけて一歩ずつ降りる。

抱きかかえているク・ルゥがハンディだなと思ったところを、キィが後ろから彼女を受け取った。

ありがとうと言いかけた。

「君だけ落ちるのはかまわないが、ク・ルゥまで巻き込まれるのはたまらない」

ありがとうを言わないでよかった。

なぜこんな生意気な口を聞くのだろう。わざと怒らせているとしか思えない。

メグは頬をふくらませて足音高く下へ行く。

魔女の部屋はちょっとした騒ぎになっていた。

アーサーたちは当然だが、イライザやエノーラも戸棚の中を探している。

「何をしていますか？」

少し厳しさを含んだヴィクターの言葉に、メイド二人は手を止め顔を見合わせた。

慌ててバートが割って入る。

「いや、これは無理矢理僕らが頼んだことです。さすがに女性の持ち物を引っかき回すのはまずいだろうってね。……原稿が見つからないんです」

上にはない。あそこは探すと言ってもほとんどその必要がないくらい隠せる場所がない。

第一、カサンドラは隠す気なんてなかっただろう。

ヴィクターも怪訝な顔をする。

「彼女たちに一通り探してもらったが、やっぱり見つからない」

「困ったなあ」

チャールズも部屋をぐるりと見渡ししながらそう言う。

と、アーサーが手を打った。

「そうだ、白の魔法使い殿に憑依(ダウンロード)をしてもらえばいいんだよ！」

「だうんろーど？」

首を傾げるメグと دونالد。Donaldはまた魔女のそばに跪いていた。顔だけアーサーへ向けている。濡れた瞳が、不安にあふれていた。

「まさか、知らないのか？」

馬鹿にした彼の台詞にむっとするが、すかさずチャールズが説明をする。相変わらず気が利く人だ。

「魔法使いには、我々のできないさまざまなことをする力があるんだけど、その中でも特化した特別な能力を持つ魔法使いもいるんだ。固有魔法と呼ばれているけれど、ここにいる白の魔法使い殿は、憑依(ダウンロード)と呼ばれる他の魔法使いには真似のできない能力がある。それは死者と語る能力なんだ。その力で、今まで数々の殺人事件を解決してこられたんだよ」

へえ、と当の本人を見るが、彼はなんとも渋い顔をしたままだ。

その能力があれば、死者に原稿のありかを聞くことができるというわけだ。

だが、Donaldは首を振る。

「だめだ、そんなことさせない！」

キィからの断りはあるかも知れないと思っていたが、予想外な人物からの否定にアーサーは驚きを隠せない。

「なぜだ？ 君も最後の別れができる」

だが、Donaldは首を振る。そして、さらに何か言おうとしたアーサーを、バートの一言がとどめた。

「だめだよ。無理だ」

「何？」

バートはカサンドラをちらりと見てから無理だと繰り返す。

「魔法使いが死んだら、どうなるか知らないのか？」

どうなるもこうなるも、今日の前にある。

人と同じ。動かなくなるだけだ。

「違う。彼女はたまたま【禁猟区】で死んだ。魔法使いにも一応寿命はあるらしいから、もし、

【禁猟区】でない場所で死んだらどうなるか」

バートはキィを見る。白の魔法使いは頷く。

「魔法使いも老衰で死ぬらしいというのは、聞いたことがあるよ」

まるで他人事のように魔法使いが言った。

「で、ここは【禁猟区】だ。【禁猟区】では魔法使いの成長は止まる。魔法の能力もなくなる。死んでも、死んだ瞬間をとらえたまま身体は腐ったりしない。ただし、【禁猟区】から連れ出せば、その身体は塵となって宙に消える、らしい」

「遺体が腐らない!？」

食いつく دونالد の勢いに、バートは気圧されたように何度も顎を揺らす。

「そうだよ。白の魔法使いの力は今回は無理だ。ここは【禁猟区】。【禁猟区】で魔法は使えない。だが、【禁猟区】から出れば肝心の遺体が消えてしまう」

そうかと、アーサーは悔しそうに拳をぐっとにぎりしめた。

悔しいのか、と思う。

何が悔しいのだろう。

カサンドラと話せないことが？ それとも、カサンドラの最後の原稿がどこにあるのかわからないのが？

身勝手に、その考え方にぞっとする。

「残念だ。カサンドラにいろいろ聞けると思ったのに」

うつむくバートに怒りを覚える。

イライラする。

カサンドラの死を嘆くよりも先に、原稿の行方を心配するなんて。どうかしている。

何かひとこと言ってやろうと口を開くが、先にチャールズが声を上げる。

「まさか、彼女はこのことを予知していたんじゃないか？」

「何を……いや、そうかもしれない」

「ああ。彼女ならあり得る」

アーサーに、バートまで三人でうんうんと頷く。

「そうであれば、すべてのつじつまが合うと思わないか？ 部屋に原稿がないのも、西の塔がやけに片付けられていたのも」

いったい何の話をしているのかと、周りを見れば、みんながなにやら納得がいったような表情をしていて、一人取り残されたメグは何が起きているのかまったくわからない。

「確かに彼女の予知は他の魔法使いとまた違って特別なものだったからな。僕でも彼女ほど確実な未来を視ることはできない。僕の憑依と同じように、彼女の予知もカサンドラ固有魔法だ」

現役の魔法使いに支持されて、チャールズはさらに勢いづく。

「考えてもみろよ。常に連載を抱えていた彼女が、この五年ですべての連載を終わらせた」

「ああ。うちは三年前にシリーズが終わってしまっていて、普段ならこちらから言わずとも、目処が立ち始めたころか、遅くとも半年以内に次の提案を持ってきてくれるはずなのにずっと何もなかった。バートのところもそうだったよな？」

アーサーが所属する、コーネル・ライブラリーから一年に三度出ていた素人探偵の人気シリーズ。メグも楽しみにしていたものが、三年前に大団円を迎えていた。ファンの間では孫が次の主役だとささやかれていたからこそ、音沙汰なしで残念に思っていた。

「うちは二年前に終わった。それだけじゃない。常に十以上の出版社から定期的に出していたシリーズが軒並み終了だ。変だ変だとは言っていたんだ」

それが、自分の死を予知してのことなら、わからなくはない。

むしろ、理解できる。

「彼女は、作家の鏡だ」

人間の作家にはできない。いや、作家だけじゃない。音楽家でも、普通の人間は誰しも己の死期はわからない。だからこそ絶筆という言葉も生まれるのだ。

「死期を知った彼女は、最後の作品としてこの間の原稿を作り、渡せるときまで自分の命がないと知っていた」

バートが歩き回りながら話し続ける。

「知っていたから、あの詩に託した」

「ということは、詩の場所を当てればそこに原稿があるということか？」

アーサーが言うようにそうだと三人は盛り上がる。

「そうだ、絶対にそうだ」

「彼女の遺志がそうならば、このバート・ケンプルは従うまでだ。よし、詩を必ず解読してやる」

燃え上がる彼らを後に残し、メグは部屋を出た。

十五年前、大好きな祖母が亡くなった。泣きじゃくるメグに、その伴侶である祖父はそんなに悲しむことはないと言った。祖母は、みんなに囲まれて逝った。幸せだったと。

病を患っていた祖母は、その死期を子どもであった自分にもわかるよう映し出していた。会うたびに痩せていく彼女に、いなくなる日を自然と思うようになっていた。

だから、その日がとうとうやってきたと、どこか納得していた自分がいた。

けれど魔女は。

魔法使いに死の影はあまりに似つかない。

想像もしていなかった事態に、自分だけが取り残されているように感じる。

きちんとベッドメイクが済んでいるその場所に、自分の形を残す。

白い清潔なシーツが気持ち良くて、メグは両手両足を思い切り伸ばし、目を閉じる。泣きたいのに泣けない。さっき西の塔で我慢してしまったのを今更ながらに後悔した。泣いてしまえば、きっとすっきりする。このもやもやとした気持ちも晴れるだろうに。涙にはそういった効果があると思う。悲しいこともそれにまつわる辛いことも全部押し流してしまう。

なぜみんなは泣かないんだろう。泣かなくても、自分の中で処理できるから？ いや、イライザは泣いていた。大人だから？ 大人になれば、泣かなくても済むのだろうか……。

「ミトラ様？」

ノックの音とともに、イライザの声がする。

「はい？」

返事をする、彼女が失礼しますと入ってきた。先ほどまで赤く濡れていた瞳が、今ではほぼ元通りになっている。

「これから執事さんたちとお茶にするんです。お昼も食べていらっしやらなかったの、一緒に食堂へいきましょう」

言いながらメグの腕を取る。

まるで拒否することを許さないように、どうですかという誘いではない。

さあさあ、と無理矢理メグを立ち上がらせ、先導する。

手をつないで廊下を歩く。誰かと手をつないでどこかへ行くなんて、久しぶりだ。

「スコーンと、クッキーと、あとケーキです。エノーラご自慢のレモンケーキ。とっても美味しいですよ」

廊下の窓は東向きで、この時間は日が差し込んでこない。だが、そとは明るく、屋敷の中は暗くはなかった。けれど、昨日とはまるで違うように思える。主をなくしたこの建物全体が色あせて見える。

角までくると折れて中庭が見える玄関ホール。そして西の棟。こちら側は日が差し込んで明るい。だが、オレンジ色の光が寂しげな色に思えた。

食堂に入るとみんながテーブルを囲んでいる。中央にはティースタンドが三つ。スコーンとサンドウィッチが盛られている。さらにクッキーやケーキが大皿にのっていた。クロテッドクリームや色とりどりのジャムが並びとても美味しそう。

「いらっしやませミトラ様。紅茶の種類は何にしましょう」

ヴィクターが進み出て彼女の椅子を引いた。夕食時、アーサーたちが座っていた席に、サイモンとエノーラが座っており、イライザも同じように席に着く。キィとク・ルゥはいつもの席に。カサンドラの正面の席がヴィクターのもののような。

「みなさんと同じもので」

「ではミルクティーを」

たっぷりのミルクに濃いめに出した紅茶を注ぐ。その間にエノーラがケーキを皿へ取った。

「これだけは絶対に食べてくださいね」

隣でイライザがうんうんと頷いている。

「ありがとうございます」

メグの横ではク・ルゥが皿を三つ抱えて無心でケーキにかぶりついていて。この小さな身体にどれだけの甘味を詰め込むつもりなのだろう。キィは少女を見てうんざりしたような顔をしている。彼の前には空の紅茶のカップだけがあった。

淹れてもらったミルクティーを一口飲む。普通のストレートティーよりもミルクを入れた方がメグは好きだった。口当たりがまるやかで優しい。

皆が口々にケーキを褒める。

「やっぱりこのレモンケーキは風味と言いだんさと言いだん最高だよ」

「私も、エノーラのケーキの中ではこれが一番好きだわ。もちろんチョコレートたっぷりのやつも好きだけど」

エノーラは賞賛を真っ向から受け、そして当然さと笑顔を見せる。

「褒めても今日はこれだけだよ。まあ、明日新しいのを焼くのはかまわないけどね」

ク・ルゥも相変わらず一言も話さないし、表情に起伏もない。だが、お代わりの要求が激しく、彼女がたいそう気に入ってるのはよくわかる。

まるでカサンドラの死などなかったかのように、和気藹々とした雰囲気戸惑う。

ケーキを小さく切って食べる。美味しい。とても美味しいが、手が止まる。

「レモンは嫌いだった？」

それをめざとく見つけたエノーラが心配そうに言う。メグは慌てて首を振った。

「いえ。とっても美味しいです」

けれど、周囲と自分の温度差に違和感を覚えてしまう。

彼らは無理に明るく振る舞っているようには見えない。とても自然だ。

「そうかい？」

エノーラは、じゃあなんでとは問わなかった。問われれば楽なのに。そうはさせてくれない。

手が止まるメグに、みんなの視線が集まる。

「みなさんは、その……」

言いよどむメグを、誰もが待つ。

なんと問えばいいのだろう。どうすれば当たり障りなく、この胸のつかえを解き明かしてもらえるのか。

ついこの間も同じようなことを悩んでいた気がする。

そして結局、抽象的にも何もなく、直球で聞く羽目になったのだ。上手くたとえ話で話を聞くことは、自分には向いていない。

「みなさんは、悲しくないんですか？」

誰もが初めはきょとんと目を丸くして、怒るわけでもなく、少し寂しそうな表情をする。

そうして、次は宙を見つめ、隣と複雑な顔をするのだ。

最初に口を開いたのはやはりヴィクターだった。

「悲しいですよ、我々も」

「でも……」

その先を言いよどむ。

まったくそんな風には見えない。すごく、そう、穏やかで安定している。

「もちろん、悲しいです。でも、カサンドラ様は望みませんから」

「望まない？」

「ええ。悲しみに暮れ塞ぐ私たちを、望みません」

なぜそんな風に断言できるのだろう。

ヴィクターの立派なヒゲをじっとみつめる。すごく、不思議なものを見る目で。



彼は困ったように首を傾げた。

すると、イライザがメグに話しかける。

「カサンドラ様は、屋敷が常に明るいようにといつも言っていました」

さっきの泣きべそとは対照的な満点の笑顔。

「こんな場所だから、暗くなればあっという間に屋敷全体が重く沈んでしまう。だから常に笑顔を」

確かに彼女の笑顔は周囲を明るくする。

「あんたは調子に乗りすぎるけどね」

得意になるイライザを、すぐさま横からエノーラが釘を刺す。

「ひどい、エノーラ！ カサンドラ様に『イライザはいつも元気でいいわね』って言われてたんですよ」

「そりゃおまえ、騒がしいと暗に言われてたんじゃないか？」

サイモンも一緒になって笑った。

「そんなことないわ！ 失礼しちゃう」

ひとしきり揉めて、そして、笑う。

「ミトラ様。私たちはカサンドラ様を慕っておりました」

あたためて、真剣な面持ちで、ヴィクターがメグに向き合う。

「人里離れた土地でやっていくには、カサンドラ様のことを嫌ってはいけません。いくら主従の雇われの身だといえども、これだけ長い間お仕えできたのはカサンドラ様だったからこそです。このようなことになり、とても残念に思っています。悲しみはあります。ですが、嘆くことではないと思っています。カサンドラ様はこのお屋敷を愛していた。みなが笑顔であるこの屋敷を」

ヴィクターの言うことは、わからなくはない。たぶん、わかっている。

けれど、受け入れがたいのも事実だった。

自分が何を拒んでいるのか、その正体がかめないでいる。

彼らの普段と変わらぬ姿に、拒否感が募る。

ドナルドの、あの嘆き悲しむ姿が一番まともに見えた。あれが、メグの中では今の正常なありかただった。

「ヴィクター、今後はどうするんだ？ カサンドラから何か指示は受けているのか？」

キィガク・ルゥに新しいケーキとクッキーを取り寄せながら聞く。少女の腹の中には、メグが確認したものだけでもケーキが三つとスコーンが四つ。スコーンはたっぷりとジャムや蜂蜜をかけて食べていた。

洋服の下に何を潜ませているのだろう。

「カサンドラ様は、すべてあるがままにとおっしゃっておりました」

「あるがまま、か……」

魔法使いは何か考える風にヴィクターの言葉を繰り返す。

「また彼女らしい意味深な言葉だな」

「抽象的な言い回しが大好きなお方でしたから」

にこにこことヴィクターが応じる。

「遺体をどうしろとは、何も言ってないんだな？」

「ええ。普通なら墓地に埋めるのですが……、魔法使いに作法はないのでしょうか？」

キィは笑う。

「作法も何も、魔法使いが死ぬのに出くわすことが珍しすぎて。前に会ったのは塵となったし」

「そうですね。腐ると言うなら早急に考えなくてはと思うのですが、あのままお変わりがないと聞けば、あるがままにというカサンドラ様の言葉を思い出してしまって」

「だろうなあ」

「屋敷は、しばらくこのまま維持していこうと思っています。ですから、ご遺体も何かあるまではしばらくそのままに。そのうち立派な墓碑でも建てましょう」

そうか、と魔法使いは頷いた。

「私もこの年じゃ新しいところで働くのは大変だからねえ」

エノーラが言うと、サイモンもそうそうと同調する。

「俺の庭を捨てていくなんでできねえよ。執事さんじゃ俺の芸術的なトピアリーを管理までできねえしな」

「そうですね」

にこにここと、彼の言葉に頷く。

「老人ばかりじゃ心配だからね。しばらくはみんなに付き合っただけよ」

イライザが言うと、年寄り二人はそろって肩をすくめた。

「ここなら書庫があればぜんぜん退屈しないし！」

「そっちが目的じゃねえのか？」

「目を離すとすぐに消える悪い癖だよ」

耳の痛い突っ込みを、彼女はつんとそっぽを向いてやり過ごす。

「それじゃあ、たまに俺たちも寄ろう」

「ク・ルウちゃん来るなら腕に寄りをかけて甘いものをたくさん作らないといけないねえ」

エノーラが嬉しそうに言う。それ以上にク・ルウはフォークをがんとテーブルに叩きつけて悦びを表した。行儀が悪いと、キィが横からフォークを取り上げる。

「ただ、期待はしないでくれ。俺たちの時間の尺度はあんたたちとは違う」

「承知しております」

ヴィクターが静かに頭を下げた。

そして、午後のお茶会は終わりを告げる。

誰よりも一番食べていたク・ルウが、目をとろんとさせて動きが鈍くなる。

メグも紅茶のお代わりをもらって、すっかりおなかがふくれた。昼ご飯を食べなかった分も取り戻した感がある。

ただ、ここに招待してくれた皆が望んだような結果は、得られなかった。心は晴れるどころかささらに暗雲が立ちこめてしまったように思える。

窓の外を見ると、バートの姿がちらりと見えた。

自分の眉間がきゅっとしまるのを感じる。

「ミトラ様は、ケンプル様たちが冷たいと思いますか？」

突然の執事の言葉に、メグははっと目を見開く。

イライザとエノーラはテーブルの上を片付けており、サイモンはそうそうに部屋を出て行った。キィはク・ルウの世話で精一杯の様子で、こちらまで気にしていない。彼の言葉はメグにしか届いていない。

「聞いてみてはいかがですか？ 彼らが何を思って動いているのかを」

「え……？」

でも。

「そんなことを聞くのは失礼ですか？」

考えを見透かされる。

「それはミトラ様がどこかで彼らの真意を理解しているからではないでしょうか」

「私が、理解？」

ええ、とヴィクターは肯定する。

「悲しんでいる姿をしていても、本当に悲しんでいるかは本人にしかわからない。同じように、悲しんでいないようでも本当に悲しんでいないかは、周りの人間にはわかりません」

真剣な彼の顔が離れて行く。

「さあ、ミトラ様」

促されて、立ち上がった。キィがちらりとこちらを窺う。

「お茶、美味しかったです。ありがとうございます」

辛うじてそれだけ言うと、メグは頭を下げて食堂を出た。

廊下へ降り注ぐ西日がさらに厳しいものとなっている。あかね色に染まった通路を、メグは頭を垂れたまま歩いた。

虫眼鏡で階段を一段一段調べているアーサーに出くわした。彼は真剣そのもので、後ろ向きに降りてくるその背中に、ぶつからないようメグが気をつけなければならなかった。

「ああ、悪いね。夢中になると周りが見えなくなる」

階下まで降りてきて、顔を上げた。

「ミトラくんも原稿探し再開かい？」

問われて、反射的に頭を振ってしまった。

アーサーはおや？ と首を傾げる。

よく見ると、彼は埃だらけだった。同じように屋敷中這いずり回っていたのだろうか？

「私は、もう詩を解くのはやめます」

我ながら暗く重い声だ。アーサーもそれを感じたことだろう。

ふむ、とメグから視線をそらし、中庭を眺める。西の棟の影が大きく伸びて、庭を覆っていた

。「まあ、うん。そうか。残念だけど探そうと思うのは君の意志だしね。無理強いはいしないさ」  
予想していた言葉と違う。彼ならもっと、メグの撤退を喜ぶと思っていた。

先ほどの食堂でのやりとりでメグの中のたがが外れたのか、ストレートに言ってしまう。

「ライバルが減ってよかったんじゃないですか？」

普段なら絶対こんな聞き方はしない。

すごく、嫌な聞き方。言ってしまったそばから自己嫌悪にさいなまれる。

アーサーもそれを感じたのだろう。少し難しい顔をして腕を組む。

謝ってしまえ、今ならまだ間に合うと、自分の中のもう一人の自分がせつつく。けれど、すみませんの一言が口からこぼれることはなかった。

アーサーの言葉を待ってしまう。

失礼だと、怒られるかもしれない。

怒られるより前に、謝ってしまえば相手の怒りが少し軽減される。自分が悪いと認めてしまえば、ぶつける怒りを手加減してしまうのが普通の人間だ。今までそうやって危険を回避してきた

わかっているのに、メグは黙りを続ける。

そうして、口を開いたアーサーの声は普段と変わらぬものだった。

「うーん。カサンドラが探して欲しいと思っているのなら、なるべく多くの人間が思惑に乗っている方が彼女も喜ぶだろうと思うから。ミトラくんが探すのを諦めるのは反対に残念だよ」

先ほどから、予想外の答えばかりだ。

なんだか、おかしい。

「昔からあの人は、周りを驚かせたりはらはらさせることが大好きだったからなあ。今回も同じ。彼女の、茶目っ気みたいなものさ」

「でも、結局この詩を残したことはカサンドラの遺志だと言い出したのはバートさんですよ。当たってるなんてわからないし、実際詩を解いたらそこには何もなかったのに」

「それならそれでいいさ。彼女のいたずらに最後まで踊らされたってだけだ。彼女もどこかでそれを見て喜んでると思うよ。右往左往して、結局何もないとがっかりしてる俺たちを見てね」

あの人はそんな人だとアーサーは笑った。神経質に見える彼が、思いきり笑っているのに遭遇したのは初めてだ。

「五年くらい前かな、雨でぐっちゃぐちゃになった原稿が届いて絶望してる俺の前に、本当の原稿を持ったカサンドラが現れたこともあったよ。あのときは参ったな。驚いた？ って笑う彼女が悪魔に見えたよ。こうなることをわかって、でもそれを防ぐことをせずに俺がちょうど頭を抱えてるところへ現れるようにしたんだ。そんな俺を見て嬉しそうに笑うんだこれが」

そう言いながらアーサーも笑ってる。

決して笑えるような内容ではないのに。

彼はとても嬉しそうにしていた。

「詩の場所を突き止めるのが、カサンドラのため？」

「本当に原稿があるかはわからない。五分五分くらいだとおもってる。でも、これが俺なりの追悼だ」

追悼、とメグはつぶやいた。

「そう。追悼。じゃあ、俺は原稿探しを頑張るよ。ミトラくんも思い直すなら早いほうがいい。先に俺が見つけてしまうかもしれないからな」

メモを人差し指でなぞると、アーサーは二階へ上がって行った。取り残されたメグは、バートを探しに中庭へ出る。

咲き乱れる薔薇園の中央で、タレ目のバートはどこか遠くを見ていた。

種類も色も様々な薔薇が夕焼けに染まり、さらに色を濃くする。深紅の薔薇は、カサンドラが流していた血を連想させた。

「やあ、メグちゃん」

「よく私だってわかりましたね」

彼が前を向いたまま声を上げた。足音で誰かが近づいていることに気付いたのだろうが、なぜこちらを見ないでメグだとわかったのか。

「だって、足取りが重いもん」

振り返り、彼女の足を見る。メグも、思わず自分の足を見下ろす。

バートはそんなメグを見て笑った。

「今この屋敷に、そんな風に重苦しく歩く子はメグちゃんくらいしかいないから」  
風が吹く。

二人の間を、北東の風が吹き下ろす。

「メグちゃんは、俺たちが原稿探ししてるのが不満？」

こんな状態で、よくも原稿を探そうなどと言い出せる。

聞きたくても聞けないその台詞を、目の前のバートが触れる。確信を突く真っ直ぐな言葉に、メグは下を向いて頷いた。

「普通なら悲しんで悲しんで、だよな。うん。それが普通。それが通常の反応。俺もわかってるさ」

彼の右手が赤い薔薇をなぞる。

「でも相手はあのカサンドラだからなあ。どうも感覚が鈍っているのかもしれない。これが、人間の作家さんなら……、今頃葬儀だなんだって走り回ってるだろうね。でも――、カサンドラだからな」

それ以上上手い言葉が見つからずに、バートは何度もカサンドラだからと小さな声で繰り返す。

「さっき魔法使いさんも言ってただろ？ 【禁猟区】に住むリスクを彼女も承知してただろうって。その通りだと思う。だからこそ、カサンドラはあれだけの作品を書けたんだ。魔女であるというのに、人の心を惹きつける作品を生み出した」

リスクを負わねば、作品に深みなど出ない。

バートはそう言っている。

「己の生を脅かすリスクを負うことによって、彼女の作品はさらに輝いていた。あの人の作家根性はすばらしい。俺はね、本当に小説家カサンドラを敬愛していたんだ。だからこそ、最後の作品を探す。このまま見つからない、で終わりにしたくはない。あの人の最後の作品だ。この世に出してこそ、彼女も救われる」

そこでここに来て初めてバートはメグの目を見た。どこまでも青い、晴天の色をしている。その瞳に宿るものを、メグは理解できない。

「この世に出してこそ、彼女は救われる。そう思わないか？」

素直に頷くことはできない。

メグの反応に、彼は困惑や不快感を見せることなくまた視線を薔薇たちに戻した。

「ここをよく、カサンドラと歩いたよ」

そう言って歩き出す。

メグも後を追った。

「こう見えても自宅で薔薇を育てていてね」

「薔薇園があるんですか？」

「イヤイヤ、さすがに無理だよ。植木鉢で細々と、ね」

花びらを、優しくなでながら、バートは西へ西へと進んでいった。

「俺がせっかく美しく咲かせた薔薇を、あっという間に散ってしまうから、カサンドラに見てもらえないのが残念だと言ったらね、彼女は、『散るからこそ美しい』って言ってたよ。生と死が常に隣にある人間は、とても美しいってね。メグちゃんはカサンドラの作品、結構読んでいるんだろう？」

「はい。ほとんどは」

「ほとんど、か。それはすごい。なら、彼女がこの屋敷に移ってきてからの方が、作品が生き生きしていると言われているのは知ってる？」

「ええ」

メグもそう思う。

昔の作品も好きだけど、彼女は引っ越してからの方がよい。そして年々魅力を増していく。「当然だと思うよ。【禁猟区】は魔法使いの隣にすら死を住まわせる。影があつてこそ光は強く存在できる。命がけで生きている人間は美しい。リスクが、カサンドラに必要だったんだ。だから、彼女の判断でここにいたというなら、俺は悲しむことなんてできない。死と隣り合わせの人間でなく、死から遠い場所にいることができる魔法使いがわざわざ選んだ【禁猟区】だ」

何か、違う。

何が違うのか、その答えを得られぬままメグはバートと別れた。

なんとなく、もう一度カサンドラが落ちた場所を見ようと西の橋、ゼピュロスのそばを通る。昨日から何度となく通ってるこの道も、通るたびに印象が変わる。

現場が視界に入ってくると、先客がいることに気付いた。

チャールズだ。

彼が、じっと上を見上げている。

こうなればとことん聞いてみるぞと、メグは彼の元へ歩み寄った。

「チャールズさん」

「ああ、メグさんか。どうしたの？ 原稿探しかい？」

彼もまた原稿原稿。

メグは首を振った。

「そうか」

そして、二人は黙り込む。

いつも穏やかで場の空気を気にするチャールズらしからぬ姿だった。もともと影のある風貌ではあったが、のんびりした性格で三人の中では一緒にいて一番落ち着く人だった。今は、とても落ち込んで見える。

けれどそれがこの場には似合っていて、メグも倣う。

長い黙祷。目を閉じ、頭を垂れ、目の裏に赤い髪をした彼女の姿を思い浮かべる。

生前の美しい彼女を、自分の中に思い描く。

どれだけ時間が経っただろう。いつの間にかチャールズはまた空を見上げていた。

魔女が落ちた西の塔を見つめている。

「案外あっけないものだよ」

あっけない。そう。魔女の死は、人間の死以上にあっけなかった。

そうだ。求めていた単語だった。

あまりにもあっけなく、魔女の死を受け入れられない。

魔法使いの死にしては、あまりに人間的なのだ。

不注意で、誤って、ときには世界を脅かす魔法使いがちょっとした手違いで死んだ。

「死を身近に感じられないと、カサンドラはよく言っていた。この【禁猟区】に住んでいても、そんな風に思えてしまうそうだ」

ずっと上を向いたまま。

首が疲れないのだろうか、こちらが心配になってしまうくらい。

「彼女は今、死を感じているのだろうか」

詩的で、なんと答えたらいいかわからない。アーサーやバートたちのように彼の考えに賛同するしないではなく、理解できない。首を傾げてしまう。

「ごめん。わけわからないよね」

ようやく、いつも通りのチャールズの顔になる。

「僕も、カサンドラの死には正直戸惑っているんだ。屋敷の人たちみたいに、大人にはなれないから」

そうか、やっぱり彼らは大人なのかと少しだけ納得する。

反対に、自分は子どもだ。

「僕も子どもだね」

メグの考えを見透かした彼の言葉に少しだけ笑みがこぼれた。カサンドラが死んでから、初めて笑ったかもしれない。

「彼女の作品は常に生と死を扱っていたよね」

「はい」

それが主題であるかは別として、それでも何かしら生を問う場面が出てくる。

「年々彼女の本に惹かれる人間が増えていったのは、その生と死に関する記述が真に迫ってきていたからだって言う人もいたんだ。僕もそう思う」

【禁猟区】に身を置くことによって、人としての生と死に近づいていったカサンドラ。

だが、魔女は死を望んでいたのだろうか？

リスクを負い、危険をはらんだ状況に身を置き生を感じる。

そこまではいい。だが、死ぬことをよしとしていたのだろうか？

「さ、それじゃあ僕は行くね」

「原稿を探すんですか？」

非難めいた口調にならないよう注意する。

「僕がカサンドラにしてあげられることは少ない。その数少ないうちのひとつだと思う。バートの言うことは、案外当たっていると思ってるんだ」

チャールズはそれじゃあと手を振ってメグを一人置いていった。

メグは、空を見上げた。

次第にオレンジから夜の色が迫ってくる空の中に、主をなくした西の塔が真っ直ぐ突き刺さっていた。



## 四章 悪意ある予知

---

中庭の中央には噴水がある。

よくある寂れてポンプが止まり、水が濁ったものでなく、とりあえず見た目はきれいな透明の水が噴き出している、きちんとした噴水だ。

白の石でできていて、大理石ではなさそうだがすべすべしていて気持ちがいい。中央のてっぺんにはラッパを吹いている天使の像があった。とはいえ、そのラッパから水が噴き出しているわけではない。

アフタヌーンティーでかなりしっかりとケーキやサンドウィッチを食べてしまったので腹が減らず、夕飯はパスした。どちらにしろ、あまり食欲はない。

無理矢理参加すれば、また手が止まっていると心配をかけることになってしまう。お互いそんなやりとりにはうんざりするだろうから、それなら夕食を断りほんの短い間心配される方がましだった。

それでも、あのお茶を飲んでいたときと今とでは、少し気持ちが変わってきている。あとほんの一押しで、いつもの自分に戻れる気がした。

あたりはすっかり日も暮れて、明かりは空にある月と星、そして屋敷の窓から漏れる光のみだった。

都会では見ることのできない満天の星にうっとりする。宝石箱からこぼれたような黄色や赤、青のきらめきが空を覆っている。人里離れたこんな場所だから、静かなのかと思えばそうでもない。北からボレアスの息が漏れ、吹き寄せ、木々がこすれあいざわざわと騒がしい。噴水からあふれ出る水も、水面だけではあきたらず大気に音を広げる。そして、虫の声。秋になればもっとたくさんの音が聞こえてきそうだ。

そんな場所だから、そっと忍び寄られると本当に近くに来るまで気づけない。

だが、彼の声は隠れているつもりなのかもしれないが、声が風に乗って丸聞こえだった。

「やめろよ、ク・ルゥ。よせって！」

魔法使いだ。

「僕に何を……て、押すな！」

何をしているのだろうか？ 噴水から腰を上げようとする、彼が生け垣の向こうから現れた。白づくめの姿は、闇夜に浮かぶ。いつもは肩にいるはずのク・ルゥも、今日は自分の足で彼の後ろを歩いている。

ぱっちり目が合い、彼はよう、だとかおう、だとか、小さな声でぼそそと言って横を向いた。

すると、足下のク・ルゥが彼の向こう臍を蹴る。

「っ！ ク・ルゥ！」

顔を盛大にしかめ足を抱える彼は、少女をキッと睨み付ける。

だが彼女はそんな視線をものともせず、メグの隣に進み出て自分も噴水の縁に座った。

「もう宝探しはやめたのか？」

シルクハットのつばを動かしながら、キィが横を向いたまま言う。

「あきらめがいいんだな」

「キィ！」

間髪入れず、ク・ルウの鋭い叱責が飛ぶ。五月蠅い、と言って彼はシルクハットをク・ルウにかぶせる。真っ白な髪が、夜の風に吹かれる。

少女は大きさの合わない帽子を横へ置くと、ふくふくとした手を伸ばし、メグのそれに重ねた。無表情な金色の瞳の奥に、ちろちろと感情の炎が見える。真っ直ぐのぞき込んでくる金の瞳に、メグが目をそらす。

「詩を解くのが、カサンドラのためになるのかな？」

魔法使いは立ったまま肩をすくめた。

「さあ。死んだやつが何を思っていたかなんてわからない。結局自己満足だろ？」

「自己満足？」

そうさ、と彼はかくかくと首を前後に揺らす。

「この世の中誰も自己満足のやりとりで生きている。死んだ者相手だと、その押しつけもいっそう激しくなる」

「なんか嫌な言い方」

口が尖る。

「いいじゃないか。それで世界は上手く回っている。こうしたら相手のためになる、こうすることを相手が望んでいる。相手はきっと喜ぶだろう。相手が喜べば自分も嬉しい。みんなハッピー。だろ？」

魔法使いはその場でくるくると回る。マントの裾が風に乗ひらひらと舞う。

「僕はそれが悪いとは言ってない。上手くいくときといかないときはある。上手くいけば互いにハッピー。いかなければ関係がもつれるだけ。互いの自己満足を折り合っただけ。誰も自分が嫌だと思える状況にあり続けるのは辛い。けれど、そうやって自分が辛いことにより他の誰かが辛くない。自分は代わりに請け負って、あげている。他の誰かのためになっている。自己満足の欠片が生まれる」

真っ白な手袋の人差し指を、メグの鼻先に突きつける。

「自己満足の欠片は大切だ。それがなければ人は生きていくことができない。もちろん、魔法使いだって同じ。ちょっと尺度が違うけどな」

次から次へと繰り出される言葉に翻弄される。

「カサンドラが失われた。突然の事態。しかし、慌てず騒がず屋敷の人間も自己満足の欠片を生み出すことにした」

「自分たちが悲しみに暮れていたなら、カサンドラが悲しむ？」

「そうだ。それでいい。心ってのは簡単に崩壊するからね。そうならないために自己防衛の自己満足。人は、それでいいんだよ」

魔法使いの笑顔と言い方が優しく、心が落ち着く。

「詩を解けと言うカサンドラの遺志を尊重すること？」

「そう！ 彼女の遺志だ。それを遂行すれば、人間的な言い方だと、『天国で彼女が喜ぶ』となる。魔女に天国があるかは知らんが」

原稿を世に公開することがカサンドラへの餞(はなむけ)だと、バートたちが言った。それは、自分勝手な解釈に過ぎない、自分の都合だけだと、そんな風に思っていた。

自分たちの都合を優先するような、そんな人たちだと思っていたからショックだった。けど、キィの言う自分を守るための自己満足の一部だと開き直って言われると、逆にすっきりした。

みんな、理由を述べはしているが、カサンドラが亡くなって悲しい。その悲しみを埋めるために彼女がきつこう思うだろうと意味づけをして、悲しみを紛らわそうとしている。

メグの表情が変わったのをキィも、ク・ルゥも察知する。

「ありがとう。そうね。私も明日からまた詩の解読頑張ってみようと思う」

「君がそう決めたなら反対するいわれはない」

素直じゃない。

それでも、彼がメグを慰めようと色々言ってくれたのはわかるので、もう一度お礼を言う。

「ありがとう。ク・ルゥちゃんも、ありがとうね」

少女はぎゅっと目をつむって、メグの膝の上に倒れ込む。

相変わらず感情の表現の出し方が謎な子だ。でも、元気づけてくれようと、キィをけしかけたのは他ならぬこの子だ。メグの太ももの上でごろごろはしゃぐので、脇腹をくすぐってやると、嬉しそうに首をすくめた。

それはそうと、せっかくのチャンスなので彼に聞いておきたいことがあった。

「ねえ、カサンドラはなぜ自分の死を回避しなかったの？」

お役ご免と背を向けて歩き始めていた彼の背中に投げかける疑問。

「なんだって？」

「言ってたじゃない。彼女の固有魔法が予知だって。予知できるなら、カサンドラはなんで？ それとも、予知だけで未来は変えられないの？」

あらかじめ知るだけで、それは確定されたことなのだろうか？ それじゃあ未来は決められているということか？ 運命論者ではないけれど、ついそんなことを思ってしまう。

ヴィクターの言っていた神話のカサンドラの話。書庫に神話の本があったので調べたら、信じてもらえない予言能力を授かった悲劇の女王の名前だった。なんだかとっても、暗示的だ。

「未来は、変えられる」

「じゃあ……」

彼女は死にたかったのか？

考えがそのまま顔に出たのだろう。慌ててキィは違うと否定した。

「違う。違うんだ。確かに誰よりも生と死には関心を持っていたやつだが、それは絶対に違う」

隣のク・ルゥも一緒になって頷いた。

彼はぐるぐるとその場を歩き回った。難しい顔をしながら、何かを思い切るために歩き回る。

少女はその姿をじっと見つめ、待った。

だからメグも、待った。

何周したかわからなくなったころ、やっともといた位置に戻る。

「知っている人間もいるが、知らない人間の方が多い。だから基本的に他言無用だ」

彼の迷い方で、話して良いものか悩んでいるのはわかっていた。だが、その基本的というのは謎だ。

「僕だって悩んで結局あんたに話すんだ。だから基本的に。絶対話すなとは僕も言えない」

「彼女の、その一名誉を守るためならいいってこと？」

「相手見て話せよ？　しょーもないやつなら『彼女にも色々あったのよ』とかなんとか適当に言って想像させとけ。人によっては、悪い風に解釈されかねない」

よくわからないが、とりあえず頷いた。彼の話を受ければそれがわかるのだろうから。

「僕ら魔法使いには、確かに人と違う万能の力がある。空だって飛べるし、何も無いところからものを出すことができる。遠いところを一瞬に移動することも可能だ。できないのは、過去や未来に時を行き来することと、死者を生き返らせること」

ああ、やっぱりだめなんだ、と思う。

もしできるなら、人間はきっと、大切な人の遺骸を抱え、魔法使いを捜して歩くだろう。

「ただ、得手不得手がある。いや、得意なものがあるって方が当たってるかな」

「あなたなら憑依(ダウンロード)」

「そう。他の魔法使いも死者の身体から情報を断片的に読み取ることができる。けれど、あくまで断片的だ。僕のようにはいかない」

どんな風に読み取るのだろう。

とても興味があるが、今はそのときではない。

「カサンドラの場合は予知だった。未来を視ることのできる魔法使いは少ない。だから、彼女は本当に特殊な能力を持っていたといえるだろう」

「そうなんだ。あなたも少しならできる、とかだと思った」

「時の流れが関わるものは、魔法使いにだって制限が付いてくる。未来が視えれば、今度は未来を変えてみたくなる。そうだろう？」

きっと、そうなんだろう。そして魔法使いは簡単に変えられる力を持つ。

「だから、彼女の未来を視る能力にも制限があった。カサンドラは、自分のその能力を【悪意ある予知】と呼んでいた」

「悪意？」

キィはそうだよ、と後ろを向いた。

こちらに背を向け天を仰ぐ。

「あれは悪意としか言いようがない」

キィはク・ルゥと反対側の、メグの隣に座った。

「カサンドラの予知は、確かに変えられる。でも、変えるとさらに酷い事態になる」

彼は難しい顔をしていた。瞳の奥が揺れている。

「どんどん悪い方向へ進むんだ。彼女はそれを嫌と言うほど過去に繰り返した。繰り返して繰り返

返して、ようやくここ数百年で手を出さないことを学んだんだ」

数百年という単位をさらりと語る彼は、やはり魔法使いなのだ。

見かけや言動から、自分よりも年下か、同じくらいにしか見えない彼は、かなりの人生の先輩なのだ。つい忘れてしまう。

「たとえば、大昔、大きな事故が起きた。大勢の人間が死に、怪我をする。カサンドラはそれを予知し、事故を未然に防いだ。大勢の人間が助かったと思った」

けれど、未来を変えればさらなる悪夢を呼ぶ。

「その事故で亡くなるはずだった人間が、その一ヶ月後、さらに大勢の人間を巻き込む事故を起こした。死ぬはずがなかった人間が死んだ」

「それを、予知はできないの？」

「できるさ。そしてまた」

「――さらなる悲劇を呼ぶ？」

それには、彼は答えなかった。

「人間が関わることだけなの？ 自然とか、そういったものは？」

「あったよ。竜巻で被害が出るとわかったカサンドラはその竜巻自体を消した。その一週間後、今度はその一帯を大地震が襲う。未来では、竜巻のせいで復興作業をしており、住んでいた住民のほとんどは親戚の家や、避難所で生活していた。地震の被害に遭うことはなかった」

「地震で大勢の人がなくなったのね」

「そう。竜巻で死ぬ人よりさらに多くの人間が死んだよ」

悪意の予知。言葉の意味がわかる。キィが、メグに話すことを悩んだのもわかった。

カサンドラは予知に翻弄され、何度も繰り返した。つまり、多くの被害者を出したのだ。それを知れば、彼女を罵る者もいるだろう。

けれど、目の前で今死にそうになっている人を助けたら、さらなる悲劇が生まれると知っていても、その手をふりほどくことができる人間はいるのだろうか？ 魔法使いと人とは違うと言えども、あのカサンドラならきっと悩み抜いたことだろう。

「よかれと思ってすることが、さらなる悲劇を生むのね。ことごとく裏目に出る。そんな予知、辛いだけだわ」

ああ、と彼も同意する。

「百年ほど前、カサンドラは子どもを孕んだ。だが、彼女は身体の時間が止まる【禁猟区】に長く留まった。なぜだと思う？」

話の流れから、答えは一つだ。

けれど、それはとても、辛い。

息を詰めたキィを見るメグに、彼も少し寂しい笑みを口元に浮かべた。

「子どもを成長させないようにするため。子どもを産めば悪いことが起こるのを知ってしまったそうさ。【禁猟区】に留まれば、その最初の悪夢は避けられる。だが、その先さらに悪いことが起こる。自分の子どもに、だ。悩んで悩んで、そして未来を変えることを選んでしまった。予知に反することが、どれだけ辛いことかを知りながら」

カサンドラの孫、ジラのことを思い出す。

イライザは彼女がカサンドラと似ても似つかない陰気な女だと言っていた。もちろん、生来持って生まれた気質かもしれない。だが、この話を聞くと、もしかしたら彼女をそうさせてしまったのも、この悪意の予知が引き起こした何かのせいではないかと、考えてしまう。

「結局何が起こるかについては口を閉ざしたままだったな」

キィガク・ルゥに同意を求める。だが、少女は足をぶらぶらさせて彼の問いには答えなかった。

魔法使いが聞いていないのだから、当然と言えば当然だが、いつも一緒にいる彼らだ。屋敷の人たちも彼女を可愛がり、カサンドラも友と言っていた。色々聞きかじっていただろう。そう言えば、今更だが一番最初にカサンドラを見つけたのも、ク・ルゥだった。こんな小さな子が見かけだけは普段と変わらずにいるのに、一人落ち込んで悲しんでるアピールをして、今思えば恥ずかしい。

なんとなく、隣のク・ルゥを抱きしめると、彼女も同じようにぎゅっとメグに抱きつく。小さな身体がいとおいしい。

「カサンドラから引き出せたのは一言だけ。『これが最悪の事態を引き起こしたのさ』ってヤツだけだったな。いったいどんな最悪だったのか、そこまで話してはもらえなかった」

打って変わって不機嫌そうな魔法使い。

よっぽど教えてもらえなかったのが心残りなのだろう。

「まあ、カサンドラの能力が単なる予知でなかったのは、本人も当然のことだろうと言ってたな。僕もそう思う」

「なんで!？」

驚いて、声が裏返る。

それはない。なぜ今更そんなことを言うのか。

「言ったろ？ 魔法使いは未来や過去にはいけない。死んだ者を生き返らせることはできない」

「うん……でも」

彼は全部を言わせない。強く左右に頭を振る。

「もし、カサンドラの予知が単なる普通の予知だったら、この二つの大原則に、大いに反する」

「あ……」

そうだ。未来を見て、未来を変えてしまう。死ぬはずの人を死なせない。

「そりゃもちろん目の前でおまえが崖から落ちそうになってたら、さすがの僕も助けてやるよ。だけど、それとカサンドラの予知で知った死をくつがえすのは根本的に違う。死にそうになっている人間が、偶然魔法使いに出会ったらラッキーだった、未来がそうだったということだ」

魔法使いはなんでもできる。彼らに悩みなんてあり得ない。そう思っていた。

「世界は上手くできてるよ。バランスを取る能力に長けている。万能なんてことは絶対はない。それなりに制約がつきまとう」

横顔しか見えない。青い方の瞳が笑っている。彼の言い方が、カサンドラに向けてだけではないことに気付いて、思わず聞く。

「あなたにもあるの？」

だが、キィはそれに答えなかった。

黙って立ち上がると、ク・ルゥを抱きかかえ肩に乗せる。

結構重いのに、よくやるなと思う。

「さ、そろそろ屋敷に戻ろう。風が冷たくなってきた。ク・ルゥが熱を出してしまう」

確かに、ずいぶんと冷えてきた。水場のそばで、北風が空気をさらに冷やすからだろう。メグは自分の腕を抱く。ひんやりと冷たくて、少し鳥肌が立っていた。思ったより長く話し込んでしまった。

キィは自分の頬をク・ルゥのふくふくほっぺたにくっつけて、冷たい冷たいと騒ぐ。面倒見が良い、仲の良い兄妹のように見えるが、彼とク・ルゥはどういった関係なのだろうとあらためて不思議に思う。

「あ、そう！ みんな当然のように話すからそのままにしてたんだけど、魔法使いも子どもを産めるのね」

メグが言うと、キィは心底呆れたような顔でこちらを見る。

「当たり前だろ？ 身体づくりは人間と変わらないんだから。それとも、魔法使いは木の股から生まれるとでも思っていたのか？」

思ったた。

「もともと魔法使いは人の変種みたいなものなんだ。僕にだって母親はいたさ。親はタダの人間だったからもうずっと前に死んだけどな。反対に魔法使いから普通の人間だって生まれる。現に、カサンドラの娘は能力を持っていなかったらしい」

感心し、聞き入るメグに、キィは眉をひそめる。

「編集って仕事は、知識がなけりゃやっていけないものだと思ってたが、最近は違うのか？ おまえ、そんなんでも仕事やってけるのかよ」

「だって！ 魔法使いなんてレア過ぎて、カサンドラがそうでなければ私はおとぎ話だと思っていたくらいなのよ？ 一生出くわさずに生きる人だっているくらいなんだから！ まあ、会ってみたら……たいしたことないわよね。私たちと変わらない」

最後はいやみたらしく笑って言ってやる。

怒るかと思ったが、彼も不敵な笑いを返しただけだった。

「そうだ。連絡。夕食の席で決まった。明日朝食の後、簡単に葬儀のようなものをやるそうだ」

「わかった」

きっと、泣かずに別れを告げることができる。

「ありがとう」

もう一度感謝の言葉を述べる。

彼は聞こえているのか聞こえていないのか、ク・ルゥを肩に乗せて屋敷へと戻って行った。

## 五章 魔女は歩く

---

日の光がカーテンの間隙から差し込む。窓が西側を向いているので奥まで届くことはないが、それでも気分が良い。太陽の光は、人を元気にさせる。

思い切り伸びをしてベッドから抜け出すと、シャワーを浴びた。普段はこのシャワーの時間も惜しいとぎりぎりまで寝ていることが多い。仕事に追われていないこともあるが、やはり環境の違いだろうと思う。家を出て一人暮らしをして思った。起きたら朝食が準備されていることのすばらしさといったらない。

ドライヤーで髪を乾かし、歯磨きを終える。次は着るものだ。

荷物をひっくり返し、持って来ている服の中でも割と暗めの組み合わせを選ぶ。やっぱり葬儀なのだからそうすべきだろうと、昨日の夜眠り際に考えた。

グレーのシャツに、黒のロングスカート。黒のショートブーツ。シャツに赤いラインが入っているが、カサンドラの色ということで許してもらおうことにした。

鏡の前で最終チェックを行い、最後にカーテンと窓を開け、空気を入れ換える。少し水分を含んだ風が気持ちいい。

時計を見ると八時半。時間だ。

食堂へ入ると、半分くらいがそろっていた。

「ミトラ様、おはようございます」

「おはようございます」

昨日とはまるで違う元気な挨拶に、ヴィクターは眼を細める。

「卵はどうされますか？」

「スクランブルをお願いします」

メグは席に着くとクロワッサンを二つもらった。アプリコットジャムとバターをたっぷりつけて食べる。南瓜のポタージュスープがほんのり甘くて美味しい。そんな彼女を見て、皆が何も言わずに、それでも口元に笑みを浮かべる。

フルーツジュースをお代わりして、ほぼ完食したころには全員がそろっていた。昨日の朝のように、大きな声で談笑することはないが、誰もが穏やかな表情をしていた。

早々に食事を終えたメグは、隣のク・ルウのサポートにつとめる。あれこれと言われるままに取ると、最終的にはメグの倍近い量を食べていた。その分おなかがぽっこり出ている。さすがに後で腹痛にでもなりはしないかと心配になるが、キィは慣れているのかまったく口を出さない。成長期なのだろうが、不安だ。

そうして、全員が食事を終えると、ヴィクターが参りましょうと促した。

アーサーたちも、ドナルドも、メイドたちも。暗めの服を着ていた。めいめいができる精一杯の服装。ク・ルウでさえ黒いドレスを着ている。が、白の魔法使いと呼ばれるキィは、その名に違わずやはり上から下まで徹底した白を着ている。むしろ、昨日と衣装が替わっているかが微妙なくらい同じものに思える。クローゼットを開けたらざらりと同じ服が用意されているのかもしれない。そう思うとおかしくなって、笑いを堪えるのに必死だ。



ぞろぞろと階段を上がる。先頭はいつの間にかヴィクターからドナルドへ替わっていた。一番後ろがキィとク・ルゥで、その前がメグだ。

魔女の部屋の前に着くと、ドナルドがドアを開ける。鍵は閉まっていなかったようだ。順番に中へ入って行く。メグも扉の前に来たところで、ドナルドの大きな声が聞こえた。

「いない！ いないぞ!？」

え？ と固まるメグを押し分け、キィが中へ進む。

入ってすぐの居間には、先に入った男たちが留まっていた。窓際で、レースのカーテンがふわりと揺れる。風がそよぎ、彼のマントの裾が翻る。

奥の寝室へそのままの勢いでアーサーたちより先へ入ると、ク・ルゥもその後ろに続いた。

前のイライザと顔を見合わせる。先ほどまでの雰囲気と一転し、緊張した面持ちだ。

「どこだ！ どこに隠した！」

半狂乱のドナルドの声。

驚きの第一波を越えると、メグも足早に後へ続く。

「まさか」

アーサーが漏らすつぶやき。バートは息を飲み、チャールズは十字を切る。

彼らの隙間から、メグもベッドを見た。

そこに魔女(カサンドラ)の姿はなかった。

「うっそ……」

そうこぼさずにはいられなかった。

何がどうしてこんな事態になったのか？

一番早く動き出したのは、やはり魔法使いだった。

キィはベッドのシーツに手を置く。

「昨日より乱れてるな」

男が四人がかりで彼女をきちんと寝かしつけた。そのとき余計なしわは、イライザがしつこいほど丁寧に伸ばしている。メグもそれを見ていたので覚えている。たしかに、カサンドラが寝ていた形をとっているが、その周りがぐちゃぐちゃと荒れていた。

キィはそのままベッドの下をのぞき込み、クローゼットを開け放つ。

が、カサンドラはいない。

バートが隣の部屋へ行った。だがもともと、大の大人が隠れられるようなところは魔法使いが探したクローゼットくらいしかないのだ。

メグは窓から身を乗り出し外を見る。下には何も無い。魔女の部屋からの窓は、全部中庭に面しているが、真下は厨房と食堂で、ここから落ちたとしたら下の日差し避けに当たる。ベランダはなく、全て窓でしかない。助走を付けて飛んだとしても、落ちるだろう場所には生け垣があり、それらは荒らされていなかった。

「どこに、どこにやったんだ！ カサンドラを返せっ！」

ドナルドがキィへ詰め寄るのを、ヴィクターが慌てて止める。

カサンドラの部屋をあらかた見て回ると、みんな無言で顔を見合わせた。

わけがわからない。なぜ、わざわざ、カサンドラの遺体を隠す必要があるのか？

「いたずらにしても悪質すぎるだろう！」

閉鎖された空間だからこそ、犯人はこの中にいるわけだ。アーサーの怒気を含んだ言葉に、みんな本気で首を振る。

犯人の立場になって考えてみようと思うが、正直まったく意味がわからない。

いつもは冷静なヴィクターもすっかり困り切っている。

誰が犯人とも思えない。

「まさか……、カサンドラは死んでいなかった、とか？」

一番可能性が高い。

だが、そんなメグをみんなが憐れみの目で見ると、キィも同じだ。肩を落として首を振った。

「それはない。間違いなく彼女は死んでいた。脈もとまっていたし、何より昨日言っただろ？ 身体の機能的には人間と変わらないんだ。首の骨が折れて生きてはいられない」

「そっか」

本気で言ったわけじゃないけれど、そうだったらいいなと思った。すぐさま否定されて、残念だ。

「とりあえず、屋敷の中探してみるか」

このままじゃあまりに不可解でだんだん気味悪く思えてくる。

「では手分けしましょう。お客様は、お互いの部屋を見てもらえますか？ 私たちは他の部屋を見て参ります」

「僕も君らについて行く」

魔法使いがク・ルゥを抱き上げサイモンの後を追う。

「ドナルド様は……」

「いやだ。俺はここにいる！ 部屋を見たいなら勝手に見るがいい」

ベッドに跪いたまま、ドナルドは動こうとしない。それでは、とヴィクターはメイドたちを促す。

「じゃあ俺たちも行こう」

アーサーが声を掛け、バートとチャールズ四人でまず二階の部屋へ行く。

「僕の部屋も調べておいてくれ！」

西の塔へ登りかけているキィが、こちらに向かって叫んだ。

「あ、ああ。それじゃあ一番奥の彼らの部屋から見ようか」

二階も一階と同じ作りだった。

ちょうどメグの部屋の真上に当たる魔法使いとク・ルゥの部屋は、作りも広さもそっくり同じだった。人が隠れるところといえば、クローゼットかシャワールームくらいだ。ベッドの下は足が短いタイプなので子どもでも入ることはできない。

メグは少しワクワクしてクローゼットを開ける。

「すごい」

タキシード、燕尾服、フロックコートまである。それら全てが白。靴も他に三足あった。シルクハットも、もう二つ。もちろん真っ白。

「徹底してるなあ。白が好きなのか、意味があるのか」

「ここまでしよう思ってもなかなかできないぞ」

みんな興味津々でのぞき込む。

「彼の服もすごいが、おちびさんのドレスの数も半端じゃないな」

どこの売り場だと突っ込みを入れたくなるように、グラデーションに並べられたドレスが全部で十五着あった。魔法使いと言えども、【禁猟区】ではその力が使えない。つまり、彼がこれを持って来たのだ。北に一時間歩けばと言っていたから、もしかしたら車で迎えにきてもらったのかもしれない。どっちにしろ、ずいぶん頑張っている。確かに、ク・ルウみたいな可愛い女の子がいたら、思う存分着飾らせたいと思うのが人情ってものだ。

そこで、ふと思いつく。まさか、ク・ルウはキィの子どもということはないだろうか？

まさか、と心の中で笑い飛ばす。

でも、と心の中でつぶやく。

昨日彼は言っていた。人間と身体機能は変わらない、と。彼は魔法使いだ。見かけよりずっとずっと年上だ。好きな人の一人や二人、今までに出会っていないとも限らない。それで、キィが、子どもを……。

「どうした？ メグちゃん」

「えっ」

肩を突然叩かれて、びくりと身体を震わせる。

「いや、ニヤニヤしてたと思ったらしかめっ面になるし。なに百面相してるのかなあって」

そんなこと、一一していたのだろう。

このすぐ顔に出る癖はなんとしてでも改善しないと、後々困ることになりそうだ。

「何でもありません。はい」

勝手な妄想で突っ走るのはやめよう。

結局二人の部屋にカサンドラの遺体はない。

「じゃあ次は俺の部屋だ」

アーサーが部屋を出て、すぐ右手のドアを開ける。入ってすぐに、違いに気付く。

「あれ、シャワールームはないんですか？」

「そうだよ。シャワーとトイレは共同で、階段の向こうにいかないとなんだ。まあ、いつものことだし慣れてるから平気だけどね」

バートがそう言いながらクローゼットを開けた。中は几帳面な性格そのままにきれいに整えられている。整えてあるというだけでは正確ではない。すべてがきちろりで、整列していた。ハンガーは均等に位置を保ち、靴も同じ向きで、そろっている。

「やっぱりないか」

「あったらあったで怖い」

探すときにずれたシャツを、元の位置に戻しながらアーサーが言う。

自分に記憶がないのにカサンドラがいたらいたで怖い。

ベッドや他の調度もメグの部屋と変わらない。むしろ、ユニットバスがない分広く感じられた

。

「次はバートだね」

チャールズが言うと、彼は肩をすくめる。

「調べるのはいいが、鞆の中まで漁らないでくれよ？」

「そりゃもちろん。男の鞆を漁って楽しいわけがない」

「カサンドラが入る大きさの鞆なら話は別だ」

アーサーのコメントにみんな笑う。

この作業が無駄であると思っているのだ。

「むしろ、ミトラくんの部屋の隣三つ。あそこは今使っていないだろ？」

「だね。ウッズさんはカサンドラの部屋の方だ」

談話スペースの向かい。吹き抜けの向こう側に一部屋あった。ドナルドはそこに陣取っている  
そう。

「勝手に調べてくれと言ってたが、どうする？」

「ヴィクターたちがやるんじゃないか？ まあ、最後にカサンドラの部屋に戻るだろうし、まだ  
調べてなかったら調べればいい。先に東の棟を終わらせてしまおう」

アーサーがまとめると、バートの部屋をぐるりと見渡す。隠す余地などない。

「と、僕の部屋は一分待ってくれ」

「おやおや、怪しいなあ」

バートがニヤニヤと笑う。

「じゃあ、せめて三十秒。散らかしたまま出て来たから、女性が入るならせめて片付けたい」

早く行けとアーサーが言い、チャールズが入って、すぐまたドアを開けた。

「どうぞ」

メグが入らなければいいのだが、彼らのやりとりへは口を挟む暇がない。

散らかっていると行ってたが、ベッドメイキングも済ませてある。部屋はきれいに片付いている  
ように見えた。三十秒でどれだけ頑張ったのか？ それとも、見てはいけないものがとっち  
らかっていたのだろうか？ 反対に興味深い。もちろんクローゼットにはカサンドラの影も形も  
見られず、ベランダから外を覗いても何もなかった。

「それじゃ降りるか」

ついでに書庫も見て回るが、二日前に入った時のままだった。

「メグちゃんの部屋は別にいいか」

「そうだな」

バートの提案に、アーサーもすぐ同意する。だがそれでは公平さに欠けた。

「片付いてるんで大丈夫ですよ。一応見てください」

部屋に鍵は付いていない。メグの知らない間に担ぎ込まれている可能性はゼロじゃない。調べ

られるならきちんと調べておくべきだ。

「そうかい？　じゃあ」

と、探すも何もでない。当たり前だ。

同じく隣の三部屋も何もでなかった。本当にどこに行ったんだと言いながら、階段のところまで戻ると、ヴィクターたちもやってきた。どうやらあちらも収穫なしだったようだ。

再び魔女の部屋に集合する。

「どうだった！」

顔色が悪いドナルドが、こちらの姿を見つけると噛みつくように聞いてきた。キィが代表して答えると、カサンドラの恋人はまたベッドに顔を埋めた。

「しかし、謎だな。死体を隠してどうするんだ？」

寝室から出て、ふかふかのソファーにどかっと腰を下ろしたアーサーが問う。チャールズは首をひねり、バートは手のひらを天に向ける。彼らもそれぞれソファーに座った。メグは窓の近くで立ったまま、外を見る。中庭の緑が目痛い。

「まったく見当がつかない」

誰か意見は？　という彼らの振りに、メグはハイと手を挙げた。

「例えば、原稿を探しにここに忍び込んだとか？」

それだと犯人が自分を含めて四人に絞られるわけだが、みんな気を悪くした様子はなく、続きを促される。

「それで、えー、ベッドのカサンドラが寝ている下を探そうとして、身体を動かした」

「ミトラくんの考えは面白いけれど、遺体を隠す必要性まで出てくるわけじゃないな」

確かに。考え込むメグに、チャールズが助け船を出す。

「そのとき遺体を破損してしまったとか。その、……腕がもげるとか」

「別に、隠す必要まではなさそうだけどなあ。ヴィクターさんたちはしばらく彼女をそのままにしておくって言ってたし、シルクの掛け布団をしていたから、みんなめくってまでは見ないだろ？　血ももう流れていなかったから、ばれやしない」

そう。アーサーの言う通りだ。顔に損傷を与えてしまったとかならあるのかなと思うが、遺体を隠すことまでするだろうか？

「まさか……」

思わせぶりの台詞を吐いて、黙り込んだバートにみんなの目が集まる。

「いや、事故死じゃなかったのかなと思ってね」

「何を言うんだ。事故死じゃなかったら、殺人だとでも？」

チャールズが眉をひそめる。

「そこでいきなり殺人に行くのは、さすがミステリー出版社らしい」

キィが壁に寄りかかり面白そうに顔をゆがめる。

「だが、彼女の遺体は見かけだけは転落死の様相を示していた。それは君らも確認しただろ？」

ああ、うん、と口々に頷く。正直メグはあまり覚えていなかった。

「だから、それ以上遺体を調べようなんてことは誰も言い出さなかった。こんな風に遺体を隠せ

ば何かあると勘ぐられてしまう」

「死後、時間が経って何か証拠が出て来てしまうとか。ほら、圧迫痕は死後数時間してから表皮に現れるし、毒殺で唇や皮膚に変化が出るのも時間が経ってからのもあるから」

「メグさん、それは無理だ。ほら、彼女の身体は時間が止まっている。つまり、死後数時間後に現れるという諸処の現象は起こらない」

「あ、そっか」

チャールズが言うと、キィはその通りと人差し指を立てる。

「と言うことは、遺体を移動させることはもし殺人だった場合とても不利になるんだ」

移動したことで、死因に不信感を抱かせてしまう。本末転倒なのだ。

そして結局、話が止まってしまう。

カサンドラが生き返り、一人で動いたのでないならば、誰かが彼女を移動した。

その目的が、わからない。

「カサンドラの身体に懸賞金でも掛かっていたとか、見せ物にするつもりとか」

「馬鹿だなバート。彼女の遺体を【禁猟区】から出したら消えてしまうんだぞ？」

「そりゃそうだ」

アーサーの一言で、彼は引き下がる。

じゃあ、【禁猟区】から出さなきゃいいじゃないという言葉も、メグも飲み込む。それではまるで、この屋敷に住む人が犯人のようだから。いつも気遣いを絶やさないヴィクターや、この庭を、屋敷を愛してるサイモン。元気でカサンドラを敬愛していたイライザに、美味しい、心がうきうきするような料理上手のエノーラ。彼らがカサンドラの遺体をどうにかするなんて考えたくない。

いや、違う。

それならこんな風に隠すことなんてなおさら必要ない。キィにヴィクターが言っていた。しばらくはこのままにしておく。メグたちが帰ってからゆっくりどうするか考えればいいのに、騒ぎにってしまったのは結局マイナスになる。

つまり犯人は、昨日の今日で遺体を動かしたかった者。そうせざるを得なかった者。

物理的な理由で絞られるのが、私たち外部から来ている者たち。そうそう長くは留まっていられない。

または、カサンドラの遺体に何かがあるとき。何かはまったく見当がつかないが、それを人目にさらすわけにはいかず、昨日思い切って行動を起こした。

「いつ消えたのかしら？」

メグが誰となく聞くと、バートが仕方ないと立ち上がった。

「後で揉めるのも嫌だし、この際ここではっきりさせよう。まずは――、カサンドラの遺体が消えた時間。みんな一番最後にこの部屋に入ったのは？」

いつの間にか寝室の扉は閉められ、ドナルドも含めて皆が居間へ集まっている。

「ちなみに俺は昼食の後に一回来てる」

「僕も昼食後、一時間くらいしてからかな。そのときアーサーにも会ってる」

「そうだな。入れ違いで、俺がチャールズの後だった」

バートと目が合い、メグは首を振る。みんなでこの部屋を出てから、二度目に訪れたのは今朝あの瞬間だ。

「僕とク・ルゥはこの部屋に立ち入ってはいない」

エノーラとイライザ、サイモンも首を振った。彼らもまた、今朝が二度目の訪問だった。

「俺は……、昨日の夕方。夕食の前に一度来た」

ドナルドが続け、最後にヴィクターが夕食後、窓の戸締まり確認に入っていた。つまり、ヴィクターで最後だ。

「そのとき扉の鍵は？」

「締めておりません。基本的にこの屋敷内で施錠は外に向けてのみです。カサンドラ様のお屋敷で、悪さをするような方はいらっしゃいませんでしたので。昨日西の塔の鍵をしたのは、窓が危ないと思ったので一応」

「そうか。もちろん、そのときカサンドラの遺体はあったんだよね？」

「ええ。ございました」

「朝は来なかった？」

「特に準備する物もございませんし、必要がありませんでしたので」

葬儀といっても、カサンドラの宗派がわからないし———というか、それ以前に宗教的なものを信仰しているとは思えない———、牧師も神父もここにはいない。みんなで祈りを、それぞれに捧げるだけだ。そう、自己満足のために。

「ま、当然か。てことは、彼女の遺体は昨日の———、」

「二十時です」

「うん。二十時以降から、今朝朝食を終え、みんなでここへ来る九時までの間に消えた。朝は人通りが多いからきっともっと早い時間までだろうけど。昨日夜はずっと誰かと一緒にいたってことは、ないよね？ てことは、みんなにアリバイがない」

アリバイ。不在証明。ミステリーにおいて重要な要素の一つだ。

「誰でも遺体を運べるってことだ」

「だが、女性には無理なんじゃないか？」

アーサーが言うと、バートは首を振る。

「甘い甘い。別に一人じゃなくてもいいんだから。まあ、こればかりは追求してもわからないし、もう一つの方もやっておくか」

「もう一つってなんだよ」

チャールズが眉をひそめると、バートは面白そうに笑う。

「カサンドラの死亡時刻限定とそのときのアリバイ」

「おい！」

怒気を孕んだチャールズの声に、バートは不思議そうな顔をした。

「カサンドラの遺体が消えて、謎が噴出している。できる限り事実を明らかにしておくのは悪いことじゃない。そう思わないか？ 魔法使い殿」

我関せずを決め込んでいたキィへ話を振るが、彼はシルクハットの先を少し揺らしただけで、だんまりを続けた。

「犯罪のエキスパートに意見を求めたかったんだが、まあいいじゃないか、もやもやするよりはつきりさせよう。最後に生きているカサンドラを見たのは誰だ？」

あの日は朝食の席でカサンドラに会い、その後屋敷の中を回った。そして、二階でドナルドとカサンドラがキスをしていた。

「私、かな？ ドナルドさんとカサンドラが部屋から出てくるのを見て、彼女はそのまま西の塔に行っていたから」

「ああ、そう言えばそうだね。僕らはその後ずっと一緒に行動してる」

ドナルドも同意する。

「十一時くらいだったと思う。それで、アーサーさんに階段の上で会って、降りたところでチャールズさんたちが。そのあとク・ルウちゃん探しに出た」

そして、カサンドラの遺体を見つけた。

「ふうん。案外ぎりぎりの時間まで彼女の生死が確認されてるのか。そろそろ昼食にと言ってた頃だったな。十一時から、十二時の間、か。その間に、彼女の転落場所に行った者はいないかな？」

誰も反応はない。つまり、ク・ルウが発見するまでの間あの場所は無人だったわけだ。これ以上、死亡推定時刻を狭めることはできない。

「メグちゃんはその後どう行動したの？」

「えっと、まず私の部屋を見て、その後中庭へ行って探したけど、その間お互いに離れたのは五分もなかった。で、西側へぐるっと回って、ク・ルウちゃんのところに」

「てことは、メグちゃんとウッズさん、魔法使い殿に犯行は無理と」

「私たちは厨房で昼食の準備をずっとしておりました」

エノーラが言い、イライザもうんうんと頷く。

「ヴィクターも手伝ってくれていたわ。姿が見えないのは常に五分なかったから、西の塔まで昇って降りてくるのは無理よ」

「残りは俺と、アーサー、チャールズにサイモンさんか。あ、ク・ルウちゃんもかな」

口調が柔らかいので、誰も本気に取れない。だから怒り出す者もいなかった。

「サイモンさんとずっと話し込んでいたけど、メグちゃんに話しかけられた後別れてしまったからな。惜しいね、サイモンさん」

「ですがケンプルさん。我々が共犯であったらそれも無駄です」

「ああ、そうか。これは一本取られたな」

彼が笑い、みんなも釣られて笑った。だが、どこか元気がない。

釈然としない気持ちはさらに強まる。

いくら大きい屋敷だとはいえ、人ひとりを担いで人目に付かずに移動するのはかなり神経を使うだろう。途中見られでもしたら言い訳がきかない。かなりのハイリスクだ。それを押してでも、移動させなければならなかったこととは、いったいどんなことなのだ。



「他に何か昨日の夜とこの部屋が変わってることはないのか？ 物の位置が変わっているとか、なくなっているとか」

バートがヴィクターに話しかける。

ヴィクターは周りを見回し、寝室にもう一度かえり見るが、さあと言うばかりだった。

普段部屋を掃除しているイライザとエノーラも特になくなっている物はないと思うと答えた。

メグも朝の状態を必死で思い出そうとする。

だが、最後の方についてきていたので、部屋へ踏み込んだのは最後だ。叫び声が聞こえて、キィがメグより前に出た。彼が駆けだし、マントが宙に浮く。――いや、マントは彼が走ったからではなく、風が……。

「そうよ、窓が開いていた」

ヴィクターは戸締まりの確認をしにきたのに、鍵をかけ忘れたならともかく、窓が全開になっていて、それに気付かないわけがない。

「そういえば、寝室の窓も開け放たれていたな」

チャールズがそちらの方を見ながら言う。メグは自分のそばの窓から下を覗いた。しかし、さつきと変わらず、何か落ちたような痕跡は見られない。日差しよけは布製だが、人が落下するのに耐えられるようなものだとは思えない。

「つまり、この謎の犯人の行動は、なぜかカサンドラの遺体を運び、なぜか部屋の窓を全開にした」

なぜかなぜかでまったく動機が見えて来ない。

結局また詰まってしまった。

「じゃあ、そろそろいいかな。こうやって角突き合わせていてもカサンドラの遺体が出てくるわけでもないし、彼女の遺体がなけりゃ葬儀もへったくれもないだろ？」

キィは寄りかかっていた壁から身を起こすと、ク・ルゥを抱える。

「僕はこれで失礼する」

彼の言うことは感情が追いつかないだけで至極真っ当だ。

迷わない足取りで部屋を出て行く彼を見送り、みんなもカサンドラの部屋を後にすることにした。ヴィクターたち屋敷の使用人には、やることが色々と溜まっていたし、ドナルドも誰とも口を聞かずに部屋へ引き上げる。

残った三人の編集者と、メグはたらたらと鈍い歩みで談話スペースまでやってきた。

「普通は、隠さないよな。普通は」

メグが自分の部屋に戻るため、階段を下りようとしたところで、思わせぶりの発言をしたのはアーサーだった。

「なんだい？ 名探偵アーサーくんのご登場か？」

茶化すバートに彼は不敵な笑みを浮かべる。

「いいか、普通ならあんなことはしない。どう考えても下策だろう。理由があったとしてもだ。だがな、普通じゃないヤツには普通じゃない理由があるのかもしれないだろ？ 俺たち人間なんかでは思いも寄らない理由がな」

彼が示すのは明らかだ。人間じゃない、魔法使い。

「何を……」

「ほら、さっきも付き合ってたと言わんばかりにさっさと引き上げて、遺体が出て来ないから仕方ないって態度だったじゃないか。なんというか、元々探す気もないというか」

「そんな風には見えなかったわ」

彼は率先して自分の部屋を調べろと言い、ヴィクターたちと西の塔に上がって行った。見つかる気がないのなら、それにも参加しなければいい。

「そりゃある程度気にしている態度は必要だからさ。率先して自分の部屋を調べろと言ったのは、彼の演技だ。ないことを知ってるから、そう言った方が無実に聞こえる」

「むちゃくちゃよ」

何の根拠も見られない。そう、絶対に。

「でも、彼がカサンドラの遺体を隠した犯人なら、いろいろと可能性が出てくるぞ」

すっかりバートとチャールズは彼の話に聞き入っている。メグ一人が不満を表に出していた。

「例えば、【禁猟区】から遺体を持ち出すと、塵となって消えてしまうということ自体が、嘘」

「えっ？」

「でも俺もそれは知ってたぞ？」

バートが突っ込むと、アーサーは甘いなと笑った。嫌な笑い方だ。

「おまえは見たわけじゃない。だろ？」

「そりゃまあ」

この世に魔法使いの死を見られる人間が早々いるとは思えない。と考えると、その場に居合わせた私たちの運の強さを思い知る。

「どうせ魔法使いが死ぬってのは、噂の域を出ないんだろ？ それか、魔法使いたちが故意にそう広まるように仕向けているとか」

「出たよアーサーの陰謀説」

チャールズが困った顔をして笑う。

「魔法使いの遺体は、二十四時間とか、次に朝日を浴びたときとか、何かすごい変化が起こって、それを人間にはさらしたくないから、魔法使いは隠した。何せやつらは秘密主義の変人の集まりで……」

限界だ。

「いい加減にしてください」

生まれてこの方、年上を怒鳴りつけたことなどあっただろうか。

三人はきょとんとしてメグを見る。

「たとえ話だとしても、言っていることと悪いことがあります！ キィさんとク・ルウちゃんはカサンドラが友人だって言っていたじゃないですか！ 友達が死んで悲しくないはずがないでしょう！ それなのに、冷たいだの、嘘をついてるんじゃないかだの。悲しんでるかどうかなんて、本人に聞いてみないとわからないじゃないですか」

言うてから、昨日の自分がまったく同じことをやっていたと思い出す。

なんだかとても悔しくて、ぶんっと音がしそうな勢いで踵を返すと、階段を駆け下りる。そのまま自分の部屋に入ってしまうおうと、右へ曲がったところで、ぶつかった。

こけそうになるのを、相手に抱き留められなんとか体勢を戻す。

「ご、ごめんなさい」

相手の肩に鼻の頭をしたたかぶつけて、鼻血でも出そうな勢いだ。痛い。

「そそっかしい」

目の前にあるのは真っ白な服。

「きゃあっ！」

魔法使いだ。

「叫びたいのはこっちなんだが。鼻に何か仕込んでるのか？ 肩がすごく痛い」

どう考えても肩の方が強いだろうに、君は怪我一つしてない。と、キィがぶつぶつ文句を言う。

「ああ、えっとごめん」

驚きで一瞬消えた痛みが、じんわりともどってきて鼻を押さえる。

叫んだのは、相手がキィだったから。彼が階下すぐのところにいたなら、もしかしたらさっきの会話を聞かれていたかもしれない。アーサーは一応気遣ってあのあたりにしか聞こえない声で話していたが、メグは完全に頭に血が上って大声でわめいた。一番知られたくない相手に、聞かせてしまったかもしれない。

痛みと失態が重なって、涙がこぼれる。

「おい、大丈夫か？ もしかして、鼻、曲がったか？ それ以上酷い顔になったらって痛いつて言ってるだろ！」

みなまで言わず、わざと肩を叩いてやる。

涙はもう引っ込んだ。

足下では、ク・ルゥがメグに抱きついて見上げている。瞳の奥に心配そうな色を見つけた気がする。四日目にしてようやく彼女の言いたいことが何となくわかるような気がしてきた。こちらの勝手な思い込みかもしれないが。

「まあ、ちょうど良かった。さっさとやるぞ」

ぶつくさと文句をたれていた魔法使いが、曲がってしまったシルクハットを被り直して右手を出す。手のひらを上に向けている。

「なに？」

「メモを寄越せ」

「なんの？」

「勘の鈍いやつだな。それじゃあ一生掛かっても詩の解説なんて無理なんじゃないか？」

むかっと口を尖らせようとして……、その詩のメモを求められていることに気付いた。

「どうするの？ 手帳はないわよ。部屋に置いてあるから」

朝食の後、カサンドラの葬儀をするはずだったからメモは必要なかった。

魔法使いはぐるりと方向を変えて、東の棟を進んだ。奥にはメグの部屋がある。勝手に扉を開

けて、鞆を開けようとするので飛びついた。

「ちょっと待って待ってよ。もう！ 女性の鞆を勝手に開けるなんて、失礼極まりないわ！  
ほら。これよ」

手帳を取り出し件のページを開く。

「詩が見たいなら食堂にいけばいいのに」

文句を言うメグを無視して、彼はじっと手の中の詩を見つめていた。

やっと顔を上げたと思ったら、彼の表情はどんよりと曇っている。

「な、何よ……」

「別に」

別にとって顔じゃない。彼もなんだかんだと感情を隠すのが下手な気がする。

これ見よがしに大きなため息までついて、キィはメグに手帳を返した。

と、今度はク・ルゥが手帳を取る。

「ん？ どうしたの。ク・ルゥちゃんも見るの？」

メグの問いに少女はしっかりとうなずき返した。仕方ないので、そのページを開いて彼女の目の前にかざす。

「読めるの？ ちっちゃいのに偉いね」

褒められると、少女は首をすくめて手帳を閉じる。それをメグに返すと、キィの前で両手を広げた。彼は言われるがままに彼女を抱き上げる。

「行くぞ」

窓を開けるとそのまま外へ出る。中庭を真っ直ぐと進む。

「ちょっと、え？ わかったの!？」

追いかけるが、今日の彼はいつもに増して早い。昨日までのパンツスタイルでなく、ロングスカートの裾があっちこっち引っかかりそうで気にしながら歩くのも大変だった。ク・ルゥが彼の肩に乗り、こちらに向かっておいでおいでをしている。

途中、騎士のトピアリーを素通りして北へ行く。

「ねえ！ キィってば。これはいいの？ 騎士はどれになるの？」

彼はメグの呼びかけを完全に無視して進んでいく。

「ちょっと、ちょっと待ってよ！ 魔法使いっ！」

一際大きな声で彼を呼ぶと、ようやく足を止めた。こちらを振り返る。それに合わせてク・ルゥは自分の向きを変える。

四つの瞳がメグをとらえる。

「ちゃんと説明してよ。『昼から夜へ〜』のくだりは？ どこを目指しているの？」

矢継ぎ早に質問を並べると、彼はまた大きくため息をついた。でもさっきとは違う。わざとだ。

「黙ってついてくることもできないのか？」

「できてたら呼び止めないわよ」

強気に出れば、魔法使いは折れる。なんだかク・ルゥを見ていてそう思った。これも昨日の夜

。寝る前のこと。

案の定キィはイライラと足を踏みしめながら説明を始める。目論見が当たって内心ほくそ笑んだ。

「今から行くのは獅子のトピアリーがあるところだ。ほら、すでに見えてる。そこだ」

「えっ！ だってあれ詩の後半じゃない。前半すつとばすの？ 昼と夜はたぶん屋敷の中のやつだと思うんだけど」

一昨日ドナルドと一緒に見た二階の階段付近だ。

「詩の前半はカサンドラの感傷に過ぎない。重要なのは羽の生えた獅子のくだりから」

「そんなあ」

どこにそう決めつけられる根拠があるというのだ。

彼は再び歩き出し、メグもまたまた後を追う。

そして、羽の生えた獅子の前にやってきた。

「カサンドラは予知で未来の一部を知ることができる。だからこの詩が書かれたときに、このトピアリーがなくても問題ないってことよね？」

「その通り」

それはよかった。最初から最後まで当てが外れ続けでは自分が救われない。

「『羽のある獅子が背に』か」

つぶやいて東の方を指さす。

「山査子が生えているのはあっちだったな」

「そうだけど、でも先に薔薇でしょう？」

「薔薇？」

そうよ、とメグはメモを繰る。

「『山査子～』よりも、『冬の茨が～』が先に出てくるわ。冬の茨って言うのは、西に四季咲きの薔薇があって……」

魔法使いの人差し指がメグの唇の前に突き出される。

「この詩は間違いなく、カサンドラが書いたものだ。魔法使いが書いたんだ」

「それはわかってるわよ」

いまさら何を言うのだ。それが大前提で彼女は詩の謎を解けとゲームを持ちかけたのに。

「カサンドラが常に興味を持っていたものは何だ？」

「え？」

「人間世界に身を置き、彼女が一生を使って追いかけていたものは、なんだ？ この二日間で君はすでに学んでいるはずだ」

「……生と死？」

ビンゴ、とキィはつぶやく。

「この、『昼から夜へ堕ちゆくを 誰もが一度は望み給う』を、カサンドラの立場に立って、考えてみる。誰もが、は誰だ？」

カサンドラが言う。『誰もが』と。

カサンドラは魔法使い。

「魔法使いたちが、一度は望むの？」

「そうだ。やればできるじゃないか。魔法使いたちが、誰もが、一度は望む物。昼と夜という真逆のもので、明るく活動的な昼、暗い穏やかな夜、太陽と、月。もうわかるだろ？ 魔法使いたちが一度は望む。生から死へ堕ちゆくを。落ちるでなく、堕ちるなのは、少し後ろめたさを持っている現れ。安易な死へ。昼から夜は死ぬことだよ」

――羨む者は多かるう

「この新たな女王ってのがいまいちピンと来ないが、闇や、冬も死を表す。春は生だ。何となくわかるだろ？ 『雲雀の唄う春の野』は、この館じゃないか？ 生にあふれている、生きている人間がいっぱい喋っている館。その館に行く道筋がこの五行だ」

――羽のある獅子が背に

――目覚めた氷は歩み出す

――雲雀の唄う春の野へは

――冬の茨が多かるう

――山査子の棘がはばかるう

「私たちが探している場所からこの館を見ているってことは、逆にたどるってこと？」

「そうそう。いい調子だ」

魔法使いが笑う。

「前半二つは、こっちから見てだろうから。羽のある獅子を背にして山査子を探す」

「乗るんじゃないの？」

「乗ったら逆方向だろ。この屋敷に山査子は東にある。獅子は西を向いている。『獅子の背に』は『獅子を背中にして』と意味は取れない」

「そうだけど」

まあ、彼の言う通り動いてみる。

三人で獅子の後ろに立つ。

「前半にずっと囚われていたあんたにしてみたら、拍子抜けなんだろうが、カサンドラは言うほどこれに謎を付けてはない。普通にたどればいいんだ」

その普通がわからなくて散々悩んでいたのだ。

「さっき薔薇がどうのと言ってたし、一応余計な人間が来ないようにとは考えていたのかな。逆にたどる発想が出て来なければ、獅子の背に乗って、薔薇の方向を向いてしまうだろうから」

「私はまんまとカサンドラの計略にはまっていたってことね」

「その通り。さっきから鋭いな」

全然嬉しくない。

だから先に行く。

後ろから魔法使いが笑いながら付いてきた。途中でべちんと派手な音がして黙ったから、クルゥに鼻っ面を叩かれたのだろう。いい気味だ。

――遠くに見ゆるはふぞろいのこびとの群れ

――祝宴の声を背に吹きすさぶ赤の丘へ

「こびとの群れって？」

この流れでは完全に『ヴァルヴァナス・サーガ』は関係ない。つまり、こびとも、赤い丘もメグが見当をつけていたものではない。

「あんたらのことじゃないか？」

「.....私たちがこびとなの？」

「長生きする魔法使いから見れば、短い命を精一杯生きているこびとたち。『遠くに見ゆる』とあるし、やっぱり目的地は少し離れた場所にあるんだな」

山査子を越えて、東の橋、エウロスを渡る。そのとき、昨日ここを渡るカサンドラを思い出した。

「そう言えば、彼女こっちにお気に入りの場所があるって、サイモンさんが言ってた」

「当たりだな。なんだ、君は最初から答えを知ってたんじゃないか」

「だって.....」

屋敷を出てしまうとは思ってもよらなかったから。

確かに、カサンドラは屋敷の中とか、敷地内という言い方はしていない。詩が示す場所を探せと、メグたちをけしかけた。

橋の向こうは一本道だ。辛うじて踏みしめられた、気を抜けば見失いそうな道に行く。

「赤い丘ってなんだろうね」

「さあ。行ってみればわかるだろう。『吹きすさぶ赤の丘』か。風でも吹いてるかな」

風と言えば夜の息とあった。先ほどキィから言われたことを照らし合わせれば、死の息となる。

――冬の大地へ額づく女王

――望み手に入れたその闇を

――羨む者は多かるう

――悲しまぬ者は少なかるう

――夜の息は風伝い

――凍れる騎士をいざなわむ

「ねえ、魔法使いは死を望むの？」

少し後ろを向いて、彼に届く大きさと話しかける。間違いなく聞こえているだろうに、彼は答えない。

「魔法使いたちが一度は望む死。なぜ？ やっぱり、長い生は苦痛？」

人からすれば羨ましいことも、魔法使いからすればそうでない。カサンドラは人間の一瞬ではじけ散るような生に憧れを抱いた。常に暗い影がそばにあるそれは、どんな光より明るく映った。

「……魔法使いはなんでもできる。そんな魔法使いが体験できないこと。それが死」

カサンドラが手に入れたような、突然の死に、魔法使いたちは憧れる。

望みを手に入れたその闇——死を、羨む者は多かろう。

「あなたも羨ましいの？」

彼もまた他の魔法使いたちと同じように、死に憧れを抱くのだろうか？

しばらく返事はなかった。

聞いてはいけないことだったかと思い始めていたところに、彼が聞こえるか聞こえないかぎりぎりの声でつぶやく。

「僕は魔法使いの中でもまだまだ若い方だ。まだやりたいことがあるし、それを終えるまで死ぬ気なんてないよ」

キィの答えに、ホッとする。

なぜだかわからないが、彼に死を望んでは欲しくなかった。

死を求めて生きている。そんな風に思いたくなかった。

「やりたいことって何？」

わざと明るく聞くと、彼はノーコメントと答える。口を滑らせてはくれないようだ。

ちえっ、と舌打ちをしながら、彼の方を向く。そのまま後ろ向きに歩いた。この歩き方は少し技術がある。だが、慣れると案外早く進める。小さな頃、みんな一度はやったことがある、後ろ歩き。

「やりたいことって、達成できそう？ 魔法使いがやりたくて努力してることなんて、よっぽどすごいことよね。人間なんかじゃ絶対に到達できないようなすごいこと」

彼は優しく笑った。

「案外、僕ら魔法使いの錆付いた頭よりも、あんたたち人間の方がぽろっと答えを見つけてきたりするものさ」

「じゃあ教えてよ。私が知恵を貸すのに」

「百年早い」

ちえっ、とまた舌を打つ。

でも、その百年早いがつぼに入る。人間には一昨日来やがれの的な突っぱねる台詞なのに、魔法使い同士なら普通に明日来てねということになるのだろうか。彼はどんな意味で使っているのだろうか？

「何ニヤニヤしてるんだ」

「もともとこーゆう顔なのよ」

ふふふ、と笑う。

「おい、止まれ！」



突然キィが厳しい声でメグを呼び止める。

後ろ向きに歩くというのは、スピードが出ると止まるのが少し難しい。メグも慌てて踏みとどまろうとするが、身体のバランスを崩して後ろに倒れそうになる。

「メグ！」

魔法使いの手が真っ直ぐ伸びてきて、彼女の肩を引き寄せた。そのまま今度は前へ倒れ込む。キィに抱かれていたク・ルゥは、絶妙なタイミングで彼から飛び降り、転がった二人の横へ立っていた。

「重い。早くどいてくれ」

「ご、ごめん」

絡まるようにこけたので、離れるのに難儀する。

立ち上がって、後ろを見ると棘だらけの茂みがあった。

「確か棘に毒がある。毒性は強くないが、赤く腫れて酷い目に遭うぞ」

サイモンが同じようなことを言っていたのを思い出してぞっとする。

「ありがとう」

感謝の気持ちは素直に表せ。祖父が散々言っていた。

「そう思うならもう少し痩せたらどうだ」

「なんですって!? 私太ってるなんて言われたこと一度もないわよ！」

標準体重より下回っているのに。普段から良く動くせいもあって、美容体重とは言わないが、きちんと健康的な体型を保っているつもりだ。小さいとか、色気がないとは常々言われ続けているが。

「そりゃ、周りが気遣ってるんだ……て、なんだよク・ルゥ！」

まだ尻餅をついたままだったキィの耳を、ク・ルゥが力一杯引っ張っていた。

「君のことは言っていないだろ。最近ちょっと重くなったけどって、おい、やめてくれよ」

今度は両耳だ。

なんだよもう、とぶちぶち言って、彼は立ち上がる。

なぜこの魔法使いは一言余計なのだろう。わざと怒られるために言っているような気がする。

「とにかく、これで冬の茨があったな」

「冬は、死、ね」

「そう。毒の茨」

悔しいことに、彼の言う通りやってきて、一つ一つが符合していく。

「カサンドラもここを大きく回って向こう側に行っていたみたいだな」

先ほどまで通ってきた頼りない道が、右へ伸びていた。道は常に人が歩いていないと、森に飲み込まれる。道は人が歩くことによってできた。こちらにはカサンドラしか来ないのだから、ここはカサンドラが作った道だ。

あとは道を見失うことなく進んで行くだけだ。

頼りなく細い道ではあるが、確実にそこにある。カサンドラが示した道標が、メグの元へ届く

「二人の女王ってなんだろう。『冬の大地へ額づく女王』は、亡くなったカサンドラのことだと思っただけだ」

「俺もそこがよくわからん」

今までのキィに教えられた解釈でいくと、古き女王は亡くなったカサンドラのことだと思われる。冬や闇の冠といった、死を表すキーワードとともに表されているからだ。そして、対になる新たな女王。これがわからない。そんな人物がいたろうか？ 生に輝く新たな女王はいったい何を示すのか。

女王と言うからには女性なのだろう。今、屋敷にいる女性は、メグとイライザ、エノーラ、そしてク・ルゥだけだ。彼女たちには悪いが、自分はもちろん、他のメンツも女王と言われてピンと来ない。

「凍れる騎士とか氷とかも死を表すのかしら」

少し、違う印象を受ける。

凍れる騎士は、夜の息に誘われる。夜の息は死の息だ。つまり、カサンドラの息か？ カサンドラの吐息によって誘われる凍れる騎士。

「……凍れる騎士って、あなたのことだったりしてね、キィ」

氷の裳裾をなびかせる。彼の白いマントはひらひらと風に舞うのだ。

そうすると、カサンドラの死の吐息が、キィを動かし、彼を詩の指し示す地へと誘う。詩の意味が通る。

だが、隣を歩く魔法使いは首を振った。

「凍れる騎士は俺じゃない」

断定的な言葉に、首を傾げる。

「言い切れるの？」

「ああ」

ここまでの流れなら、教えようと思うことは言ってくれているだろう。なぜと聞いてもまたはぐらかされる。そう思って、聞くのをやめた。

それに、もう一度彼と言葉を交わす暇はなかった。

前方に見えた景色に、口をぽかんと開け広げ、メグは言葉を失った。

道は冬の茨を迂回し、そして元の、屋敷から見て東へと戻り続いていた。

その先へ先へと進んで、見つかったのが――赤い丘。

見渡す限り、一面に咲く赤い花畑だ。花の匂いがむっと押し寄せてきた。

「これが、赤の丘」

「のようだな」

さすがの魔法使いもそうとしか答えられなかった。木々が濃く生い茂る森の中に、ぽっかりと開いた土地が現れる。空から太陽の光が注ぎ込み、何も遮ることのないこの場所が、メグたちが追い求めていた、カサンドラが出した問いの答えだ。

「なんの花かしら？」

とてもきれいな百合の花だが、その種類まではわからない。百合のイメージは高貴な白といっ

たものだが、これは赤く、花びらの中央に黄色い筋が入っている。

「カサンドラ」

「え？」

「カサンドラだろ、この百合」

「違うわよ。カサンドラは白のみよ。白くって、中央に黄色の筋が……」

あらためてよく見る。

確かに、花びらが白ければ、カサンドラによく似ていた。花の大きさといい、形といい、そっくりだ。カサンドラという品種があると聞いて、百合の展覧会へわざわざ出向き、見て来たのでよく覚えていた。赤ければあのカサンドラの百合だわと思い、赤いのはないのかと聞いて苦笑されたのだ。

「カサンドラは、白のみって言われたのに」

ここにあるのは赤いカサンドラ。メグが追い求めた色。まるで彼女のために咲いているかのような、鮮烈な赤。

そのとき、風が吹いた。突風と言ってもいいほどのもので、花びらはもちろん、木々からこぼれた葉が舞い散る。

魔法使いのマントがメグの視界を遮る。彼も己のトレードマークであるシルクハットが飛ばされないよう必死だった。ク・ルゥはそんな魔法使いの首にしっかりと抱きついている。

風が弱まり、マントが落ちる。

そのとき、目の端に何かが見えた。

花びらの赤と、茎の部分の緑。それ以外は何もないこの赤の丘に、異質な物を見た。

嫌な予感がした。

二日前、あの屋敷の西側で遭ったような、嫌な気持ち。

背中に汗が噴き出す。

「キィ……」

「ん？ どうした」

彼は気付いていない。

メグの視線の先を、目を細めて見やる。風の余韻でゆらゆらと花の先っぽが揺れる。その間に、違う色が見える。

胸の前で握りしめた手の内側が、じっとりと汗で濡れる。

嫌だ。それは、見たくない。

二日前よりももっと、もっと、メグは思った。

そちらには行きたくない。

だが、赤い花畑の中に行く白い背中に、メグもよろよろと足を踏み出す。

行きたくない。でも行かなければならない。

相反する複雑な気持ちに泣きたくなる。

心は拒否するのに、身体は前へ前へと魔法使いの後ろを進む。

そこへ真っ直ぐ道が延びていることに気付いた。

あの冬の茨の道からずっと、そこへ通じているのだ。

ゴールは赤い丘ではない。

キィが、メグが向かっているその先にある。

赤いカサンドラの中心。

そこに――カサンドラは静かに眠っていた。

胸の前で腕を組み、花畑の棺に埋もれるように横たわっていた。

「キィ……」

彼の背中に掴まる。ク・ルゥも抱きかかえられたまま、首へしがみついている。なぜこんなところに？ という疑問。そして、あまりに似つかわしい魔女の姿に、頭が混乱してしまう。

「おい、違わないか？」

「何がよ、カサンドラに間違いないわよ」

もう見たくない。彼が少しとはいえメグより背が高くて助かった。シルクハットも前方の景色を隠すのに一役買っている。

「よく見ろ、服が昨日と違う」

「え？」

慌てて、顔を出す。

生きているときと変わらないカサンドラの顔。むしろ昨日より血色が良く見えるくらいだ。そんな彼女が着ているのは、確かに違う。昨日、彼女が亡くなったとき着ていたドレスと今のドレスが違っていた。

確かあのときは、緑色のドレス。今は、シンプルな物には変わらないが対照的なカサンドラの髪の色と同じ赤いドレス。咲き乱れるカサンドラの中に埋もれるカサンドラ。

それだけではない。服は薄汚れ、鼻の頭や組んだ手の指も、汚れていた。

誰かがここへ彼女を連れてくるときに汚したとかではなく、風雨にさらされて汚れていく、放置された物のように彼女も全体的に汚れているのだ。

「なんでだろう」

「僕にもわからない」

「お屋敷の人たち、もしかしたら彼らが何か目的があってこうしたとか？」

「目的って？」

そんなの、わからない。

「カサンドラの大切な場所だったのだから、そこへ遺体を運んで吊ってあげようとしたとか」

「それならそう言うだろう。あんな大騒ぎにする必要はない。みんなに提案すれば、誰も反対する者はない。『カサンドラ気に入りの場所に、花に囲まれてそっとしておいてあげよう』と言えばいい。見つかるリスクを冒してカサンドラを移動する方が不自然だ」

メグもそう思う。それくらい少し考えればわかる。

「カサンドラのためと屋敷の人たちが考えたことを、詩を使って見つけてもらうとか、わけわからないものね」

詩で場所を示し、みんなにここに埋めてくれというのならまだ筋が通る。だが、屋敷の人たち

がそれに気づき、メグたちに何も言わずにやるのは無理がある。

遺体は重い。一人では絶対にできない。屋敷からちょっとの距離なら一人でもなんとかなるだろうが、結局メグたちは中庭を通り、橋を渡って三十分以上歩いている。これは一人ではきつい。

「までよ……」

キィが一步前を出て、彼女の首に手を当てる。身体をあちこち触る。

白い手袋に汚れが付くのも気にせず、彼は何度もそうやった。首へ手をやるときは、まるで絞めているようで、メグは目をそらす。

「おかしい」

「何が？」

全部が。心の中で、自分で答えてみる。

「カサンドラの死因は？」

「あなたが言ったでしょう？ なんだっけケイツイ？ とにかく首の骨が折れたって」

それによる呼吸機能障害で、窒息死だと。

「だよな。僕もあの見立てに今も自信がある。だが、これは違う」

え？ とメグは眉をひそめる。

キィはカサンドラの手をそっと上へ持ち上げる。

「うそっ！」

その下には、柄が見えていた。

ペーパーナイフのような、小さな刃物の柄が、彼女の胸に深々と突き刺さっている。

「首が折れていない。身体他の部分にあった骨折もまったくみられない」

そして胸には今まで見られなかったナイフの柄。

「死因がまったく違う。骨折した上でならまだわかるが、骨折痕がない」

それに、これでは事故死ではない。

「死んだはずのカサンドラが、夜中に屋敷を抜け出してこのお気に入りの花畑で自殺したの？」

ゆっくりと、スローモーションのように後ろへ倒れ込む彼女の姿が、脳内で再生される。

アーサーの、魔法使いは魔法使いの死を隠すという、あの陰謀説が思い起こされた。

「いや、それはない。絶対にない」

何が？ と聞くのが怖かった。

一つ否定されれば、また疑問が山積みになる。疑問の上に疑問が積み重なるのだ。

しかし、魔法使いはそんなメグの気持ちを知ることなく、容赦なしに進めて行く。

「このナイフのツカの部分。上側が彼女の身体に当たってつかかっている。下側はほら、まだナイフの部分が身体の奥まで入りきっていない。だからこう、上から振り下ろされたというのがわかるだろう」

もし自分で胸を突き刺すなら、それはとても不自然だ。真っ直ぐか、少しだけ上から、少しだけ下からならわかるが、身体に突き刺さっていないナイフの刃の部分がしっかり見えるほどにはならない。

それに、自殺でここまで深々と突き刺させるのも不思議だ。自分の体重を利用してとなれば、仰向けではなく、うつぶせに遺体が倒れているのが自然だった。

つまり、カサンドラは二度死んだ。

二度目は間違いなく、誰かに殺された。

「他殺だ」

また風が吹いた。強い強い風。カサンドラの吐息。

こんな強い風の中でも、魔女カサンドラは赤い花に守られ微動だにすることはなかった。

## 第六章 魔女は二度死ぬ

---

カサンドラの遺体を、二人で運ぶのは無理だろうということになった。キィはク・ルゥを抱いているし、メグ一人で自分より身長のある死体を動かすのは不可能だ。屋敷に戻り、人を呼ぶことにする。

道中お互い無言で、なぜカサンドラの遺体がそうってしまったか頭をひねる。

ひねりすぎて首が回りそうになるぐらい混乱して……、悩んだ。

帰りはわかっている道筋だ。行きより早く着いた気がする。橋を渡り、中庭の中心に行くことなく、東から庭の外を回った。そして、ガラスのドアの向こう、ちょうど玄関ホールの辺りにみんなが集まっているのが見えた。微かに彼らの声が漏れている。何か大きな声で叫んでいるようだ。

また、嫌なことが起きたのかと不安になり、早歩きになると、アーサーがメグたちを見つけ扉の向こうから手を振った。少しだけ開かれた扉から彼の声が聞こえる。

「やられたよ！ ミトラくん！」

彼は口を曲げて、心底悔しがっているように見えた。

「何があったんですか!？」

これ以上どんなおかしいことが待ち構えているというのか。

最後の距離を走って縮めると、メグは玄関ホールへ駆け込んだ。

「ああ、メグちゃん！ チャールズに持って行かれたよ！」

バートがオーバーな仕草で天を仰ぐ。屋敷の人々はにこにここと、そんな彼らを見ている。

何が起きているのかわからず、最後に件のチャールズを見ると、彼は得意そうに手に持っていたものを見せる。

——カサンドラ最後の原稿だった。

「やっと詩が解けたんだ。そうしたら、予想通りこの原稿が——」

「違うわ！」

彼の言葉にメグの絶叫が重なる。

みんながぎょとんと彼女を見た。

そこへ、後から歩いてきていたキィとク・ルゥが入ってくる。メグの叫びが聞こえたのだろう、どうしたと、隣に立つ。

「違うわ。違うの。詩は、原稿を示してたんじゃないわ。詩は……、カサンドラの遺体の場所を教えてくれたのよ」

みんなの顔色が変わる。

特にチャールズは顔を赤らめて怒っているようにも見えた。

「ミトラ様、それはどういったことでしょう」

ヴィクターが不審をありありと表にし、尋ねる。

「カサンドラの遺体があったと!？」

ドナルドが真っ青な顔色で、頬を引きつらせて言う。今にも食いかかってきそうな勢いで、メ

グは後ろへ後ずさる。肩がキィに当たり、彼はメグの背中に手を当てた。

「大丈夫だ」

メグにしか聞こえないほどの小さな声で、そう言った。

大丈夫。そう。遺体があったのは事実。詩は、カサンドラを示していた。間違っていない。

「今、見つけてきた。彼と、詩を解いてカサンドラの遺体を発見したわ」

「見つかるはずがない！」

ドナルドが嘔みつく。

「いいえ。あったわ。間違いなくカサンドラよ。ただ、ちょっと様子が変わってて……」

口ごもる。なぜあんな風になったのかまだわからない。

「様子が？ 何があったんですか？」

イライザも不安な表情でメグに問う。どう説明すれば的確に伝えることができるか。悩んだあげく、結局そのまま言うしかない結論を出す。メグにも何がどうなったかわかっていないのだから。

「カサンドラの遺体があったの。ただ、着ている洋服が違ってた。昨日、ベッドに横たわっていたときは緑のドレスを着ていたでしょ？」

誰もが頷く。赤と緑の対になる色合いは、忘れようにも忘れられない。

「あれが赤いドレスになってたの」

「色が変わっていたとかではなく？」

「うん。デザインも違っていたから」

みんなが怪訝な顔をする。だがこれは序の口だ。

「それで、胸にはナイフが」

「ナイフ!？」

異口同音に声が上がる。そりゃびっくりするだろう。メグだって未だに混乱している。チャールズが原稿を握りしめたまま顔をしかめて言う。

「なぜだ？ カサンドラは落ちて死んだんだろ？ なぜナイフが刺さってるんだ」

「私に聞かれてもわからない。ナイフが刺さってるどころか、折れていた首の骨も、肩も肋骨も、彼女の身体に骨折してる場所はなかったのよ」

散々悩んだが、あの後メグも自分で確かめてみた。そうでもしないとそれが現実だったか、後で迷ってしまいそうだと思った。

「骨が折れてない!? ミトラくん。大丈夫か？ 夢を見るには早すぎる時間だぞ」

茶化して言うてはいるが、顔は不自然にこわばっていた。メグの態度が、妄想を垂れ流しているようにはまるで見えないからだ。

顔を見合わせ、この事態をなんとか戸惑っている。

折れた骨が死後くっつくはずなどない。死んだとき着ていたのとは違うドレス。しかも、風雨にさらされ続けたようにすっかりくたって薄汚れている。そして、胸に刺さったナイフ。

カサンドラは二度死んだ。

いや……違う。



花畑にいたのは確かにカサンドラだ。衣服や肌の汚れを見ても、しばらくの間ああして横たわっていたのがわかった。それは一日二日といった短い期間ではない。けれどまったく身体は腐り始めていなかった。死んだ時のままだ。魔法使いでないと、成立しない現象だ。

ならば、あの転落したと思われるカサンドラが一、別人。

「二人いたら……」

「何？」

つぶやくメグにキィが反応する。

「もしも、昨日死んだのと私たちが見つけたカサンドラは別人だとしたら？」

別人だとしたら、誰だ。

カサンドラにそっくり。整形でもしたのか？ いや、違う。そうじゃない。

「昨日死んだのがカサンドラじゃないとしたら？」

メグの頭の中からこぼれた言葉に、 دونالدが過剰反応を示す。

「何を言っているんだ！ みんなだって見ただろう！ あれは彼女だ。魔法使いの、カサンドラじゃなければ誰だって言うんだ」

「カサンドラの孫、ジラ」

真っ直ぐ、メグの瞳が Donald をとらえる。

整った彼の顔が、醜く歪む。

まさかと、息を飲む屋敷住人に、アーサーたちは首を傾げた。彼らは知らないのだ。

「カサンドラのお孫さんが、半年前までお屋敷にいたの。それが、突然喧嘩をして出ていったんですって」

簡単に説明する。そして気付く。ああ、カサンドラは半年前からあそこにいたんだ、と。

「それでわかった」

ざわついていた空気が、魔法使いの言葉ですっと静まる。

「あの遺体がカサンドラのものでないのなら、腐る。腐れば、魔法使いでないのがばれる」

あっ、とメグも声を上げる。

「だから窓が開けてあったのね！」

真夏ではないが、十二時間も経てば次第に匂いが出てくる。人の身体は、生命維持機能が壊れた瞬間、あっという間に崩れ出す。

「髪なんて、かつらでも染めてでもどうにでもなるわ。目と、あとは態度。物腰」

それを一年の間で習得したのだ。

下を向き陰気な様子 of ジラ。まともに顔を見ることなんてなかったはず。

もしも、血縁がゆえ彼女にカサンドラの色が濃く現れていたら？

みんなの視線が次第に、メグやキィから一人の人物に集まる。

カサンドラが、カサンドラでないと一番知っていたであろう人物。そういえば、時折おかしな態度を見せていた。魔法使いの身体は変化しないと聞いたとき、まるで怯えたような表情を見せた Donald。彼女の身体を憑依させまいとしたり、今思えば彼の行動は一つの終着点を見る。

すなわち、あれはカサンドラでないと知っていた。

バートがドナルドの胸ぐらを掴む。

「おまえが遺体を隠したのかっ！ あれがカサンドラの遺体じゃないと知ってたな」

「俺じゃない！ 俺は知らない！」

否定すれば否定するほど、彼に対する疑惑の思いが増えて行く。

「あの場で僕の憑依の能力を知らなかったのは、あんたどこいつだ」

魔法使いは顎でドナルドと、メグを指す。こいつと呼ばれたことに不満を述べる場合ではないとわかっているが、顔に出そうになり自制した。

「遺体は小娘が一人で担いでいけるようなものじゃない」

小娘にも反応しそうになる。だが、考えてみれば魔法使いからみたメグなんて、小娘以外の何ものでもないのだろう。そう思って、耐える。

「なぜ俺なんだ！ 別にこいつらだって彼女がカサンドラでないと知っていたかもしれないだろ？ 結局あんたの能力は【禁猟区】から出なければ使えない。だからあの場でやってみようとなることはなかった！」

それはそうだが、何かひっかかる。

「もしも、もしもよ？ 私が以前から昨日死んだ彼女がカサンドラでないと知っていたなら、こんな風に魔女の宴として人を呼ぶことを薦めたりはしない。だって、それだけばれる可能性が増えるもの。あんな風になりすましていたってことは、彼女はカサンドラを装いたかった。一年ほどの間で、彼女の癖や、屋敷の人たちに対する態度はわかったかもしれないけど、編集者の私たちに対する態度って、知らなかったでしょ？ そんな危険を冒す意味がないように思えるの」

それに、編集者であるメグたちを呼んだ目的はただ一つ。

「誰が犯人だったとしても、今回ジラが……もう、ジラと呼ぶね。彼女がしたかったことは、私たちにあの詩を解かせること。カサンドラ最後の作品をダシにしてね」

それは誰の目にも明らかだった。

原稿を高々と掲げたあの姿をメグは一生忘れない。

「もし、編集の誰かがカサンドラでなくジラだと知っていたとしたら？ 彼女とグルだった場合、最後の作品を使うこと許すはずがない。だって誰もが自分の会社から出したいもの。グルでなかった場合、それこそ、その秘密を盾に最後の作品を手に入れる。あんな風に彼女の最後の作品を餌になんてできない」

「や、屋敷の誰かかもしれないじゃないか！」

「そうなると、今度はあなたがカサンドラの恋人としてこの屋敷にはいないと思う。でしょう？」

親しくなればなるほど、魔女でないことがばれる可能性が高くなる。

「ねえ、何を探していたの？ この半年間、あなたたちは何を求めていたの？」

メグに詰め寄られ、ドナルドは言葉にならない声を漏らし、やがて崩れるように膝を折った。

ジラ、ジラと、死んだ女の名前を呼び続ける。

その様子をみんなは黙って見守り続けた。

やがて、彼が落ち着いたところで、キィが尋ねる。

「カサンドラを殺したのは誰だ？」

「……ジラさ。最初は、あのカサンドラの孫なんだから、遺産を受け取って一生を遊んで暮らしてやると言ってたんだ。だけど、あれは嘘だった。今考えれば、彼女は最初からこうするつもりだったんだ」

「こうするってのは、入れ替わるってことだな？」

バートが口を挟むとドナルドは項垂れたまま、そうだとした。

「ジラはもともとすごくカサンドラに似ていた。俺も実物を見たわけじゃなかったが、写真でならうり二つだよ。母親にはそれでよくいじめられたそうだ」

「いじめられた？」

メグの驚きの声に、彼は暗い笑みを浮かべ真っ直ぐ見てくる。

「そうだよ。ジラの母親、カサンドラの娘は、カサンドラを死ぬほど憎んでいたらしい。よくもまともに産んでくれなかったと。魔女は、娘をずっと産み落とさずに五十年以上経ってからようやく産んだらしいじゃないか。そのおかげで会えるはずの人に会えなくなったとか、そんなことを言っていた。ジラは幼い頃からずっと、怨嗟の言葉を聞き続けて生きてきた。俺が聞いたところじゃ、なんでもカサンドラのせいにして現実を見ようとしないうジラの母親の方がどうかと思うがね」

悪いことが起きると、産む時期をずらしたカサンドラ。だがそれはさらに悪いことを引き起こす。

「ジラは、普通に会おうとはせず、自分の髪を染め、背中を丸め、わざと本来の自分とかけ離れた風体をとった。屋敷の人間にカサンドラとはまったくの別人だと印象づけるために」

そして、すり替わっても気付かれないために。

「びっくりしたよ。呼ばれて来てみたら、ジラがカサンドラになっていた」

屋敷の人間たちは、一様に青い顔をしている。ヴィクターは青を通り越して白くなっていて、何かを堪えるように拳を握りしめていた。

「お金が目当てだったのよね？ なぜあんなことをしたの？ 私たちに詩を解かせて、何をしたかったの？」

「何がって、決まってるだろ？ 金が欲しかったんだ。二人で遊んで暮らせる金が。だが、あれだけベストセラーを出しているくせに、彼女は金を持っていなかった。ジラは直接問い詰めたそうだ。すると、使用人たちへの給料と館の維持費以外は全部適当に寄付しているとぬかした。まったく金を持っていないとね。――そんなのが信じられるわけがない」

「いや、本当だよ。カサンドラは金に興味はなかった。下手に持っていて困ると、印税のほとんどを寄付してた。原稿料だけでやっていける。金は人間の持ち物だってね」

アーサーが静かに言うと、ドナルドはまた暗く笑った。

「それを早く聞いていればな。こんなことにはならなかったかもしれない」

そうだろうか。そんな簡単なことではないと思う。

「ジラはこれ以上カサンドラと話をしても、意味がないと決断した。そして、殺し、入れ替わり、今度は自由に魔女の持ち物を調べだしたんだ。確かに金はなかった。現金はな。で、生前の彼

女が食堂の詩をやたらと気にしていたと、ジラは思い出したんだ」

自分たちで散々その詩を解こうと奔走した。当てはまりそうなものは山ほどある。だが、どれも正解ではなかった。

「自分たちじゃ見つけられないから、それならば他の人間に解かせようということになった。屋敷の人間ではだめだ。何か感づかれてしまうかもしれない

「それで私たちが呼ばれた」

「そうだ。それにしても、詩が示していたのが、あの場所だとは思ってもよらなかった。ジラが頻繁に通っていたあそこだとはね」

「彼女は、なぜカサンドラの遺体のある、あの花畑へ通っていたの？」

「さあ。わからない。俺は行ったことがないからなあ。実際カサンドラには会ったことがないんだ」

「僕は、わかる気がするな。魔女は死んでも腐らない。本当に死んだのかわからない。確かめにくくにはいられなかった」

バートがそんなことをぽつりとつぶやく。

不安になり、死んでいることを確かめにいく。いっそ燃やしてしまえばいいのに、それはできない。

「彼女もカサンドラに取り憑かれていた。そして……死んでしまった」

泣き笑いを浮かべるドナルドを見て、本当に彼女が好きだったんだなと思った。

「死んでしまったじゃない。殺したんだろ？」

アーサーの声が冷たい。でもそれは違う。

「ドナルドさんはあのとき私とずっと一緒にいたわ。第一、狙っていたのは彼女の財産。それを自由に使えるのはカサンドラのフリをしたジラ一人。殺す意味なんてない」

ドナルドにジラを突き落とすのは無理だというのは、すでに証明されている。

「じゃあ、やはり事故だ。罰が当たったんだ」

その声に、メグは胸が苦しくなる。やはり、その言葉が彼からもたらされるのかと。

「本当に、事故だったのかしら」

言いながら、声の主を見る。彼はまだ気付いていないのだろうか。落ちたのがカサンドラでなくジラだったことに、みんなが翻弄されていた。ジラによってカサンドラが殺されていたことに、意識が傾いて忘れていく。

「何を言い出すんだい？ メグさん」

チャールズが目を見詰めている。

驚いた表情の中に、動揺の欠片を見つける。本当に気をつけて観察しなければ見逃してしまうほどの小さな変化。

「ジラが事故かどうかなんて、見ていた人にしかわからないわ」

言いながらも本当に追求する必要があるのかと、自分で自分に問いかける。これは完全に蛇足なのではないか、と。

それでも口は動くことをやめない。

なぜだろう？

「そりゃそうだ。事故かどうかは、当事者にしかわからないだろう。部屋には特に何も残っていなかったし」

「そうですね。部屋には何も残されていなかった」

誰か、お願いだから気付いて。そう叫びたい。

なぜメグなのか？ なぜ自分がこんな風に追い詰めなければならないのか。

と、背中が温かい。

ずっと、キィの手がメグの背中に当てられたままなのを思い出した。振り返ると彼は、メグをみつめる。

「嫌なら変わるよ」

優しい提案。

だが、メグは頭を揺らす。

だめだ、このままでは、彼に頼りっぱなしになってしまう。

結局人は、自分たちじゃ何もできない。そんな風に思われたくない。魔法使いは口では絶対にそうは言わないだろう。でも、少なからず思ってきたはずだ。彼の憑依はとても便利な能力で、人はそれを利用してきた。彼はずっと、人間の尻ぬぐいをし続けてきたのだ。

「大丈夫。最後まで、きちんとやれる」

そう言って、あらためてチャールズに向き直った。

少しだけ、彼は後ろへ身体を倒す。

「本来あるべき物が、カサンドラの西の塔にはなかった」

「メグちゃん？ いったい何を――そうか」

バートが気付いた。

「昨日、庭でカサンドラを見つけた後、私たちはずっと一緒に行動していました。彼女の部屋へ行き、西の塔に上がった。で、そのとき西の塔はヴィクターさんによって鍵を掛けられた。以降出入りすることはできなかったはず」

西の塔に上がるカサンドラを見た。その手には原稿があった。原稿は結構な紙の束だ。そうになると、こっそりあのとき持ち出すのは無理だった。

「今朝、アリバイを確認した。カサンドラが塔へのぼってから彼女に会いに行くことができたのは五人。アーサーさん、バートさん、チャールズさんに、サイモンさん。そしてク・ルウちゃん。その五人の中の一人、チャールズさんが、カサンドラの原稿を持っている」

「ははは、何を言い出すかと思えば、これは詩を解いて――」

そこでチャールズの顔色も変わった。

カサンドラとジラのことですっかり忘れていたのだろうが、詩は、本当のカサンドラの遺体の場所を示していた。

みんながそれを、思い出す。彼に、思い知らせるためにわかりきったことをもう一度言う。

「詩が示していた場所にはカサンドラがいた」

「それは解釈の一つだ。彼女が、偉大なる魔女カサンドラが作った詩だ。示す場所がいくつもある

ったかもしれないだろう！ その一つに、原稿を隠した」

「だめよ、無理よチャールズさん。だって……ジラはその場所がわからないから私たちに調べさせていたんだもの。カサンドラのフリをしていたジラは、餌である原稿を隠す場所をわかっていなかったのよ？」

原稿が隠されているはずがないのだ。

その隠す場所を、彼女は追い求めていたのだから。

「原稿は、西の塔が鍵を掛けられ封鎖される前に手に入れなければならなかった。いえ、カサンドラの遺体が見つかる前に手にしていなければ、その後西の塔から持ち出すチャンスはなかった。最後に会ったのは誰だと聞かれたときに、なぜ答えなかったの？ それとも、答えられなかったの？」

これで終わりにしたい。

チャールズが、すべてを話してくれれば、この辛い探偵役を降りることができる。

黙ったまま、彼は自分の手の中にある原稿を見つめた。

一度見せてもらったカサンドラの文字は、豪奢な容姿には似使わぬ、繊細な手だった。几帳面で、整列した読みやすい字で、こちらの作業が楽だと、先輩ジムがよく話してくれた。

その繊細な文字で、作品のタイトルが書かれている。

「『世界の鍵』、もう読んだんですか？」

「ああ。相変わらず最高の物語だったよ。読みふけて、おかげで朝部屋を片付ける暇もなく、原稿もベッドに放り出したままだった」

だからあのとき、みんなを部屋に入れる前に少しだけ時間をくれと言ったのか。

「カサンドラに、ヒントをもらいに行った。けど、彼女はヒントはないと取り合ってくれなかった。そのうち、あの窓に座って、彼女は……」

心底辛そうに話す姿に、みんなも押し黙る。

「じゃあ、やっぱり事故なのね？」

顔を上げたチャールズは、どこか嬉しそうだった。

「そうなんだ。あれは、事故だ」

空々しく事故だと言い切るチャールズに、メグもとうとう腹を決めた。

「この建物、普通より天井が高く作られているから、四階ぐらいの高さからジラは落ちた。でも、五階以下なら生きている確率はかなり高いわ。頭を打っていたら致命的かもしれないけど、普通人は頭をかばって落ちるものよ。ジラが落ちたとき、あなたはどうしたの？ 上から見て、彼女の生死を確認したの？」

メグの言葉に強い責めの色を見て、チャールズは再び表情を引き締める。

「ああ。もちろん上から覗いた。けど、彼女はぴくりとも動かなかった。あの高さだって、打ち所が悪ければ死んでしまう。だろう？」

「上から見ただけで、確かめることなくあなたは原稿を自分の部屋に隠しに行ったのね」

「それは、魔が差した。悪かったと思っている。でも、君だってわかるだろう？ 目の前に、カサンドラ最後の作品があったんだよ」

「わからない」

強い口調で切り捨てる。

「ジラの口元には血泡があった。彼女は、すぐに死んだわけじゃなかった。それに、あなたは事故だ事故だと言うけれど、絶対に事故じゃない」

「なぜ、そう言い切れる。そこまで僕を殺人犯にしたいのか？」

「したいわけじゃない。でも、事実だわ」

「何を証拠に！」

証拠。いつの時代も、どんなときも、求められる証拠。

「声よ」

「声？」

メグは頷いてみんなを見る。

「あのとき、ジラが倒れていた場所にみんなはなんでやってきたの？」

「ドナルド様の叫ぶ声が聞こえました」

イライザが言うと、エノーラとヴィクターは頷く。

そう、あのとき、食堂や厨房がある廊下の窓が開いていた。

「俺も、聞こえた」

アーサーやバートも思い出す。

「外で話している声って、案外聞こえるの。音の通りがいいのね、きっと」

イライザとのお喋りを、エノーラに止められたあのときを思い出す。

「それが何か？」

チャールズが眉間にしわを寄せ、苛立った様子でメグを睨む。

「ジラがあこの西の塔から事故で落ちたと言うのなら、なんで彼女の叫び声が聞こえなかったんだろう」

彼の表情が変わった。

今までの怒りと焦りを含んだ顔が、だんだんと感情をそげ落とし無表情になっていく。

「声を、上げる暇もなかった、……そんなところだろう」

言葉にも覇気がない。

「そうかな。私はそれよりも、すでに意識がもうろうとしている中落ちていったって方が納得できる。それにあなたは？」

「ぼく、が？」

「うん。駆け寄って、下を見て、呼びかけもしなかったの？」

とうとう、チャールズは黙り込んだ。

メグも目を閉じ下を向く。

失敗した。

これではダメだ。確実な証拠は一切ない。

危ないから近寄らないようにしていた窓に、人であり、高いところから落ちれば死ぬとわかっているジラが近づくだろうか？ すべて憶測であり、状況証拠にしかならない。メグの中では確

実であっても、法廷は有罪としないだろう。チャールズの口から、そのときの状況を引き出さなければならなかったのに、失敗してしまった。付け焼き刃の探偵役は、やはり無理だったのか。

チャールズもわかっているのだろう。頭の良い人だ。メグが追撃をやめた時点で、自分から吐露しなければ逃げ切れると知っただろう。でもこれ以上、手持ちの札はない。

「たかが人間にしては、よくやったと褒めておこう」

後ろからの偉そうな台詞に、反射的に眉間にしわが寄った。

そんな場合じゃない。わかっているのに、音がしそうなほどの勢いで振り返る。

「キィ？」

剣呑な色を帯びたメグの問いかけに、白の魔法使いは笑顔で両手を広げた。

「今なら自白ですむよ？ どうするんだ？」

「何を言うんですか、魔法使い殿」

「まだわからないのか？ さっきはこの小娘に指摘されるまで気付かず、今度は僕が答えを教えるまでその阿呆面をさらすのか」

やれやれだ、と言いながら、魔法使いは優雅な足取りでメグより前に出た。

ク・ルウはメグのスカートの裾をぎゅっと握っている。見下ろすと、彼女が笑った。初めて、本当の笑顔を見た。

キィはドナルドの横に立つ。

「本当にいいんだな？ 人間の世界は自白とそうでないのは刑の重さが変わってくるんだろう？

理由いかんによっちゃ情状酌量とやらも適応されるとか」

「言っている意味がわかりませんよ、魔法使い」

チャールズの声も、怒りを帯びてくる。

「そうか。なら仕方ない。おい、あの女の遺体をおまえはどこに隠した？」

え？ とみんなが一瞬考える。

そうだ。

カサンドラの遺体は見つかった。だが、まだジラの遺体は消えたままだ。腐敗し、魔女でないとかわかってしまうがために、ドナルドが隠した遺体がそう遠くない場所にある。

「堀か？ それが一番手っ取り早いからな。重しでもつけて沈めたか？」

彼の罪状は死体遺棄と共謀、なのか？ とにかく殺人よりも罪状は軽い。もうすべてばれてしまっているドナルドの口は軽かった。

そして、キィの言わんとすることを、メグもようやく理解した。

昨日死んだのは、カサンドラじゃない、ジラだ。

「つまり、だ。警察でもなんでもいいから呼び込んで、遺体を引き上げ【禁猟区】外に運び出す。そうすれば、ジラ本人に聞くことができる。普段は法外な値をふっかけるんだが、今回は大サービス。そうだな、カサンドラの最後の作品の著作権、でどうだ？ もちろん犯人を見ていなかったら無理だが、彼女の頭、頭部損傷だと僕が言ったのを覚えてるか？ 頭の後ろはもちろんだったが、ちょうどここら辺にもあったんだ」

シルクハットの左前のツバのあたりを指す。



「額の少し上。左側の、ね。他の顔の部分にたいした裂傷がないから、おかしいなとは思っていたんだよ。後頭部は、落下時にできた傷。重力が犯人。額の傷は、人間の犯人にやられたものじゃないか？ まあ、素人の浅はかな推理だが。左の額が殴られたとしたら、被害者はばっちり犯人の顔を見ている。確か、あんたは右利きだったな？」

ちゃっかりとんでもない物を請求する魔法使いに、メグは苦笑するしかなかった。だが、彼の力は必要ないだろう。すでに、犯人は落ちた。違うと抵抗する気力はすでに失われている。

チャールズの手から、カサンドラ最後の原稿が落ちていった。

隣に小さなぬくもりを感じてメグは目を開けた。ふわふわの金髪と、つやつやしている褐色の肌。両の目は閉じられていて、寝息が聞こえる。

遮光カーテンに遮られているが、小さな隙間から光が入ってきている。枕元の時計を見ると、もう朝の八時だった。あれから半日以上経っている。

ぷにぷにのほっぺたが可愛くて人差し指でつつくと、少女が寝返りをうつ。起こしてしまっ  
ては可哀想かなと思ひ、そっとベッドを抜け出した。

スリッパを履いて、ユニットバスへ向かう。シャワーまで浴びる気にはなれないが、せめて顔を洗い歯を磨こう。まだなんとなく重い頭を振って、ふらふらと歩き出す。

昨日はあの後、サイモンがみんなを乗せて街へ行った。

メグも一緒に帰ろうとしたが、実は歩き回った上に普段使わない頭をフル回転させたため疲れ果てていて、それがまたもや顔に出まくっていたようだ。みんなに一日休んで行けと進められた。サイモンの仕事を増やすことになるかと断ったのだが、結局引き留められて今に至る。正直その申し出はとてもありがたかった。ゆっくり寝たのが幸いして、かなり元気を取り戻していた。

すっきりしたいい気分で、今日の洋服を選んでみると、後ろでドアが開いた。

「いいかげんに起きないと、いつまでも片付かなくて迷惑だぞ」

もう慣れた。

叫ぶこともなく、流れるようなフォームで足下にあったブーツを投げつける。

ゴスッ、と鈍い音がして、残念なことに壁へ激突したらしい。彼は運動神経が良い。

「あっぶねえ！ 何考えてるんだよ。汚れるだろ」

痛いとかはないらしい。真っ白のトレードマークがやっぱり大切なのだろう。

「何度だって言い続けるけど、女性の部屋に突然入って来るな！」

洋服を選んでるところだったからいいものの、――やめよう。もう一足投げつけたくなる。しかもキィは絶対に気にしないだろう。そこがまた腹が立つ。

隣でこれだけ騒いでいれば、さすがにク・ルゥももぞもぞと起き出した。

「ほら、顔洗って朝食だ」

彼が少女を担いでユニットバスへ連れて行く間に、こちらも一気に着替える。ク・ルゥが昨日の夜から持ち込んでいたピンクのドレスを着ると、メグもちょうどブラッシングが終わる。ク・ルゥの髪を梳いて、三人はそろって廊下へ出た。

外はやっぱり天気がいい。ここは北の山のおかげで雨はすべて山に降って、こちらへは乾燥した空気が流れ込んでくるそうだ。雨は滅多に降らない。それなら、あの赤い丘で眠るカサンドラに、屋根がなくても平気だろう。

チャールズは、すべてを告白した。

カサンドラに否定され、カッとなってそばにあったトロフィーで殴りかかった。そのまま下に落ちてしまったと。

何を否定され、カッとなったかは彼の口から語られることはなかったが、後でこっそりバート

が教えてくれた。チャールズとカサンドラは一時期とても親しくしていたそうだ。そのときのよしみでヒントを求めても、彼が話していたのはカサンドラではない。ジラだ。彼女はそんなことは覚えていないと否定するだろう。昔付き合っていた女性が、新しい男を連れてきているのは、どんな気持ちか。彼らがどんな風な別れ方をしたかにもよるが、楽しいことではなかっただろう。

あの一番温厚そうなチャールズが、発作的に人を殴ってしまうというのには驚いたが、殺人の半分以上が衝動的なものだ。

「おはようございます。ミトラ様。よく眠れましたか？」

昨日は色々と思うところもあって元気のなかったヴィクターだが、一晩経ってすっかり元の調子に戻している。

「はい。おかげさまで朝までぐっすりでした」

席に着くとバケットを取る。スープは大好きなクラムチャウダーだった。

「朝、カサンドラ様に会いに行ってお参りました」

グレープフルーツジュースをメグの前に置きながら、ヴィクターが嬉しそうに言う。

「おっしゃられていた通り、しばらくはあのままにしておこうと思います」

彼の言葉ににっこりと頷く。

彼女もきっとそれを望んでいるだろう。

「ヴィクター、僕たちもこの後帰る」

「承知いたしました。甘い物など、お持ちしますか？」

「いや……ああ、少しだけ、な」

断りの言葉を述べようとしたが、隣でク・ルゥが身体全体で悦びを表し、大暴れしているので彼も諦める。

メグは、なんだか胸が苦しくなった。

寂しいんだなとわかっている。キィとク・ルゥにとって自分は単なる通過点でしかない。ここで別れば、もう二度と会うこともないだろう。

相手は魔法使いだ。

人間は滅多に魔法使いに出会うことはない。

「あんたもとっとと荷物をまとめろよ。僕はク・ルゥとおやつで精一杯だから手伝ってはやれない」

「え？」

なんのことだ？

「鋭いのか鈍いのかわからないやつだな。まあ、あの鋭いのがまぐれだったってやつか」

憎まれ口を叩かれても、まったくわからない。

イライラと舌打ちをして彼はフォークの先をメグへ向ける。

「サイモンを待って、また長々と車に乗っていくつもりなのか？ 僕らは北へ一時間歩いて飛ぶ。街か、あんたの家か、好きなところに連れてってやるよ」

「え！ いいの？」

「警察がサイモンと一緒に来るだろう。彼らはこれから忙しくなるのに、そこでまたあんたを送

るとか、その時間が惜しいだろう。下手すりゃ警察に掴まってしばらく帰れないぞ」

それは困る。

「お言葉に甘えます」

座ったまま深々と頭をさげると、ク・ルウがメグのおでこをなでた。

「おう。ただし、荷物は自分で」

コンパクトにまとめてきたから、一時間くらいならへっちゃらだ。

彼は肩にク・ルウと、エノーラとイライザが嬉々として詰め込んでいる重そうなバスケットを持っていかねばならない。もちろん、衣類等の荷物もあった。

美味しい朝食が終わると、すぐに三人は出発した。みんなに見送られ屋敷を後にする。

たった五日間だが、とても長く思える。初めて憧れのカサンドラに会って――これが偽物だったわけだが――、断筆宣言にうちのめされ、宝探しをして、今度は偽カサンドラの死に立ち会う。さらにその遺体が消えた。盛りだくさんすぎて、半年、一年とここで過ごしたような錯覚さえする。

北へ向かう道は、これまた頼りない道だ。魔法使いしか利用できないのだから当たり前と言えば当たり前。サイモンがたまに道を付けるため車を走らせていたと聞いた。そこを並んで歩いていると、北から気持ちのよい風が吹いてくる。

「そうだ。カサンドラが言っていた、娘を産む時期をずらしたことによって最悪の事態を引き起こされたって言っていたのは、あれは、自分の孫に殺されることだったのね」

「たぶん、な」

それでも、カサンドラはジラに殺されることを避けなかった。

「自分が殺されるならいいって思ったのかな？」

キィは反応しない。

死んでもいいと思っている魔法使いはいない。でも、自分が犠牲となることで、次の災厄を止められるのならば、甘んじて受けるというのだろうか。そもそも、娘可愛さに産む時期をずらし予言を変えた。カサンドラの行動は筋が通ってる。

「そう言えば、あの古き女王と新たな女王。あれはカサンドラとジラだったのね」

「だな」

終わってみればすべてが一致する。カサンドラはジラに殺された自分の遺体をキィに見つけて欲しかったのだ。詩を解読して、カサンドラを見つけて後を頼みたかった。古き女王と新たな女王。最後の一文は、キィに釘を刺しているのだ。

――いかなる氷も 新たな女王に触れること能わず

まさかジラまで死ぬとは思っていなかったのだろう。自分が死んだ後の予知はできなかったのかもしれない。もし自分の遺体を見つけても、新たな女王、ジラに余計なことをするなと念を押していた。

素直に殺されたカサンドラは、ジラの幸せを願っていたのだ。

悪意ある予知の悪意が、カサンドラだけではなくジラも飲み込んでしまうと知らずに。

そんなことを悶々と考えながら進んで行くと、突然魔法使いが声を上げる。

「やったー！」

何が起こったのか、気味が悪くて少し離れる。

「いったいどんだけ詰め込んだんだ。重いんだよ」

宙におやつのカゴを放り投げ、メグが駆け寄る暇なくかき消えた。

そうか、【禁猟区】を抜けたのだ。

「どうする？ 家か？ それともどこか駅にでも連れていけばいいのか？」

「うん……どうしよっかな」

駅にと言ったら、公衆の面前でいきなり現れるとかをやってのけそうで怖い。かといって、自宅はちょっとまずい気がする。前日なかなか眠れなくて、朝大慌てで出たままだ。ゴミ類は全部夜のうちに始末したが、脱いだ服やなんかが散らかり放題になっている。ここは色々と説明することもあるし、仕事場にすべきか。

「おい、ク・ルゥ？」

彼の呼びかけを背に、突然キィの肩から飛び降りると、少女は森の奥へ駆け出した。

「ク・ルゥちゃん？」

荷物を放り出して歩き出す魔法使いの後をメグも追う。

人が通っていない場所は本当に走りにくい。なかなか距離を縮められずにいたが、五分も行かずに彼女は止まった。

目の前には大きな岩があった。

「カサンドラか？」

「え？」

キィの言葉にク・ルゥが振り返り頷いた。

小さな手のひらを、メグの身長のお二倍はあるだろう岩へ伸ばす。

触れるか触れないかのところで、岩にある溝へ光が走った。少女の手の平から始まったオレンジ色の光は岩全体へと走って行く。

「何が？」

「たぶんー」

魔法使いが答えるよりも早くよく知る声が聞こえた。

「ク・ルゥ。久しぶりだ」

ジラの声。そして、半透明で後ろに岩が透けている彼女がいた。

「カサンドラが残っていたんだろう。魔法使いが死んでも残る魔法もある。ク・ルゥがスイッチだったんだな」

では、カサンドラなのか。本物の、本当のカサンドラ。

似ていた。色が薄いのではっきりしないところもあるが、とてもジラに似ていた。色も、顔立ちも姿も、うり二つと言っていい。ジラとは、声が少し違う気がする。どこか悲しみの色を帯びた、それでいて湿り気の少ないよく通る声。ジラの物ではない。でも、なぜか聞いたことがあ

る気がする。

「もう私を見つけてくれたかな？ もしまだなら、食堂の詩の通りに行ってくれればいい。あの子が困らないようにこっそりと、ね」

あの子がジラを指すのは明白だった。やはりカサンドラは、知らないのか。

「ク・ルゥとお茶を楽しめなくなるのが残念だけど、私は満足してるよ。そんな顔をしないでおくれ」

殺されたとは思えないようにこやかな彼女に、鼻の奥がツンとした。

「ク・ルゥがいるならおまけもいるね」

「相変わらず口が悪いよ、カサンドラ」

答えるはずがない相手に、キィはまぶしそうな表情で返す。

「あの子をいじめちゃだめだよ。それと、ク・ルゥを頼むね」

「当然だ」

「あの馬鹿げた願いもいつか叶う。絶対になんて言葉はないんだから。諦めたとき、永遠に叶わなくなる」

「わかってる」

一方的に話しているはずなのに、会話がきれいに成立していた。

眼を細めたカサンドラは優しく笑うとしゃがむ。ちょうどク・ルゥのいる位置に。

「最古の魔女、私の古き友人。先に逝くことを許しておくれ。あなたの長い生の退屈しのぎが一人消えることを、許しておくれ」

ク・ルゥの手が伸び、彼女の頬に触れる。

本当は触ることができないが、ちょうどその位置にそっと手を添える。

「さようなら」

カサンドラの声が消える。

姿も消えていた。

岩はただの岩になる。

「待ってよ、今なんかちょっと……」

「だからかっ！ そうか、だから君は僕と一緒に寝るのを嫌がったんだな。最初から知ってただろう。カサンドラがカサンドラじゃないってことを！ そうか、そーゆうわけなんだな。納得した。ようやく納得がいった。おかしいと思ったんだ。いつもはカサンドラの周りをうろちょろしてる君が、今回に限ってむしろカサンドラを避けている。で、何をとち狂ったのかこの小娘にべったりだ」

むちゃくちゃ言われてる気がするが置いておく。それよりも。

「待って待って、ねえ、最古の魔女って、誰？」

おかしい、今の流れではどう考えても――、

「ク・ルゥに決まってるだろ？」

「……ク・ルゥちゃんは、魔法使い、なの？」

メグが一言一言区切ってはつきりと問う。するとキィは眉をひそめた。

「何を今更」

今更も何も、ハナから聞いていない。

「カサンドラが紹介していただろ？ 友人のク・ルウって」

「確かに、そうだけど！」

思い出す。キィを有名な白の魔法使いと紹介し、その後に、友人のク・ルウと。あれは、ク・ルウに肩書きがなかったからではなく、キィはク・ルウのおまけでカサンドラの屋敷に来てただけで、主賓はク・ルウだったということか。

「でも、最古の魔女って、一番古い魔女ってことよね？ 一番年上の、でも、ク・ルウちゃんは どうみたってキィより十歳以上若く見えるわ！」

【禁猟区】の外ならば、外見を変えることくらい魔法使いにはお手の物だろうが、屋敷は【禁猟区】にあった。今もあのときも変わっていないのだから、これが彼女の本来の姿なのだ。

すると、キィは少し口を尖らせ悩む。

「んー、まあ、いいか？ ク・ルウ」

少女は彼の言葉に頷く。

「魔法使いは、魔法を使うと成長が遅れるんだ」

「そうなの？ 【禁猟区】のように？」

「いや、あそこは完全に止まる。少し違う。魔法をたくさん使えば使うほど、成長がゆっくりになる。本来は使おうと思わなければ使えないのが魔法なんだが、ク・ルウの場合自然に発動してしまうんだ。だから、魔法を使う回数を減らして成長具合の調整ができない。それで未だにこの姿だ。僕よりずっとずっと前からこの姿でいる」

それは、つまり、この中で一番年上がク・ルウだということか。

「触れる物の考えがわかってしまう読み取りの能力だ。結構、やっかいなんだ」

少女をまじまじとみつめる。彼女はむずがゆそうに首を傾げた。

「そっか……、凍れる騎士っていうのはク・ルウちゃんのことなのね」

ちゃん付けで呼ぶのも失礼なのかもしれないが、もうすっかりそれで慣れているし、今までも彼女は嫌がっていなかったのによしとする。

「そっか、そっか。氷の裳裾がキィなのか」

おまけ、だ。

「ま、そうだな」

本人もその扱いには不満なのだろう。だが、怒る相手ももうこの世にはいない。

そして気付いた。

――朝の夢はひそやかに

――凍れる騎士へいざなわれむ

生の夢。さっきカサンドラが言った、馬鹿げた願い。

「キィが前に言った、やりたいことって何？」

彼はじろりとこちらを見る。だから真っ直ぐ見返す。

きっとそうなのだろうと思ったが、彼の口から聞きたい。

「ク・ルウの、この自然発動の魔法をどうにかしたい。いつまで経っても彼女はこのままだ」  
やっぱり。

「せめて、僕に釣り合うくらいのレディーにつつうつつ、痛い！」

向こう臍を蹴られたキィが足を抱えて飛び跳ねた。

ク・ルウは、彼の娘なんかじゃなかった。一方的かどうなのかはまったくわからないが、……考えるのはやめよう。いろいろと不愉快になる気がする。白の魔法使いがロリコンだなんて！  
いや、そうじゃないのか？ 彼女の成長を願っているのだから。

「で、どうする？ どこに送る？」

「会社にお願ひできる？ その方が騒ぎにならないだろうし」

そう言いながらク・ルウを持ち上げ、ぎゅっと抱きしめる。

目の端に不機嫌そうなキィが映る。

こうすると読み取られちゃうのねと思うが、まあいいかと彼女の柔らかい抱き心地を堪能する。可愛くて、大好き。そんな思いを込めると、ク・ルウの小さな手もメグの首にいつそう絡みつく。

そう言えば噴水でク・ルウを抱きしめたときもキィはなぜか怒ってた。あれも単に嫉妬してたのか。わかると、笑える。

「また会えるかしら？ ク・ルウちゃん」

少女はこっくりと頷く。

良かった、とメグも笑う。

「そうだ、これ」

魔法使いが空中へ手を伸ばす。そして差し出された先にある物に目をむいた。

「な、なんで？」

「他の奴らが、あんたにとって言ったぞ？」

ほら、と押しつけられる。

そう、カサンドラの最後の原稿。

「でも、これは――」

そんな風に簡単に渡されても困る。これはカサンドラの物だ。

「君が好きにすればいいそうだ。カサンドラが喜ぶのは出版することだろう？」

「そうだけど！」

そうだけど、でもなんでメグがこれを渡されたのか。

「頑張ったで賞じゃないのか？」

「私、何にもできなかつたのに……」

「評価は周りが下す。本人がどう思ってようがな」

そう言って、キィはク・ルウを奪い返すとメグの頭を叩いた。ぽんぽんと、二度。軽く。なでてるつもりかもしれない。



「よくやったな」

褒めてもらえるなんて思ってもみなくて、言葉を返すことができず、呆然と彼らを見ることしかできなかった。

ク・ルウが手を振る。

キィが右手を空へ向けた。

「本が出たら一冊僕にも寄越せ」

風が吹く。その風は色を持っていて、目の前が白で遮られる。まるで魔法使いの衣装だ。彼のマントにくるまれてしまったように、世界が白くなる。

「待って、まだ」

別れが辛い。

どうすれば彼らを引き留められるか。引き留めて、何をしたいのかなんてわからない。それでもまだ、彼らと一緒にいたかった。

「待って、キィ！」

一際強く風が吹き、メグは自分を見失う。

色も、音も、匂いも、すべてを奪われ目を閉じる。

「……！ メグ、なんでおまえ」

音が遠くから戻って来た。すごく、すごく懐かしい声だ。煙草とインクと珈琲の匂い。慣れ親しんだ場所。目を開けると、必死で松葉杖を付き、前進するジムの姿が迫って来た。

「どうやって、あれ、今着いたのか？」

久しぶりの職場。ここは何も変わっていない。突然わいたメグに、みんなが戸惑いながら声を掛けてくる。

「先輩……っ」

なんだかもうわけがわからなくなって、両目のダムが決壊した。

ジムが泣かしたとあちこちから野次が飛ぶ。慌てて彼はメグを抱き留める。

「どう考えても違うだろう！ おい、メグ。どうしたんだよ」

「カサンドラの……」

ああ、とジムがつぶやき、野次が止んだ。

「カサンドラのことには聞いたよ。大変だったな」

よしよしと、頭をなでてくれる手がある。たくさんの人の気配が近づいて来る。

違う。そうではなく、寂しくて寂しくて、たまらない。

だから握りしめていた原稿を、ジムの胸に突き出す。

「カサンドラの、最後の原稿です」

周りがシンと静まりかえり、次の瞬間怒号のような叫びがわき上がる。

「おまえ、これ、どうして」

「早く本にしましょう」

早く本にして、二冊ください。

できたよと叫べば、きっと彼らが現れる。

だって、何でもできる魔法使いなんだから。たかが一人の呼びかけに、答えられないはずなんてないんだから。

カサンドラの遺作長編ファンタジックミステリー『世界の鍵』は、空前絶後の大ベストセラーとなった。

メグは特別手当と有給休暇をもらい、再びあの屋敷に行く。

書庫へ加える最後の本と、彼らに会うための鍵を持って。

了

## 魔女は二度死ぬ

<http://p.booklog.jp/book/55825>

著者：すずの

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/uzomuzo/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/55825>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/55825>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ